

—飯梨川中小河川改修事業に伴う—

# 富田川河床遺跡発掘調査概報

1988年3月

島根県 広瀬町教育委員会

—飯梨川中小河川改修事業に伴う—

# 富田川河床遺跡発掘調査概報

1988年3月

島根県 広瀬町教育委員会

## 例　　言

1. 本書は広瀬町教育委員会が島根県上木部から委託を受けて昭和61年度・昭和62年度に実施した飯梨川中小河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要である。
2. 遺跡は島根県邑智郡広瀬町字町帳・飯梨川側川敷に所在し、次のような調査組織・構成で行なった。

**調査指導者** 川原和人（島根県教育庁文化課埋蔵2係長）、西尾克己（同文化財保護主事）、内田律雄（同主事）、卜部吉博（同埋蔵1係文化財保護主事）、村上勇（島根県立博物館主任学芸員）

**事務局** 横地忠夫（教育長）、足立育夫（前教育次長）、守田泰昌（教育次長）、海原誠二（社会教育課長補佐）、鹿出久栄（同係長）

**調査員** 竹中哲（社会教育課文化財係主任主事）、内田雅己（宮田城廻遺跡群調査整備委員会嘱託）

**調査補助員** 曽田稔（島根県立松江農林高校非常勤講師）、藤井康二（島根大学生）、吉川栄司（法政大学生）、平井浩之（桃山大学生）

なお、調査及び整理にあたっては次の方々からご指導を賜った。（敬称略、順不同）  
今井修平、梅本博志、小澤一弘、尾多賀晴悟、金式正紀、柴田龍司、鳴谷和彦、鰐柄俊夫、榎原芳秀、白神典之、続伸一郎、内藤若史、中原亮、長谷川一英、東中川忠美  
間曉慶子、森村健一、柳瀬昭彦

3. 遺物整理には発掘担当者、調査補助員の他に次のもののが参加して行なった。  
富沢アツ子、稻田安恵、水谷恵子、鹿田フミ子、荒木巖
4. 掘取図面は内田雅己、曾田稔、藤井康二、吉川栄司、平井浩之、富沢アツ子、稻田安恵、竹中哲の作図・製図にかかり、写真は内田、竹中の撮影になるものである。なお陶磁器の分類については村上勇氏の手を煩らわした。
5. 本書で使用した写真のうち航空写真は、アジア航測（株）の提供を受けた。
6. 遺構は、掘立柱建物跡SB、土壤SK、溝状遺構SD、その他SXの略号を遺構番号の前に付し、方位は磁北を示す。
7. 本書の執筆は、川原和人、西尾克己の協力を得て内田雅己、竹中哲が行なった。
8. 出土遺物は、広瀬町教育委員会で保管している。

## 目 次

I、調査に至る経過		1
II、位置と歴史的環境		3
III、調査の概要		4
(1) 昭和61年度調査		4
1. 調査区第Ⅰ区		4
2. 調査区第Ⅱ区		15
(2) 昭和62年度調査		32
1. 調査区第Ⅰ区		32
2. 調査区第Ⅱ区		53
IV、まとめ		71

## 挿 図 目 次

第1図 富川河床遺跡位置図		2
第2図 昭和61年度富川河床遺跡調査区位置図		5
第3図 第Ⅰ区第1遺構面井戸跡(SE01)実測図		6
第4図 第Ⅰ区第1遺構面井戸跡(SE02)実測図		6
第5図 第Ⅰ区第1遺構面井戸跡(SE03)実測図		6
第6図 第Ⅰ区遺構全体図		7・8
第7図 第Ⅰ区第1遺構面集石遺構(SG01)実測図		9
第8図 第Ⅰ区第1遺構面土壤(SX01)実測図		10
第9図 第Ⅰ区第1遺構面土壙(SX02)実測図		10
第10図 第Ⅰ区第1遺構面土壙(SX03)実測図		11
第11図 第Ⅰ区第1遺構面SX05実測図		11
第12図 第Ⅰ区第2遺構面測跡(SG02)実測図		11
第13図 第Ⅱ区遺構全体図		13・14
第14図 第Ⅱ区第1遺構面石列遺構実測図		15
第15図 第Ⅱ区第3遺構面土壤(SX06)実測図		15
第16図 第Ⅱ区堆積砂層出土遺物実測図		19

第17図	第Ⅰ区第1遺構面SX02・SE02・集石遺構出土遺物実測図	20
第18図	第Ⅰ区第2層出土遺物実測図	21
第19図	第Ⅰ区第2遺構面SX01・P01出土遺物実測図	22
第20図	第Ⅰ区第3層・第3遺構面SI01・SI02出土遺物実測図	23
第21図	第Ⅰ区第3遺構面SI05・SI08・SI01・SI02出土遺物実測図	24
第22図	第Ⅰ区第4層出土遺物実測図	25
第23図	第Ⅰ区第4遺構面出土遺物実測図	26
第24図	第Ⅰ区堆積砂層出土遺物実測図	27
第25図	第Ⅰ区堆積砂層出土遺物実測図	28
第26図	第Ⅰ区第1層・第2層・第3層出土遺物実測図	29
第27図	第Ⅰ区第3層出土遺物実測図	30
第28図	昭和49年度調査時の第1遺構面全体図	32
第29図	昭和62年度富田川沖休道跡調査区位置図	33・34
第30図	第Ⅰ区第2遺構面検出遺構全体図	35・36
第31図	第Ⅰ区第1遺構面方形櫛状石積施設実測図	37
第32図	第Ⅰ区第1遺構面曲物遺構実測図	38
第33図	第Ⅰ区第1遺構面石列遺構実測図	39
第34図	第Ⅰ区第1遺構面壺実測図	40
第35図	第Ⅰ区第1遺構面土壙実測図	40
第36図	第Ⅰ区第2遺構面井戸跡(SE009)実測図	41
第37図	第Ⅰ区第2遺構面井戸跡(SE001)実測図	42
第38図	第Ⅰ区第2遺構面井戸跡(SE010)実測図	43
第39図	第Ⅰ区第2遺構面土壙(SK40)実測図	43
第40図	第Ⅰ区第2遺構面集石遺構実測図	44
第41図	第Ⅰ区第2遺構面集石遺構実測図	45
第42図	第Ⅰ区第2遺構面集石遺構実測図	46
第43図	第Ⅰ区第2遺構面実測図	46
第44図	第Ⅰ区第2遺構面土壙(SK50)実測図	47
第45図	第Ⅰ区第2遺構面実測図	48
第46図	第Ⅰ区第2遺構面実測図	49
第47図	第Ⅰ区遺構全体図	51・52
第48図	第Ⅰ区第1遺構面石列遺構実測図	53

第49図 第Ⅰ区第1遺構面上師質土器韌り実測図	54
第50図 第Ⅰ区表土層・第1層出土遺物実測図	58
第51図 第Ⅰ区第1層出土遺物実測図	59
第52図 第Ⅰ区第1層出土遺物実測図	60
第53図 第Ⅰ区第1層出土遺物実測図	61
第54図 第Ⅰ区第1遺構面・方形溜附状石積施設・第2遺構面出土遺物実測図	62
第55図 第Ⅰ区第2遺構面SD02・05・06・SK03・07他出土遺物実測図	63
第56図 第Ⅰ区第2遺構面SK23・41・48・53出土遺物実測図	64
第57図 第Ⅱ区堆積砂層山上出土遺物実測図	65
第58図 第Ⅱ区第1層・第1遺構面出土遺物実測図	66
第59図 第Ⅱ区黒灰色砂質土層SK10・SX01・02・03・04出土遺物実測図	67
第60図 第Ⅱ区第1遺構面上師質土器韌り・第2遺構面出土遺物実測図	68

## 図 版 目 次

- 図版 1 富田川河床遺跡全景
- 図版 2-1 昭和61年度調査区第Ⅰ区遠景(西から)
- 図版 2-2 同(北から)
- 図版 3-1 第Ⅰ区第1遺構面検出状況(北から)
- 図版 3-2 第Ⅰ区第1遺構面井戸跡(SE003)
- 図版 4-1 第Ⅰ区第1遺構面井戸跡(SE002)
- 図版 4-2 第Ⅰ区第1遺構面井戸跡(SE001)
- 図版 5-1 第Ⅰ区第1遺構面井戸跡(SE004)
- 図版 5-2 第Ⅰ区第1遺構面土廣(SX003)
- 図版 6-1 第Ⅰ区第1遺構面集石遺構(SG001)
- 図版 6-2 第Ⅰ区第1遺構面集石遺構(SG001)
- 図版 7-1 第Ⅰ区第2遺構面側跡(SG002)
- 図版 7-2 第Ⅰ区第2遺構面井戸跡(SE005)
- 図版 8-1 第Ⅰ区遺構全体写真(北から)
- 図版 8-2 第Ⅰ区第3遺構面石列遺構(東から)
- 図版 9 第Ⅰ区堆積砂層出土遺物

- 図版10 第Ⅰ区第1遺構面SX02・SE02・集石遺構出土遺物
- 図版11 第Ⅰ区第2層出土遺物
- 図版12 第Ⅰ区第2遺構面SX01・P01出土遺物
- 図版13 第Ⅰ区第3層・第3遺構面・S101・S102出土遺物
- 図版14 第Ⅰ区第3遺構面S105・S108・S102出土遺物
- 図版15 第Ⅰ区第4層出土遺物
- 図版16 第Ⅰ区第4遺構面出土遺物
- 図版17-1 昭和61年度調査区第Ⅱ区遠景(西から)
- 図版17-2 同 (南から)
- 図版18-1 第Ⅱ区第1遺構面検出状況(南から)
- 図版18-2 第Ⅱ区第1遺構面構造遺構検出状況(西から)
- 図版19-1 第Ⅱ区第2遺構面検出状況(南から)
- 図版19-2 第Ⅱ区第2遺構面石列遺構検出状況(東から)
- 図版20-1 第Ⅱ区第2遺構面集石遺構検出状況(南から)
- 図版20-2 第Ⅱ区第2遺構面柵状遺構検出状況(南から)
- 図版21 第Ⅱ区堆積砂層出土遺物
- 図版22 第Ⅱ区堆積砂層出土遺物
- 図版23 第Ⅱ区第1層・第2層・第3層出土遺物
- 図版24 第Ⅱ区第3層出土遺物
- 図版25-1 昭和62年度調査区第Ⅰ区遠景(東から)
- 図版25-2 第Ⅰ区第1遺構面検出状況(南から)
- 図版26-1 第Ⅰ区第1遺構面振立柱建物跡(SB003)(西から)
- 図版26-2 第Ⅰ区第1遺構面籠検出状況
- 図版27-1 第Ⅰ区第1遺構面植物種子検出状況
- 図版27-2 第Ⅰ区第1遺構面柵状石積施設
- 図版28-1 第Ⅰ区第1遺構面曲物遺構検出状況
- 図版28-2 第Ⅰ区第1遺構面曲物検出状況
- 図版29-1 第Ⅰ区第1遺構面円形石紅施設検出状況
- 図版29-2 第Ⅰ区第2遺構面集石遺構検出状況
- 図版30-1 第Ⅰ区第2遺構面洞跡検出状況
- 図版30-2 第Ⅰ区第2遺構面井戸跡(SE011)
- 図版31 第Ⅰ区表土層・第1層出土遺物

- 図版32 第Ⅰ区第1層出土遺物
- 図版33 第Ⅰ区第1層出土遺物
- 図版34 第Ⅰ区第1層出土遺物
- 図版35 第Ⅰ区第1遺構面・方形溜枡状石積施設・第2遺構面他出土遺物
- 図版36 第Ⅰ区第2遺構面 SD02・SD05・SK02・SK03・SK40 他出土遺物
- 図版37 第Ⅰ区第2遺構面 SK23・41・48・53 出土遺物
- 図版38-1 昭和62年度調査区第Ⅰ区遠景(西から)
- 図版38-2 第Ⅰ区第1遺構面検出状況
- 図版39-1 第Ⅰ区第1遺構面土師質土器溜り検出状況
- 図版39-2 第Ⅰ区第1遺構面土壤(SK01) 検出状況
- 図版40-1 第Ⅰ区第1遺構面石製遺構検出状況
- 図版40-2 第Ⅰ区柱跡(SE012)
- 図版41-1 第Ⅰ区第1遺構面墓地跡
- 図版41-2 第Ⅰ区柴廣(SX02) 検出状況
- 図版42-1 第Ⅰ区SX02供献土器検出状況
- 図版42-2 第Ⅰ区SX03 検出状況
- 図版43 第Ⅰ区堆積砂層出土遺物
- 図版44 第Ⅰ区第1層・第1遺構面出土遺物
- 図版45 第Ⅰ区黒灰色砂質土層・SK10・SX01・02・03・04 出土遺物
- 図版46 第Ⅰ区第1遺構面土師質土器溜り・第2遺構面出土遺物

## I 調査に至る経緯

富田川河床遺跡は、島根県能義郡広瀬町富田に所在する国の指定史跡である富田城跡の立地する月山の西方を大きく迂回して流れる飯梨川の河床に位置する。当遺跡は、中世から近世初頭にかけて割據した、尼子・毛利・堀尾三氏の居城であった富田城の城下町遺跡である。

堀尾氏によって城が松江に移された後も、富田城下の町並みは存続していたが、江戸時代初期にこの地を襲った飯梨川の大洪水によって流路が変わってしまったため、頓時にその姿を河床下に消してしまった。そのため、当時の姿を偲ばせるものは、江戸時代中期以降に作成されたといわれる「富田城絵図」によってしか、往時の面影を伺うことはできなかった。

その町並みが飯梨川の河床に露れるきっかけとなったのは、昭和30年代飯梨川上流部に相次いで建設された砂防用の床止め堰堤やダムによって、それまで絶えず上流から供給されていた飯梨川河床一帯の砂が下流へ流出しなくなったため、下流への砂の供給が止まり、それによって逆に、これまで厚く堆積して町並み造構を覆い隠していた当地域の砂が徐々に下流へ流出し始めるようになった。このため、砂層が次第に薄くなってゆき、昭和40年代に入ると、埋没していた石組みの井戸跡や石列による溝等が少しづつ流路内に露出し始めたところからである。

ところが、昭和48年の異常早魃で流水が減少し、新宮橋下流約500mの河床に広範囲にわたり石積井戸や建物跡等が露呈したため、広瀬町教育委員会が露出した部分についての緊急調査として、写真撮影等の記録保存を実施した。

そして、昭和49年から51年までの3ヶ年にわたり、広瀬町教育委員会が新宮橋下流域の一部の発掘調査を実施した。この成果は、「富田川河床遺跡発掘調査報告」（昭和52年3月広瀬町教育委員会富田川河床遺跡調査団）として刊行されている。

また、昭和53年からは、島根県土木部が行なう飯梨川中小河川改修事業に伴って、島根県教育委員会が改修工事予定地内を発掘調査し、幹道と思われる道路に沿って走る大きな石積溝や建物跡等を検出した。これらの記録は、「富田川」—飯梨川河川改修に伴う富田川河床遺跡発掘調査—(4)(1984年3月)等として、島根県教育委員会より公刊されている。

さらに、昭和59年には、台風災害による特別災害復旧事業に伴う発掘調査を、島根県土木部より委託を受けた広瀬町教育委員会が、工事区域である新宮橋下流約1kmの飯梨川右岸で実施した。この調査では、多数の遺物を検出しており、広瀬町教育委員会より「富田

川河床遺跡」一河川災害復旧事業に伴う（1984年3月）として発刊されている。

これに続く昭和60年には、台風災害に係る特別災害復旧事業に伴う発掘調査と、飯梨川中小河川改修事業に伴う発掘調査を広瀬町教育委員会が実施し、当時の庶民の生活を彷彿とさせるような遺構や遺物を検出した。その結果は、「富田川河床遺跡」一河川災害復旧事業に伴う発掘調査報告（1986年3月）と、「飯梨川中小河川改修事業に伴う「富田川河床遺跡発掘調査概報」として広瀬町教育委員会より刊行されている。

今回の概報は、昭和61年に島根県土木部から出された低水敷津設置のための飯梨川中小河川改修工事に伴う発掘調査と、昭和62年に飯梨川の流下断面の確保と、河道の安定を図るために河床低下対策として、島根県土木部により計画された飯梨川中小河川改修事業と共に伴って、委託された広瀬町教育委員会が実施した発掘調査の概要を記したものである。



第1図 富田川河床遺跡位置図  
(1. 昭和 61 年度調査区 2. 昭和 62 年度調査区)

## I 位置と歴史的環境

富田川河床遺跡は、尼子・毛利・堀尾の三氏が居城し、中世から近世初頭にかけて出雲国を中心とした富田城の城下町遺跡で、中国山地に源を発して中海へ注ぐ、総延長約40kmの飯梨川河床に所在し、現在までに知られている範囲は、分布調査や発掘調査によって確認された遺構から、富田橋から下流へ約2.5kmまでである。

富田城の創設時期については諸説があり、伝説では平安末期の築城とされるが、事実は不明である。「富田城」という名の史料上の初見は「明徳記」で、南北朝期には「富田の関所」と呼ばれ、富田城を中心とする動きが活発になるのは応仁年間の出雲守護代尼子清定からだが、子の経久は守護京極氏から独立して戦国大名へと成長し、16世紀初頭に中国地方に霸を唱えた。だが、その勢力拡大は軍事行動によるものが多く、充分な支配体制を築けなかったことと、富田が出雲の東に偏していたために、本拠地出雲国の国人領主層を完全に掌握できなかったことから、大内氏との抗争で疲弊し、永禄9年(1566)毛利氏に屈した。

毛利氏の支配は、統一政権(豊臣氏)との講和によって一時安定したかに見えたが、関ヶ原の合戦(1600年)によって防長2ヶ国以外の領地を没収されてしまい、毛利氏による出雲の支配は35年間で終わり、代って堀尾氏が出雲国に入部した。このように、当時の富田は出雲国を中心として、戦国時代の進展と共に町の形成が進んでいったと思われる。

だが、堀尾氏は当地で近世的支配体制を築くには問題があるとして、慶長16年(1611)松江へ移城し、それと共に出雲国の中核的地位を失った富田の町は衰微し始め、寛文6年(1666)大洪水で河床下に没した。この原因の一つには、良質の鉄分を含む花崗岩の風化層からなる山々が存在する飯梨川上流域で、古くから営まれてきた「たたら」製鉄用の砂鉄を探るために「鉄穴流し」と呼ばれる流水を利用して山肌を川へ切り崩す方法が盛んに行なわれたことで流域内に大量の砂が堆積し、川床が上昇したからである。

富田川河床遺跡周辺には、富田城をはじめこれに関係する遺跡が多く見られ、周囲の山塊地帯に点在する京羅木山・勝山・三笠山・寺山の各砦跡や、城の南北に延びる塩谷・新宮谷と、城の西に位置する菅谷がある。これらの谷は先年発掘調査され、屋敷跡等の遺構が検出されたが、中でも菅谷については大手口と推定されるようになった。この他、塩谷・新宮谷には寺院跡も多く、現在その名がわかっているものだけでも洞光寺・宗松寺・万松院・懸持寺・新寺・中光寺・長楽寺・明星寺等がある。

また、古墳時代の遺跡としては、福頼・石原の古墳群及び本郷上口・八幡山・合頭成の横穴群の他、官尾1・1遺跡等の集落跡も知られているが、数はそれ程多くはない。

## III 調査の概要

### (1) 遺構（昭和61年）

昭和61年度は、新宮橋の橋架下を含む橋の上下流側110mにわたる護岸工事の予定地域を調査したが、新宮橋の真下については、昭和54年の橋架付け替え工事の際に事前調査がなされており、今回の調査対照地域から除外したため、今回の調査実施区域は、橋の上下流側を合わせた1,540mである。

なお、調査は新宮橋の上流側を第Ⅰ区、下流側を第Ⅱ区として実施した。

#### 1. 第Ⅰ区

この調査区は、昭和60年調査区域の下流側端部から新宮橋までの間を調査し、旧新宮橋のあった地点も範囲に入っている。現新宮橋と旧新宮橋の周辺は、かなり搅乱を受けていたが、それでも4つの遺構面を確認することができた。しかし、第4遺構面については、流水による搅乱が激しく、明確な遺構を確認していない。

##### 第1遺構面

表上卜約80cmで確認した遺構面だが、流水の影響を受け、遺構の残存状況はあまり良くなかった。それでも、建物区画3(SB01.02.03)・井戸跡3(SE01.02.03)・土壙5(SX01.02.03.04.05)・集石遺構1(SG01)を検出している。

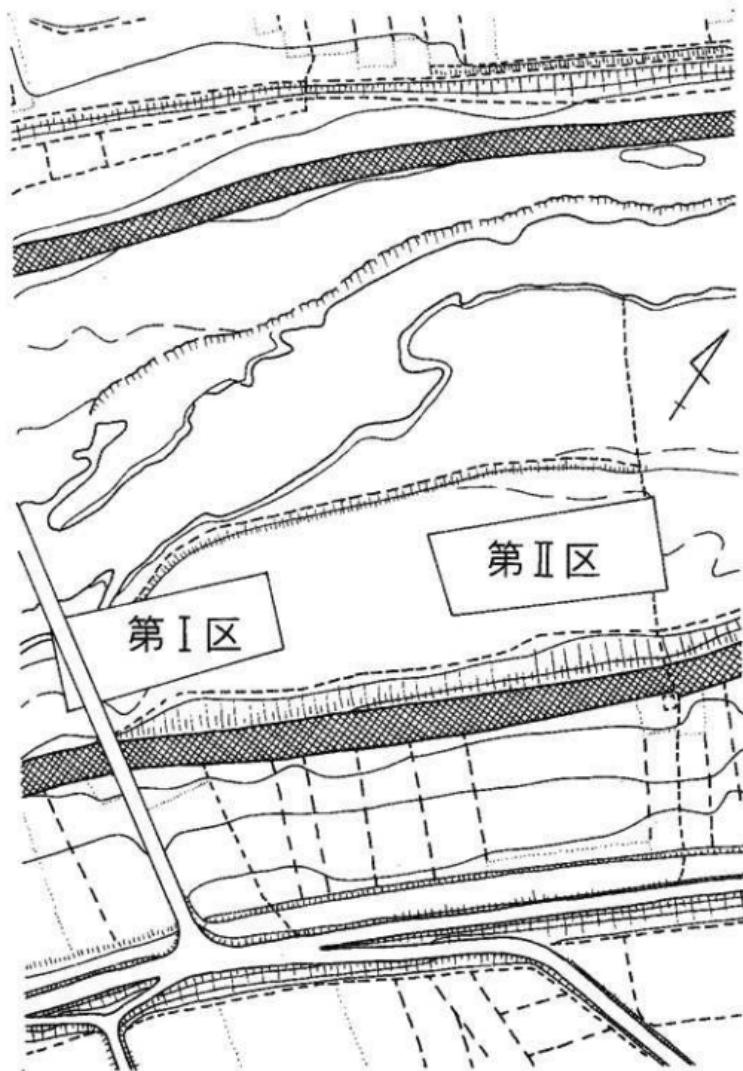
SB01 調査区上流側に位置し、周囲より10cm程高い基壇状になった8.5m×6.5mの広さを持つ方形形状を呈しており、3ヶ所で建物の基礎と思われる石と、掘り形状の落ち込みを検出している。

SB02 SB01の北東で検出した周囲より10cm程度高くなった方形基壇状を呈している。南側が破壊されているため、全容は不明だが、残存部から推定すると10m×6.5m程度の広さを持つようで、礎石と思われる石が1つ残る。

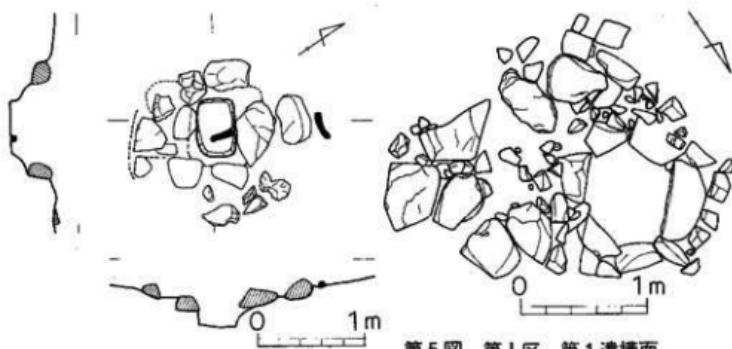
SB03 SB02の東隣りに在り、周囲より10cm程低くなっている。かなり破壊されているが、残存部は8.5m×4.5mの方形を呈し、礎石と思われる石が2つ検出された。

SE01 SB01とSB02の間に位置し、内径50cm×35cm・深さ30cmを測る平面調丸長方形を呈す落ち込みの周囲に、20~60cm大の石による石敷き状の石組みが見られる。落ち込み内には何も検出されていないが、恐らく井形に入れられていたと思われる。

SE02 調査区南東側に位置し、内径50cm×45cmの平面歪んだ五角形を呈する石積井戸だが、内径が小さいため完掘できなかった。周囲には、鶏卵大から拳大の石からなる石敷きがあり、南東側には踏み石状の大きな石も見られる。

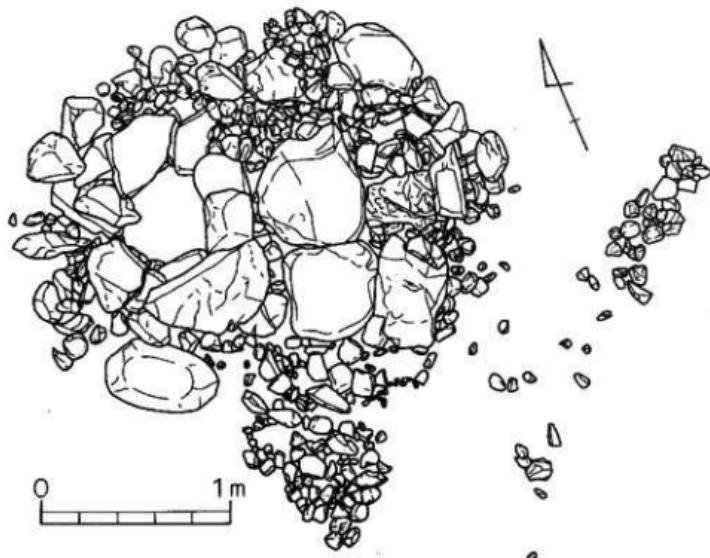


第2図 昭和61年度富田川河床遺跡調査区位置図

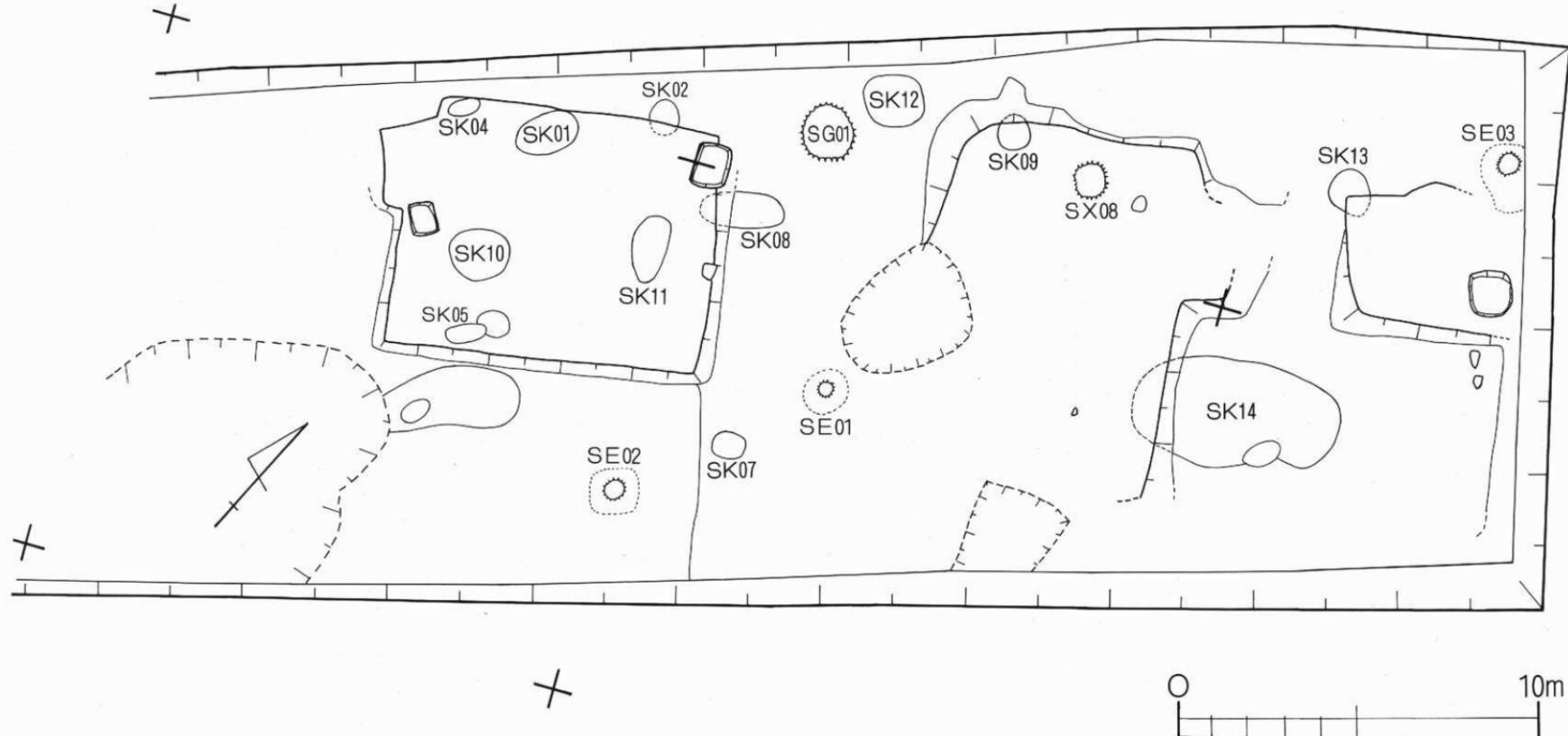


第3図 第1区 第1遺構面  
井戸跡(SE01)実測図

第5図 第1区 第1遺構面  
井戸跡(SE03)実測図



第4図 第1区 第1遺構面 井戸跡(SE02)実測図



第6図 第Ⅰ区 遺構全体図

SE03 調査区北東側に位置し、内径75cm×65cmの平面六角形を呈する石積井戸である。内部の残存状況は良好だったが、湧き水が激しく完掘していない。周囲には石が散乱しており、石敷きのあった可能性もある。

SK01 調査区中央附近で検出した土壌で、内径1.7m×1.2m・深さ0.4mを測る平面両丸長方形を呈し、内部に人頭大から拳大の石が入っていた。

SK02 SK01の北東に位置し、内径1m×0.9m・深さ0.7mを測り、平面円形を呈する土壌である。

SK03 SE01の東に位置し、内径2.5m×2.3m・深さ0.2mの平面稍円形を呈す土壌である。

SK04 SB01の南西で検出した、内径0.8m×0.7m・深さ0.2mの平面歪んだ五角形を呈し、周囲に20~50cm大の石が数個配される土壌である。

SK05 調査区南東側で検出した土壌で、内径1m×0.6m・深さ0.4mの平面長円形を呈し、周囲に親指大から人頭大の石が配されている。

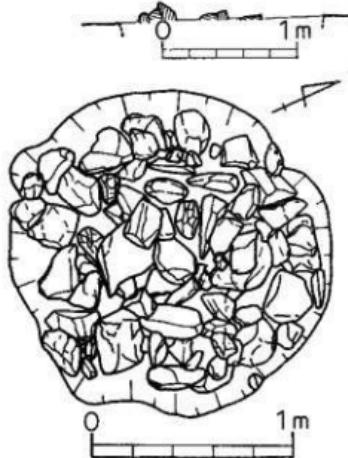
SG01 調査区中央附近で検出した遺構で、内径1.6m×1.6mの掘り形の中に10~30cm大の石が大量に入っており、集石の下には内径1.1m×0.9m・深さ0.7mの石積土壌が見られる。石積みは2段程度残り、1段目は全て長円形の石を縦にしている。上部が破壊されはっきりしないが、輪跡とも考えられる。

#### 第2遺構面

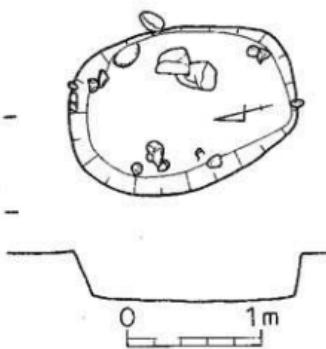
第1遺構面下約20cmで確認した遺構面で、土壌4 (SK06・07・08・09)・石列1(SZ01)・集石遺構2 (SS01・02)・杭列1(SP01)・廻跡1 (SG02)を検出した。

SK06 調査区中央附近で検出した土壌で、半分程度が調査区外のため全容は不明である。検出部は、内径0.9m×0.5m・深さ0.5mの平面半円形を呈している。

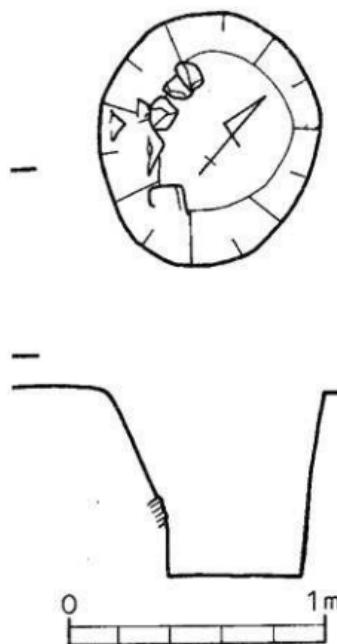
SK07 調査区中央附近に位置し、内径0.7m×0.6m・深さ0.2mの平面歪んだ台形を呈す



第7図 第1区 第1遺構面  
集石遺構(SG01)実測図



第8図 第Ⅰ区 第1遺構面  
土壤(SK 01)実測図



第9図 第Ⅱ区 第1遺構面  
土壤(SK 02)実測図

上層である。

SK08 調査区中央附近に位置し、内径  
 $0.8m \times 0.6m$ ・深さ $0.4m$ を測る平面細長い

五角形を呈する土壙で、内部に人頭大の石が  
多量に入っていた。

SK09 SK08の北東に位置し、内径 $0.7m$   
 $\times 0.7m$ ・深さ $0.3m$ を測り、平面正んだ方  
形を呈す土壙である。

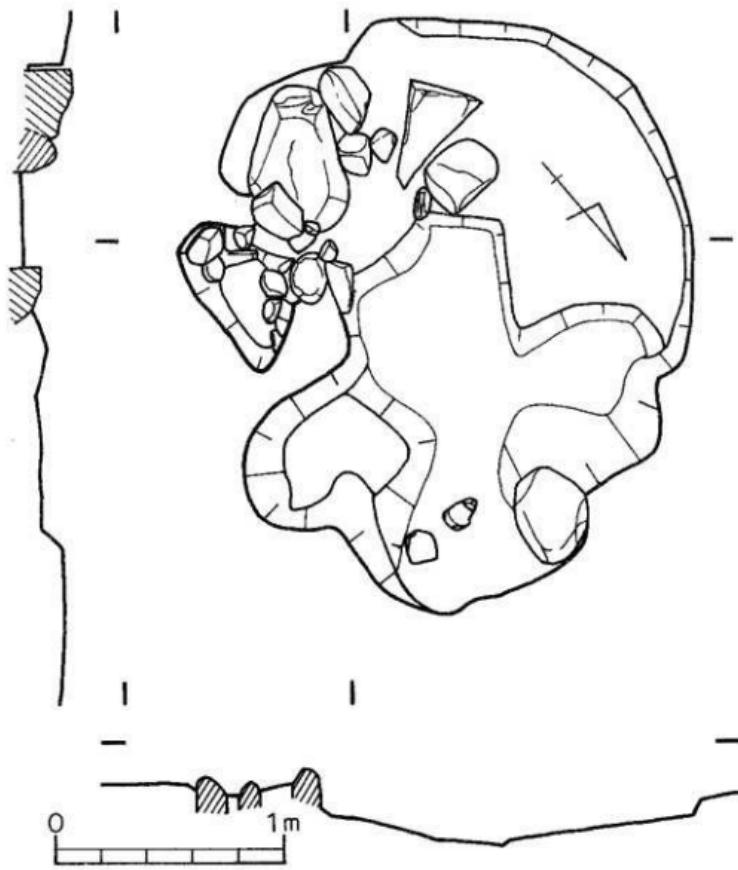
SZ01 SK07の南西に位置し、検出長 $5m$ を測る北西から南東へ延びる石列である。  
南東側は旧新宮橋周辺の擾乱部で消え、北  
西側は調査区外へ延びているため全容は不  
明である。主に人頭大の石を使うが、きれ  
いに並ぶ所は全くなく、幅 $1m$ の中に石が  
散乱する状態で検出しておらず、石礫状にな  
っていたのかも知れない。

SS01 SK08の南西で検出した集石遺構  
で、人頭大の石が $1.5m \times 1.3m$ の範囲に広  
がっている。平面ほぼ円形を呈し、中央に  
はあまり石が見られないことから、あるいは  
は円形石組だったかも知れない。

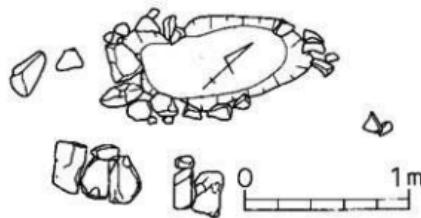
SS02 調査区下流側に位置し、 $10\sim30cm$   
大の石が $1.3m \times 0.8m$ の範囲に広がるが、  
調査壁の近くで検出しておらず、調査区外へ  
広がっていることも考えられる。

SP01 調査区中央附近に位置し、北西調  
査区外から南東へ延びる杭列である。検出  
長 $1m$ ・杭径 $2cm$ 程で、 $20cm$ 前後の間隔で  
並んでおり、生垣か柵と思われる。

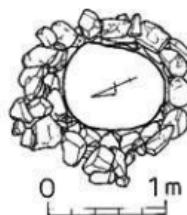
SG02 調査区中央附近に位置し、内径  
 $0.6m \times 0.6m$ ・深さ $0.5m$ の平面円形を呈し、  
 $10\sim30cm$ 大の石を積んでいる。



第10図 第I区 第1遺構面 土壌(SK 03)実測図



第11図 第I区 第1遺構面(SK 05)実測図



第12図 第I区 第2遺構面  
測跡(SG 02)実測図

### 第3遺構面

第2遺構面下約30cmで確認した遺構面で、土壤5（SK10・11・12・13・14）・石列2（SZ02・03）・集石遺構3（SS03・04・05）・建物跡1（SB04）を検出した。

SK10 調査区上流側で検出した土壤で、内径1.7m×1.3m・深さ0.5mを測る平面隅丸五角形を呈し、南西側で柱穴と切り合っている。

SK11 SK10の北東に位置し、内径1.8m×0.9m・深さ0.4mを測る平面歪んだ隅丸三角形を呈する土壤である。

SK12 調査区下流側に位置し、内径1m×0.8m・深さ0.3mを測る平面歪んだ長円形を呈する土壤である。

SK13 SK12の北東で検出した土壤で、内径1.3m×1m・深さ0.4mを測り、平面歪んだ長円形を呈している。

SK14 SK13の南東に位置する土壤で、内径5.8m×3.1m・深さ0.8mを測り、平面歪んだ三日月状の長円状を呈している。

SZ02 SK12の北東で検出した北西から南東へ延びる石列で、掌大の石を集石状にしている。検出長3.5mで、両端部へ行く程石の数が少なくなる。

SZ03 SZ02の北東隣りに位置し、調査区を横断するように北西から南東調査区外へ延びており、主に入頭大の石からなる石列である。検出長10mだが、きれいに並んでいるわけではなく、集石状になっている。

SS03 SK10の南に位置しており、10~30cm大の石が1.2m×0.5mを測る南北に細長い範囲で検出された。

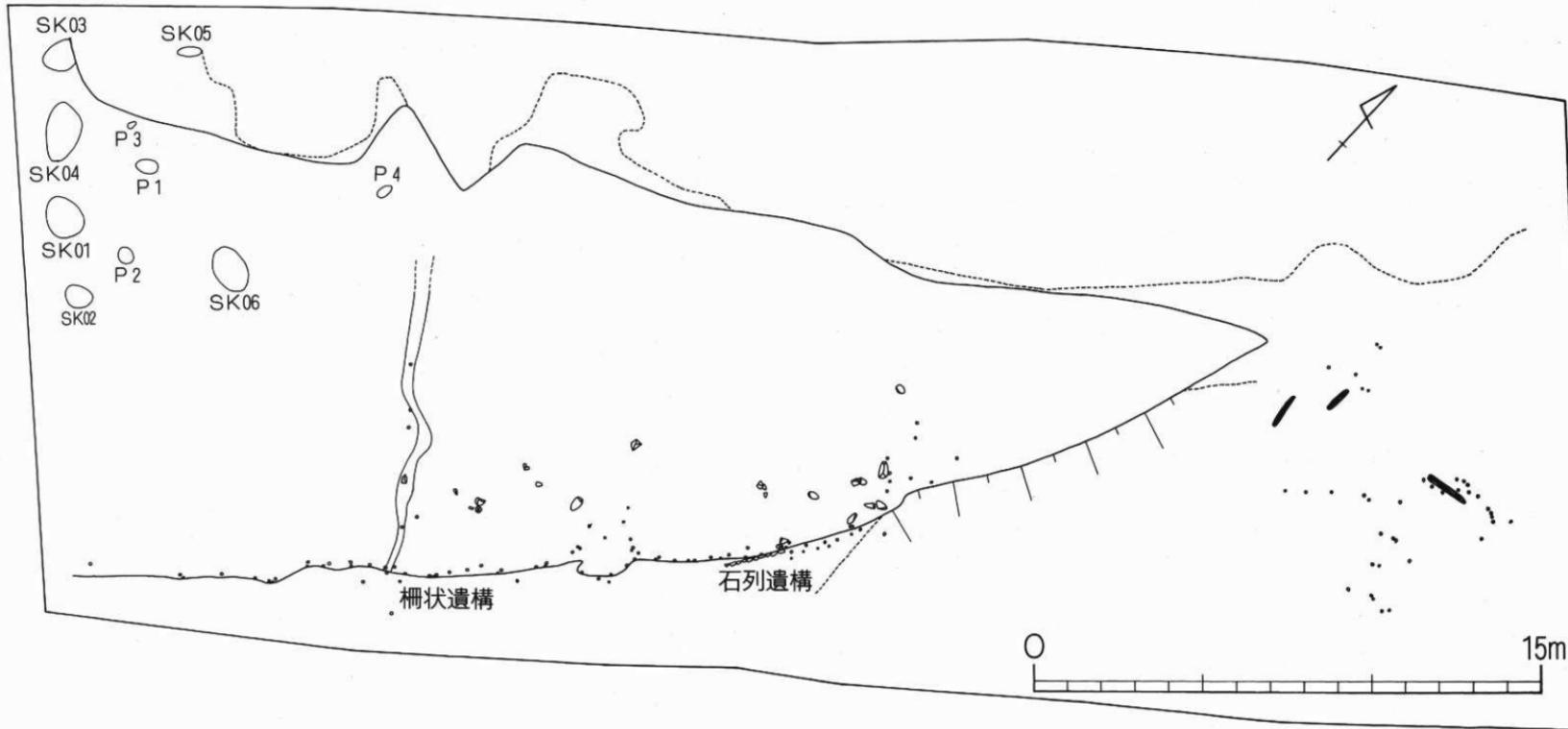
SS04 SZ03の南西に位置しており、60cm大の石の周囲に10~20cm大の石を置き、1m×0.6mの規模を持つ礎石状の遺構である。

SS05 SK14の北東で検出し、10~50cm大の石による方形形状の集石だが、北東側半分以上が調査区外のため、全容はわからない。検出部は、所々石が無くなっているが、全体にコの字状を呈し、中央に大きな石が見られる。西側が1m・北側が0.4m・南側が0.6mの検出規模であり、その周囲にも石が見られる。

SB04 SS05の北西で検出した2間×3間の礎石建物跡で、土軸が北東から南北を向いている。北東側調査区外へ延びているよう全容は不明だが、梁行3.6m(1.8+1.8m)・桁行1.8m(0.8+0.5+0.5m)を検出している。

### 第4遺構面

第3遺構面下約20cmで確認した遺構面だが、既に破壊されてしまったものか、明確な遺構を確認することはできなかった。



第13図 第Ⅱ区 造構全体図

## 2. 第1区

この調査区は、工事予定区域下流側端部から新宮橋の間を調査したので、第1区より更に強く流水の影響を受けていたが、3つの遺構面を確認した。

### 第1遺構面

2m近い堆積砂を除去したところで確認した遺構面で、かなり擾乱を受けていたが、石列2(SG01・02)・杭列1(SP01)・建物跡1(SB01)を検出した。

SG01 調査区中央附近で検出した北西から南東へ延びる行列である。検出長8.5mで、全体に集石状になっている。

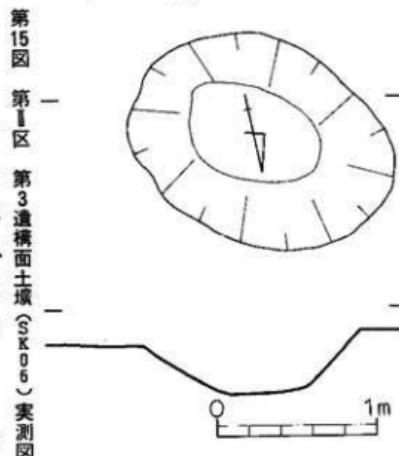
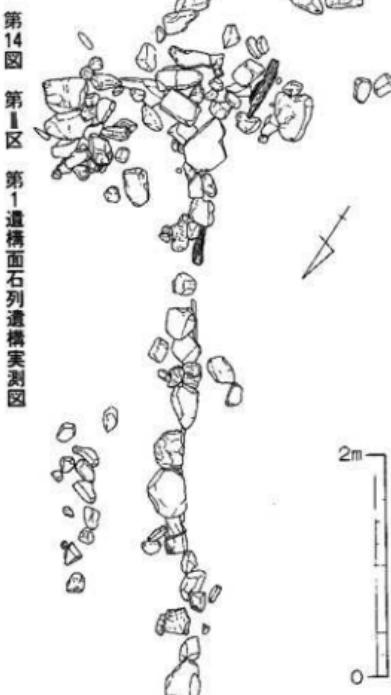
SG02 SG01の北東で検出した北西から南東へ延びる石列で、集石状になっている。検出長6mを測り、石列の下には胴木と思われる木が残っている。

SP01 調査区南東側を南から東へ蛇行しながら走る検出長20mの杭列で、全て一列に並んでいるわけではなく、方向の違う何本かの杭列に別れるが、全て地山ラインに沿って立てられているところから一本の杭列とした。

SB01 調査区北東側で、北西から南西へ曲るL字状に検出した基礎状建物跡である。北西側は50~60cm大の石を使い、南西側は70~80cm大の石を使うが、どちらも検出長は3.5mで外側に面を削え、内部には裏込石と思われる拳大から人頭大の石が大量に入っている。

### 第2遺構面

第1遺構面下約20cmで確認した遺構



面で、石列1(SG03)・溝1(SD01)・杭列3(SP02-03・04)・土壌2(SK01・02)を検出した。

SG03 第1遺構面のSG01の真下で検出した。北西から南東へ延びる検出長7.5mの集石状石列である。恐らくSG01と同じ性格を持つと思われるが、SG01はこの石列から積み上げたものではなく、長期にわたって使用する間にこのような状態になったようである。

SD01 SG03の北東に位置し、北西から南東へ延びる検出長6.5m・幅50cmの石列構である。どちらも石列は集石状になっているが、北東側はかなり破壊されており、南西側は第1遺構面のSG02の真下に当るもので、SG03と同じ状況で検出した。

SP02 調査区南東側を南から東へ若干蛇行して走る杭列で、第1遺構面のSP01も含まれる。杭径5~10cm・検出長24mで、検出状況はSP01と同様である。

SP03 SG03の南西に在り、北西から南東へ6mを測る径3cmの篠竹による杭列である。

SP04 SG03に沿って10mを測る径3~4cmの篠竹杭の杭列で、南東側はSG03を囲んでいる。

SK01 調査区南西側に位置し、半分程度が調査区域外である。検出部の規模は、内径0.7m×0.6m・深さ0.4mを測る土壌である。

SK02 SG03の南西で半分程度区域外である。検出部は、内径0.7m×0.6m・深さ0.3mである。

### 第3遺構面

第2遺構面下約30cmで確認した遺構面で、土壌4(SK03-04・05・06)・石列2(SG04・05)・建物跡1(SB02)・集石遺構2(SS01・02)・杭列を持つ石組遺構1(SW01)を検出した。

SK03 調査区上流側に位置し、内径0.8m×0.5m・深さ0.1mの平面脩円形を呈す土壌である。

SK04 SK03の南東で検出したが、半分程度調査区外のため、全容は不明である。検出規模は、内径1.7m×0.7m・深さ0.3mを割り、平面歪んだ隅丸三角形を呈する土壌である。

SK05 SK04の北東に在り、内径1.1m×0.4m・深さ0.1mで、平面歪んだ長円形を呈している。

SK06 SK05の南東で、内径1.7m×1.3m・深さ0.4mを測る平面脩円形の土壌である。

SG04 調査区南東側に位置し、北東から南西へ人頭大の石が2mの長さで並ぶ石列である。

SG05 調査区北西側に在り、東から西へ延びる石列で、2.4mの長さを検出した。所々破壊されている部分があるが、拳大から人頭大の石が北へ直線で並んでいる。

SB02 調査区中央附近で主軸を南北に向ける2間×2間の礎石建物跡だが、攪乱による破壊のため全容はわからず、検出規模は、梁行3m(1.5+1.5m)・桁行2.6m(1.2+1.4m)である。

SS01 調査区上流壁際のため全容は不明だが、検出規模1m×0.7mで拳大から人頭大の石からなる。集石部から北と東に短い石列が延びており、それ1mと1.5mを測る。

SS02 調査区中央附近に在り、1m×1mの円形を呈し、拳大から人頭大の石からなる。

SW01 調査区下流側でかなり破壊を受ける遺構である。20~60cm大の石が2m×2mの円状に配され、その周囲を径6~10cmの杭が囲んでいる。

## 遺物

今回の調査では、堆積砂層から出土したものも含め、大量の遺物が採集されているが、その大半を占めているのは陶磁器であり、他に金属製品・石製品・漆工品・木製品等がある。以下、各調査区で検出した層位（遺構面）毎に、陶磁器の組成を主として記述し、他の資料については名称だけを述べることとする。

### I区

堆積砂層 この層では、土師質土器製品を含む日本製のものが多く、備前焼の壺や甕を除くと、唐津焼・伊万里焼の碗や皿が多く見られ、他に美濃焼の小片も含まれている。また、中国製陶磁器類や朝鮮（季朝）製のものも若干採集されているが、それらはほとんどが小片である。この他の遺物では、瓦・占錢・鉈・角釘・小柄・鎌・土鍤・埴塙・簪・下駄等が採集されている。

第1層 ここでは、流水の影響によるものか、それ程多くの遺物は採集できなかった。採集したものは小片がほとんどだが、それらを見ると唐津焼・伊万里焼の碗や皿が多いようであり、中国製品も碗・皿が土打が少しある。ここで若干注意されることは、この遺構面で検出した遺構から出土した遺物で、中国産のもののが少なく、国内産である土師質土器・備前焼の他は、唐津焼（絵唐津を含む）や伊万里焼の碗・皿が多く採集されていることだが、明らかに遺構面及び遺構が搅乱を受けており、混在するものも含まれていると考えられるため、あまり信頼できる資料とは言えない。その他の遺物としては、瓦・銅製毛抜・金箔を塗った銅製蓋状製品・煙管・角釘等の他、埴塙が多く見られる。

第2層 この層では、中国製品である白磁や染付の碗・皿類が多くなり、朝鮮（季朝）製の碗も見られる。日本製品では、唐津焼が少なくなり、伊万里焼はほとんど見られなくなる。また、検出遺構内から出土したものの状況も、中国製陶磁器の碗や皿の他は唐津焼・美濃焼の碗・皿と備前焼の壺・甕が多く、伊万里焼がほとんど見られなかった。これらの他に、瓦・円形加工陶器・瓦石・占錢・埴塙・角釘等が採集されているが、数はそれ程多くない。

第3層 この層で採集した遺物全体の半数以上を土師質土器製品（皿が主体）が占めているが、それ以外では中国製品が多く、日本製品は全体の2割程度であり、他に瓦・埴塙・占錢・刀子・碁石等が出土している。中国製品には、青磁・白磁・染付の碗や皿があるが、褐釉系の壺や鉢が中国製品の半数近くを占めている。日本製品は、その9割方が備前焼の壺や甕であり、唐津焼・美濃焼・志野焼の碗や皿の小片の他、黒色土器も見られるが、小量しか出土していない。しかし、この遺構面で検出した遺構からは、中国製陶磁器の碗・皿の他に、備前焼の徳利や招鉢・唐津焼の片口や皿等がほぼ同程度に出土している。他の遺物としては、円形加工陶器・瓦・刀具・鉄鎌・角釘・古錢・銅製水滴等が出土しているが、

注意したいのは、遺構面及び検出遺構内から伊万里焼が全く見られないことである。

第4層 この層でも土師質土器皿が圧倒的多数を占めているが、それ以外の出土陶磁器の内容は、中国製の青磁・白磁・染付の碗や皿の他、褐釉系の壺や甕があり、日本製では備前焼の壺・甕が圧倒的に多く、唐津焼（絵を含む）と信濃焼が少量だが採集されるだけである。なお、数量は少ないが、朝鮮（季朝）製品や須恵器片が見られ、注意しておきたい。その他では、瓦・火箸・小柄・刀子・刃ばき・古鏡・釘・坩堝が多く出土し、漆器椀・下駄・曲物の底板等があり、傷跡が残る獸骨も見られる。

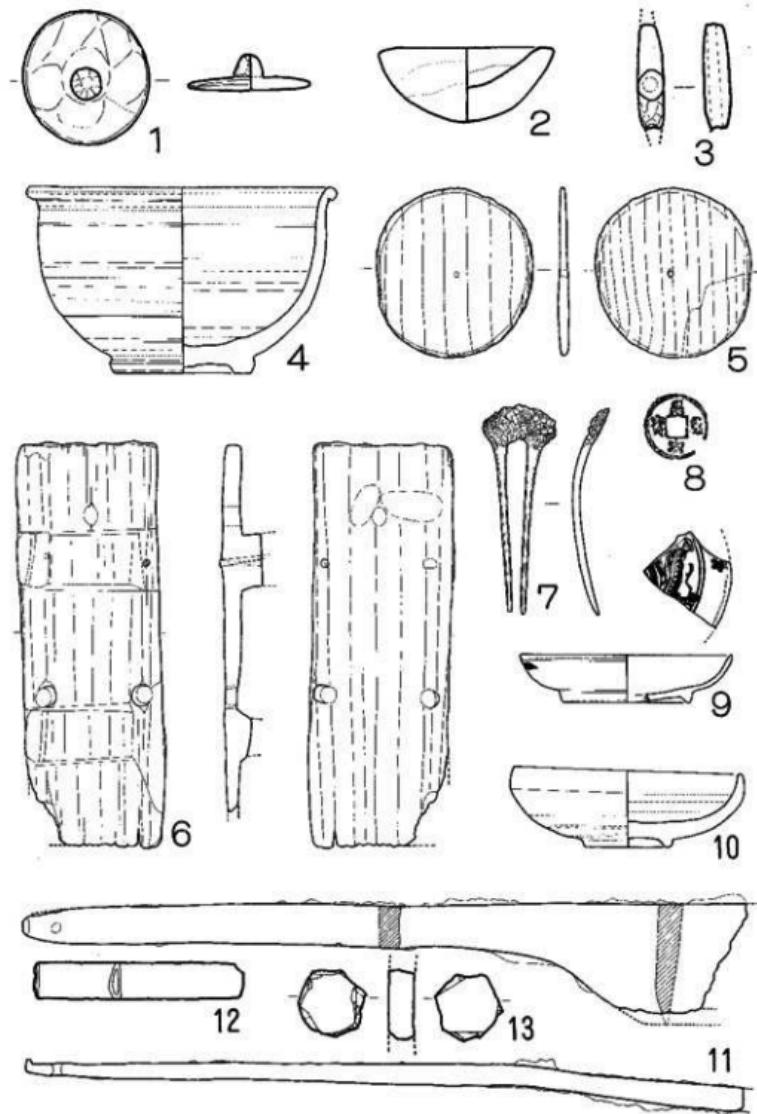
## I区

堆積砂層 この層では、圧倒的に多い皿を中心とする土師質土器製品を含む国内外の備前焼の壺・甕等を除くと、唐津焼・伊万里焼が少なく、中国製品が多く見られる。国外産のものでは染付の碗・皿が多く、他に青磁・白磁の碗や皿・褐釉の甕・鉢があり、わずかに緑釉や藍彩も含まれる。国内産では、唐津焼・伊万里焼・美濃焼の壺・皿となるが、越前焼の押鉢や信濃焼・志野焼・須恵器等も見られる。これら以外に、瓦・古鏡・釘・砥石・硯・壁土・石臼等がみられる。

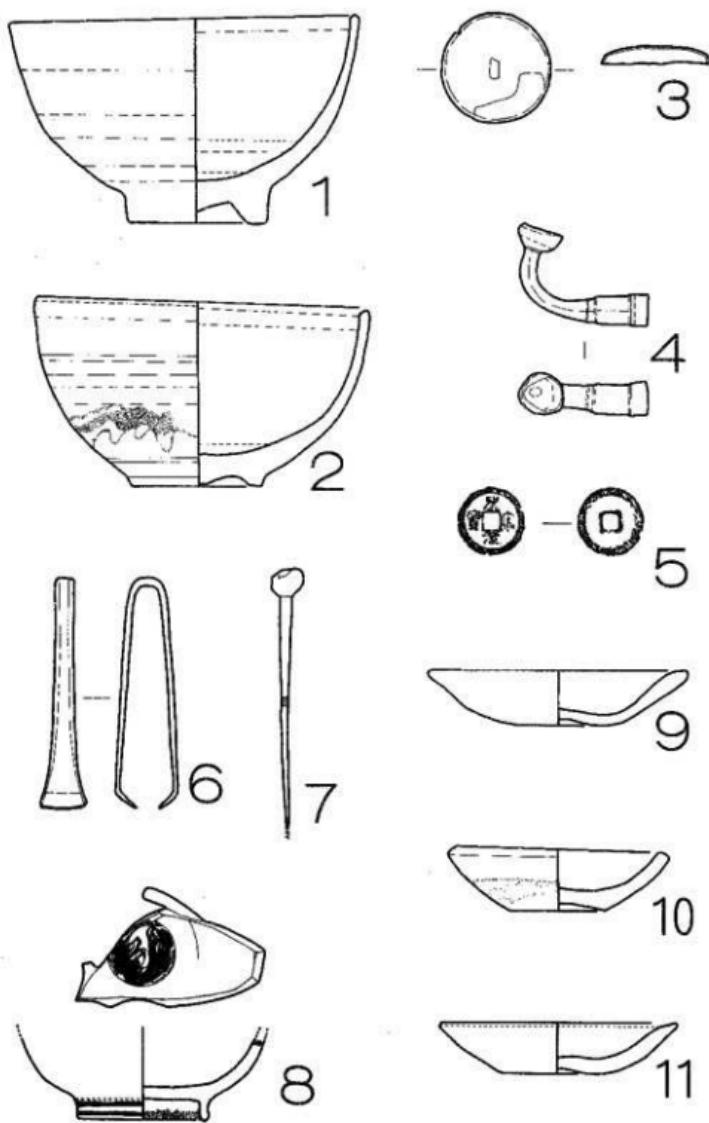
第1層 ここでは、皿を主とする土師質土器製品を除くと、中国製品と日本製品がほぼ同程度出土している。中国製陶磁器では、半数程度を白磁の皿が占めており、染付・青磁の碗や皿・褐釉の壺や甕はほぼ同程度採集され、藍彩もわずかに含まれる。日本製品では、備前焼の壺・甕と唐津焼の碗・皿がほぼ同程度で多く、他に伊万里焼の碗・皿と美濃焼の碗・壺が少量出土しており、須恵器もわずかに含まれている。この他には、瓦・坩堝・漆器椀・石臼・角釘等が採集されている。

第2層 この層では、土師質土器を除く全ての出土陶磁器の中で、日本製品である唐津焼の碗・皿が4割近くを占めており、唐津焼以外では備前焼の壺や甕、伊万里焼の碗・皿が多い。中国製品では、白磁・染付の碗・皿が多く、青磁・褐釉は少量しか採集していない。なお、わずかしか出土していないが、国内産の伊賀焼や須恵器も含まれている。この他の出土品としては、瓦・角釘・鉄鎌・漆器椀・轆の羽口等が出土している。

第3層 この層で検出した全陶磁器の中で、土師質土器を除く国外産と国内産の割合はほぼ同程度である。中国製品では白磁の碗と杯が多く、中国製品の中の半数を占め、その他では染付の碗・皿が目立つ程度で、青磁や褐釉は少量しか出土していない。日本製品では、備前焼の壺・甕が圧倒的に多く、日本製品の中の7割を占め、外には唐津焼の碗・皿が目立つ程度で、美濃焼が少量含まれる。なお、極めて少量だが中国製の天日碗・信濃焼の壺・器種は不明だが朝鮮（季朝）系のものも採集している。その他の遺物としては、瓦・角釘・坩堝・轆の羽口等が出土している。

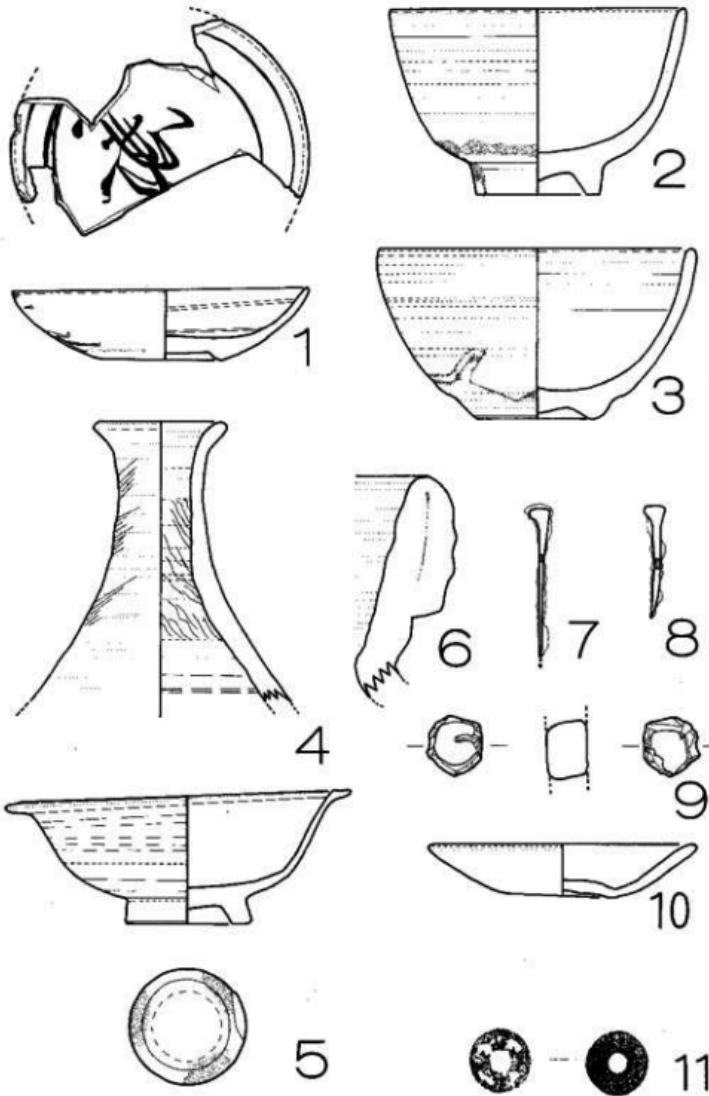


第16図 第I区 堆積砂層出土遺物実測図 (1~3.8.12.13S=1/2 4~7.9~11S=1/3)

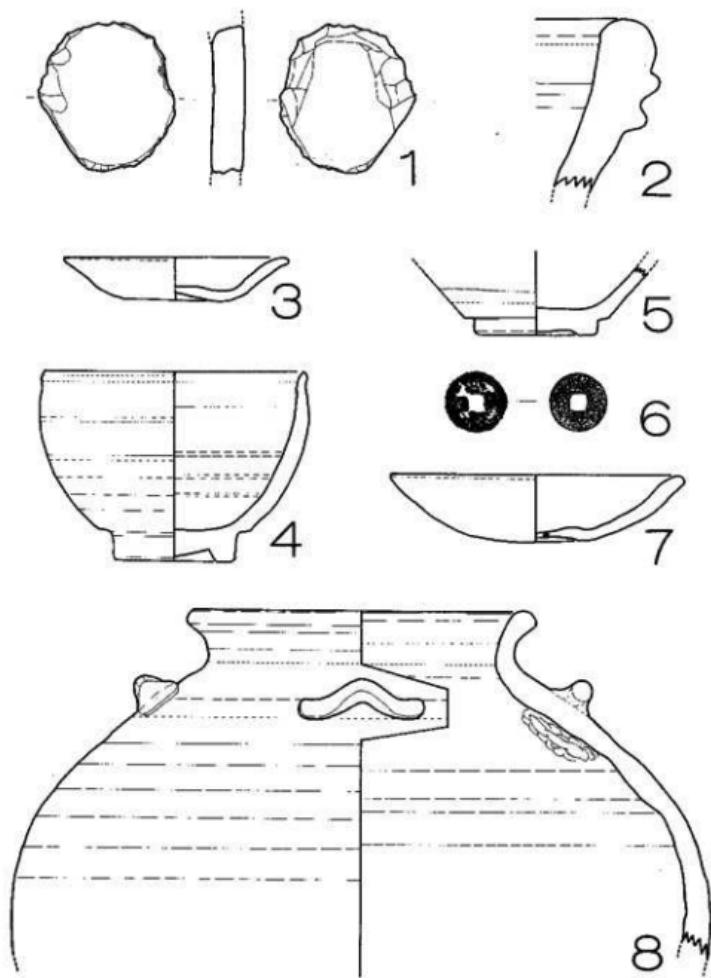


第17図 第1区 第1遺構面 SX02. SE 02.

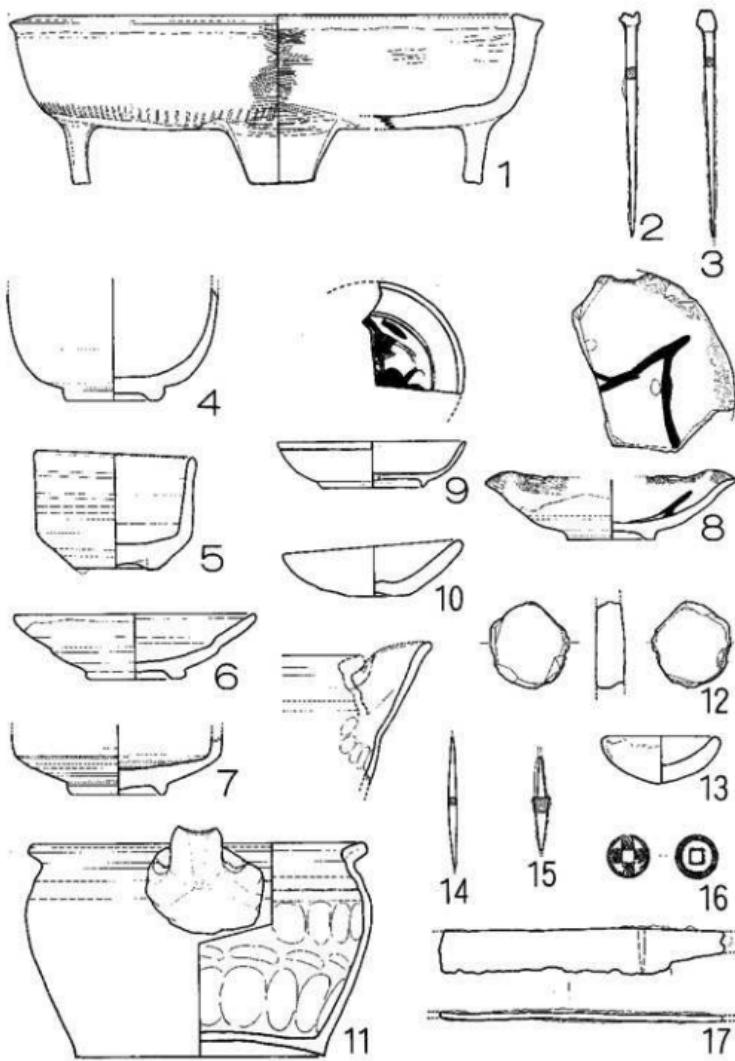
集石遺構出土遺物実測図 ( $S = \frac{1}{2}$ )



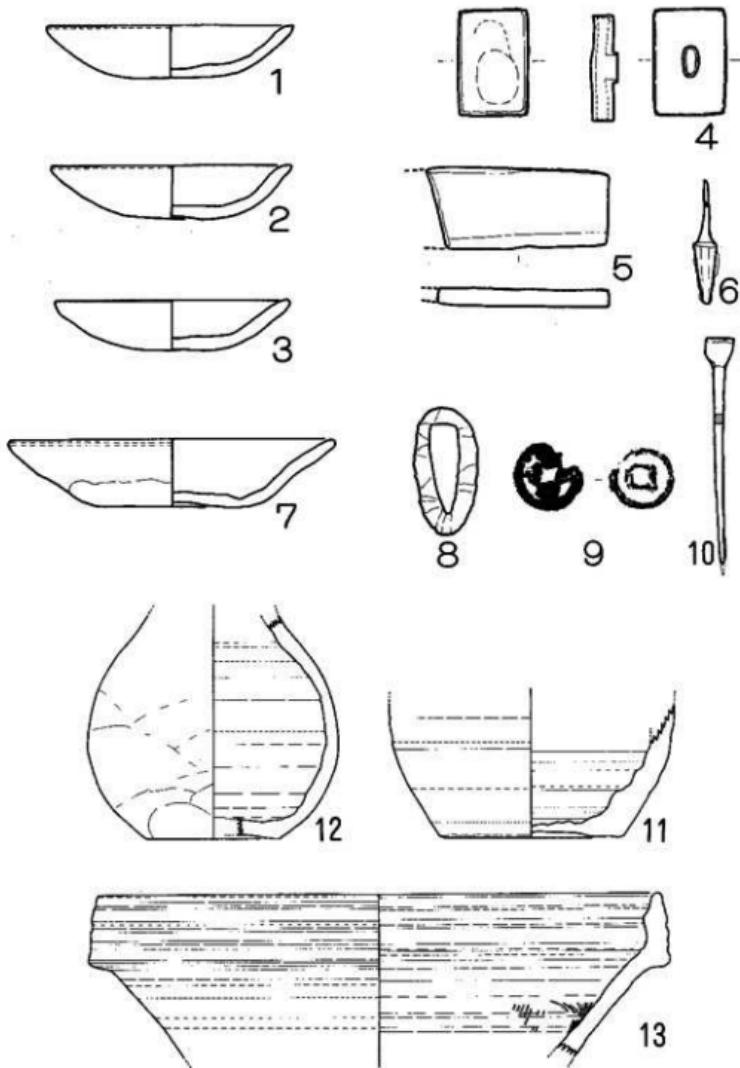
第18図 第1区 第2層出土遺物実測図 ( $S = \frac{1}{2}$ )



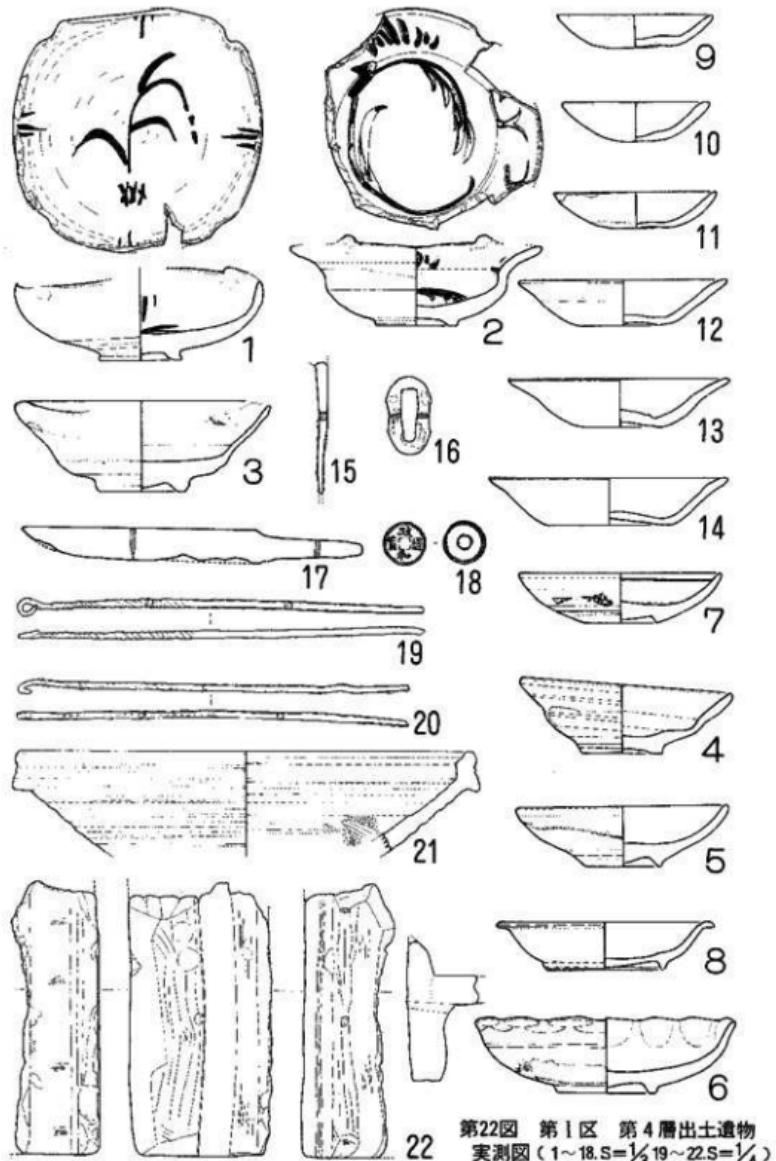
第19図 第1区 第2造構面 SX01. PO1出土遺物実測図 ( $S=1\frac{1}{2}$ )



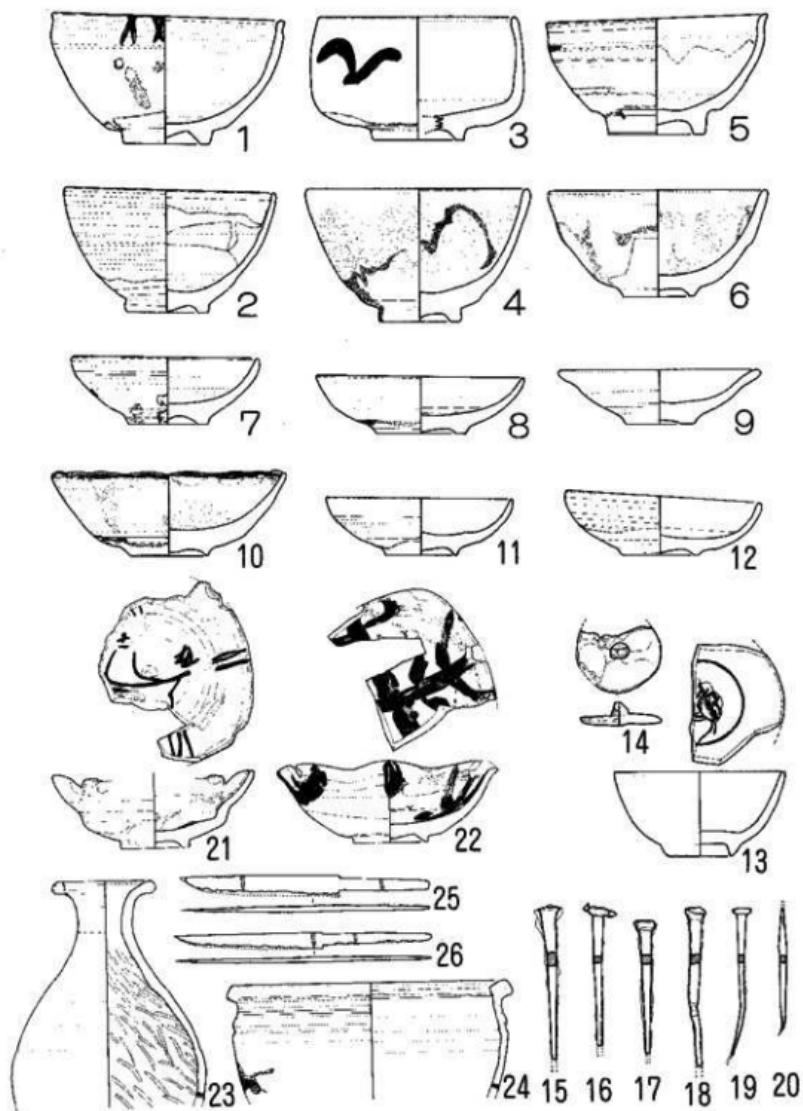
第20図 第1区 第3層・第3遺構面 S101, S102 出土遺物実測図 (S=1/3)



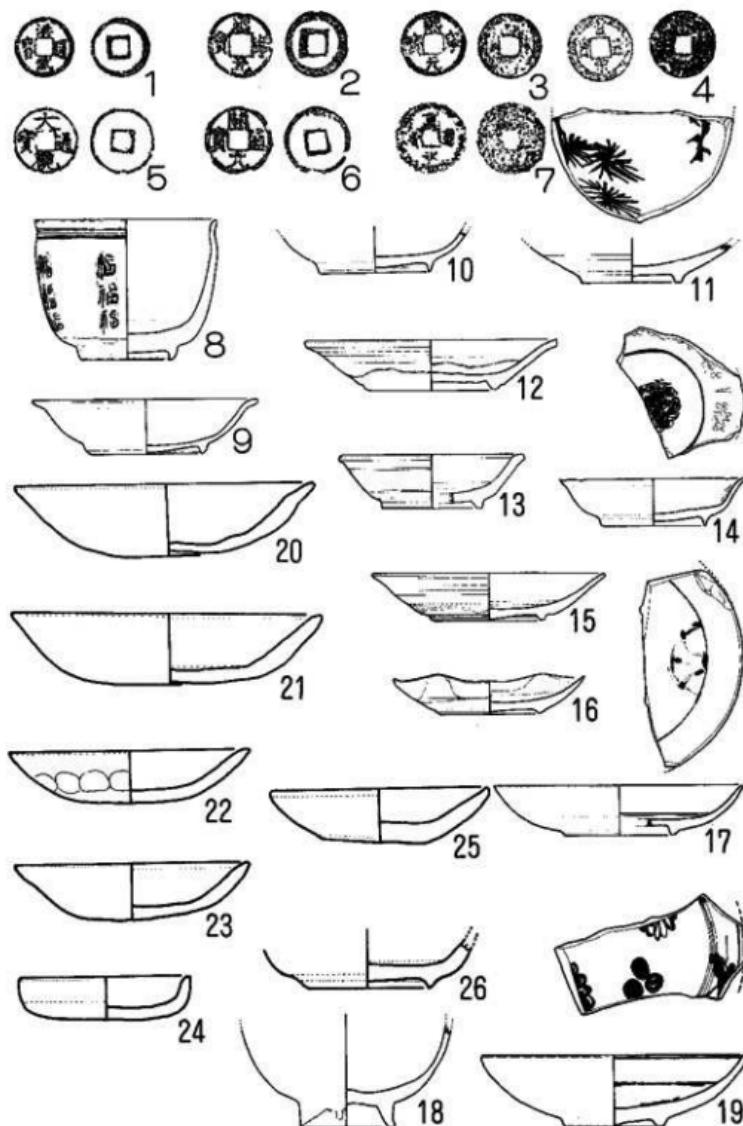
第21図 第I区 第3遺構面 S105, S108, S101, S102  
出土遺物実測図 (1~10.S =  $\frac{1}{2}$  11~13.S =  $\frac{1}{3}$ )



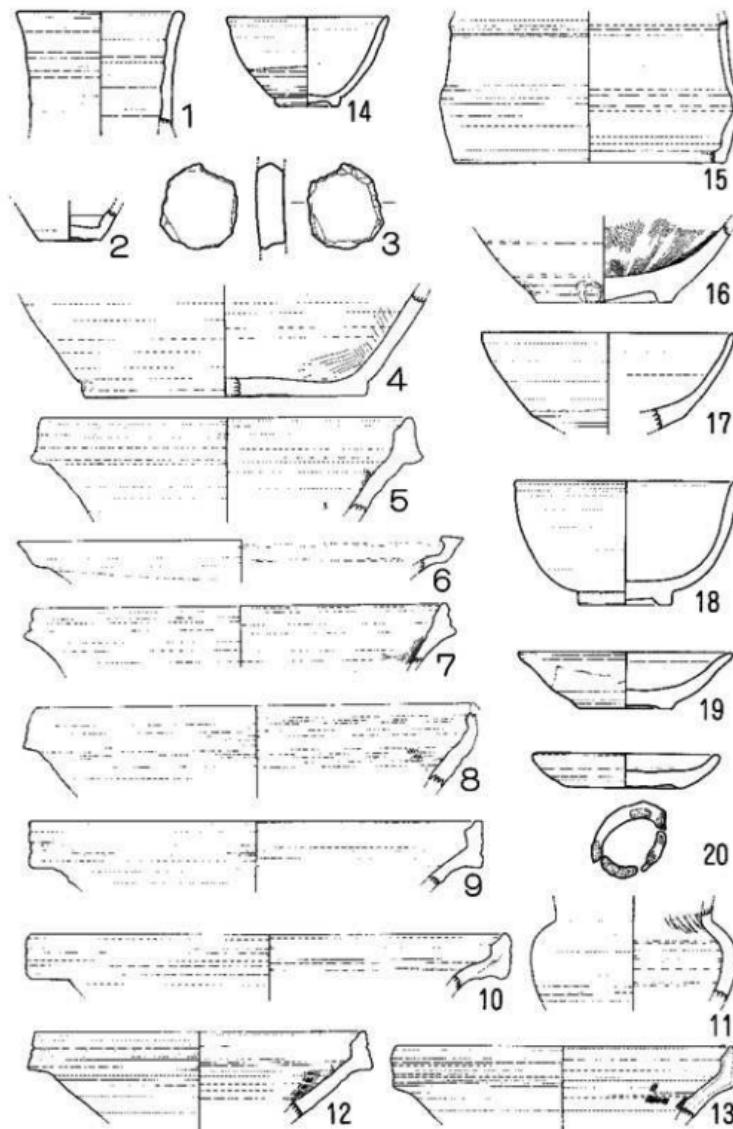
第22図 第1区 第4層出土遺物  
実測図 (1~18.S=1/3 19~22.S=1/4)



第23図 第Ⅰ区 第4発掘面出土遺物実測図 (S=1/4)

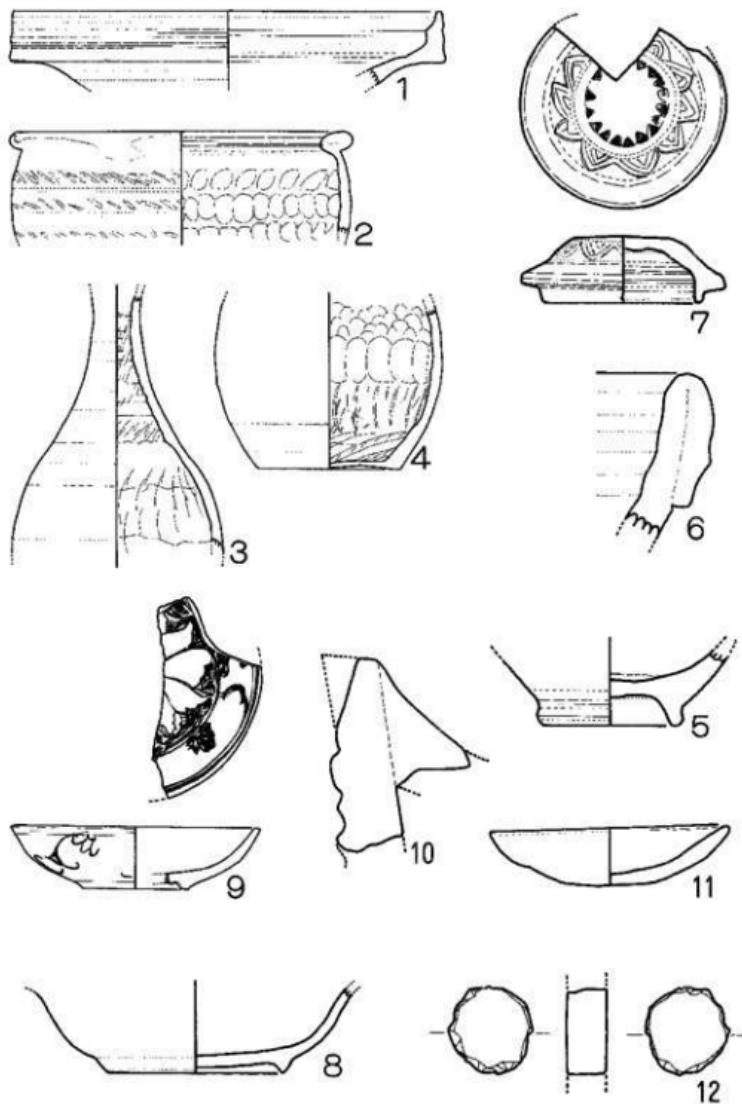


第24図 第Ⅱ区 堆積砂層出土遺物実測図 (1~7 20~26 S=1/2 8~19 S=1/3)



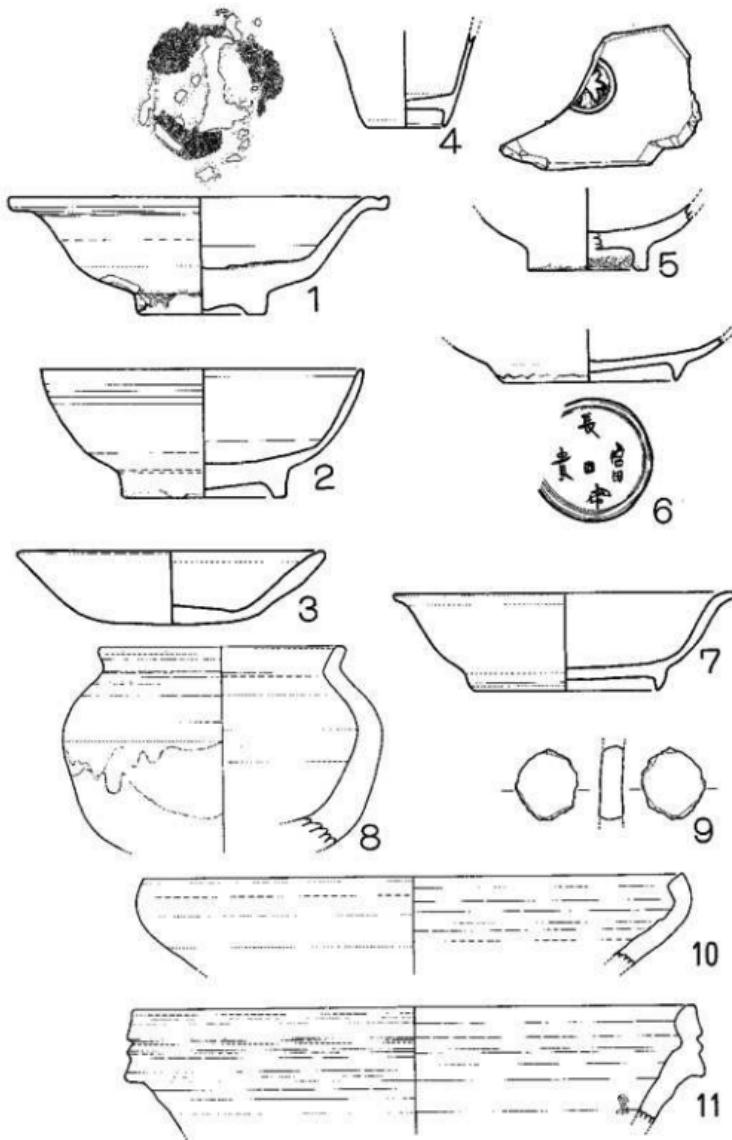
第25図 第Ⅱ区 堆積砂層出土遺物実測図

( 1~3.14.17~20. S =  $\frac{1}{3}$  4~13.15.16 S =  $\frac{1}{4}$  )



第26図 第Ⅰ区 第1層・第2層・第3層出土遺物実測図

(1~4.9 S=1/3 5~8.10~12 S=1/2)



第27図 第Ⅱ区 第3層出土遺物実測図 (1~7 S=1/2 8~11 S=1/3)

## 考察

以上、今回の調査の概要を述べてきたが、ここでは各調査区で確認した遺構面より採集した遺物から、山上陶磁の組成と傾向について考えてみたい。ただし、今回調査を実施した区域は、検出遺構の状況からもわかる通り、どの遺構面もかなり擾乱を受けており、面的に把握できる部分については限界があるため、その点は留意して置かなければならない。

### 第Ⅰ区

第1遺構面で採集した陶磁器の状況は、中国製のものが少なく、土師質土器・備前焼が多く、それ以外では唐津焼・伊万里焼が多く見られることだが、確認した遺構には若干掘り下げて検出したものとそうでないものがあり、ある程度の時期的な幅があると考えられるため、この遺構面は寛文6年からそれ以前の2つの遺構面を包摂したものである。

第2遺構面では、第1遺構面に比べ土師質土器・中国陶磁が多くなり、唐津焼が減少して伊万里焼は少量しか見られない。これは、昭和60年における第2遺構面の陶磁組成と類似するもので、ほぼ同時期の江戸時代初頭頃のものと思われる。

第3遺構面では、土師質土器が全体の半数以上を占め、その他では中国製品と備前焼が多く、唐津焼・美濃焼が少認められるが、伊万里焼は含まれていない。また、遺構内出土のものもほぼ同様の形態を示すことから、概ね16世紀末から17世紀初頭頃と思われる。

第4遺構面は中国陶磁・備前焼が多く、唐津焼が少量しかないが、大半を占めるのは土師質土器である。この組成は第3遺構面とよく似ており、検出状況等からしても両者の間にそれ程大きな時期差はないものと思われる。

### 第Ⅱ区

第1遺構面の陶磁組成は、土師質土器を除くと、日本製品と中国製品の割合がほぼ同程度であるが、この遺構面が堆積砂層のすぐ下に位置するため、ある時期流水に晒されていたことが考えられることから、概ね第Ⅰ区第1遺構面と同時期と考えて良さそうである。

第2遺構面から出土した、土師質土器を除く陶磁組成を見ると、中国製品が少なくて国内産の唐津焼が4割近くを占め、伊万里も多く含まれている。この状況は、第Ⅰ区の第1遺構面と類似し、第1遺構面のものとは若干異なるが、大きな差は見られないことから、わずかな時期差は存在すると思われるが、ほぼ同時期と考えて良さそうである。

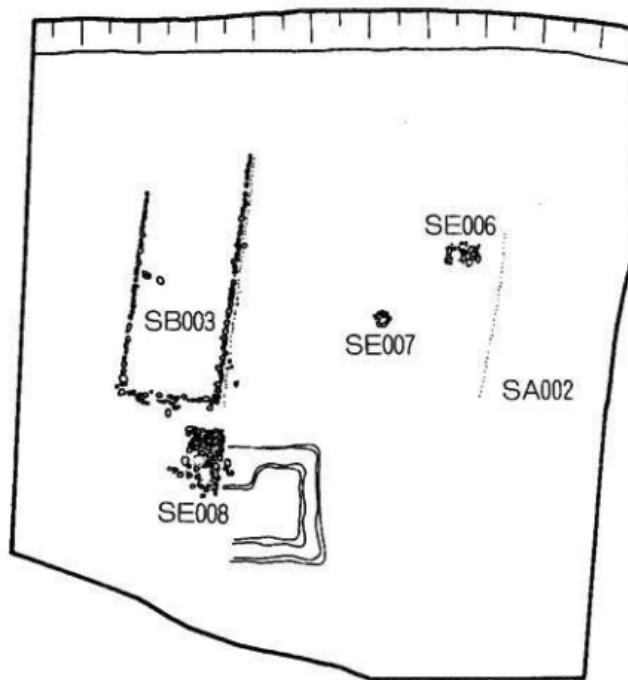
第3遺構面は、土師質土器を除く全陶磁器内に占める中国製品と日本製品の割合は同程度であるが、日本製では備前焼が多く見られ、唐津焼は少量しか採集されず、伊万里焼は全く見られなかった。この組成は、第Ⅰ区の第3遺構面と同じような状況であり、ほぼ同時期（16世紀末～17世紀）のものと見られる。しかし、この第Ⅱ区はⅠ区より更に激しく流水の擾乱を受けており、資料数が豊富ではなく、あまり積極的なことは言えない。

## (2) 遺構（昭和62年）

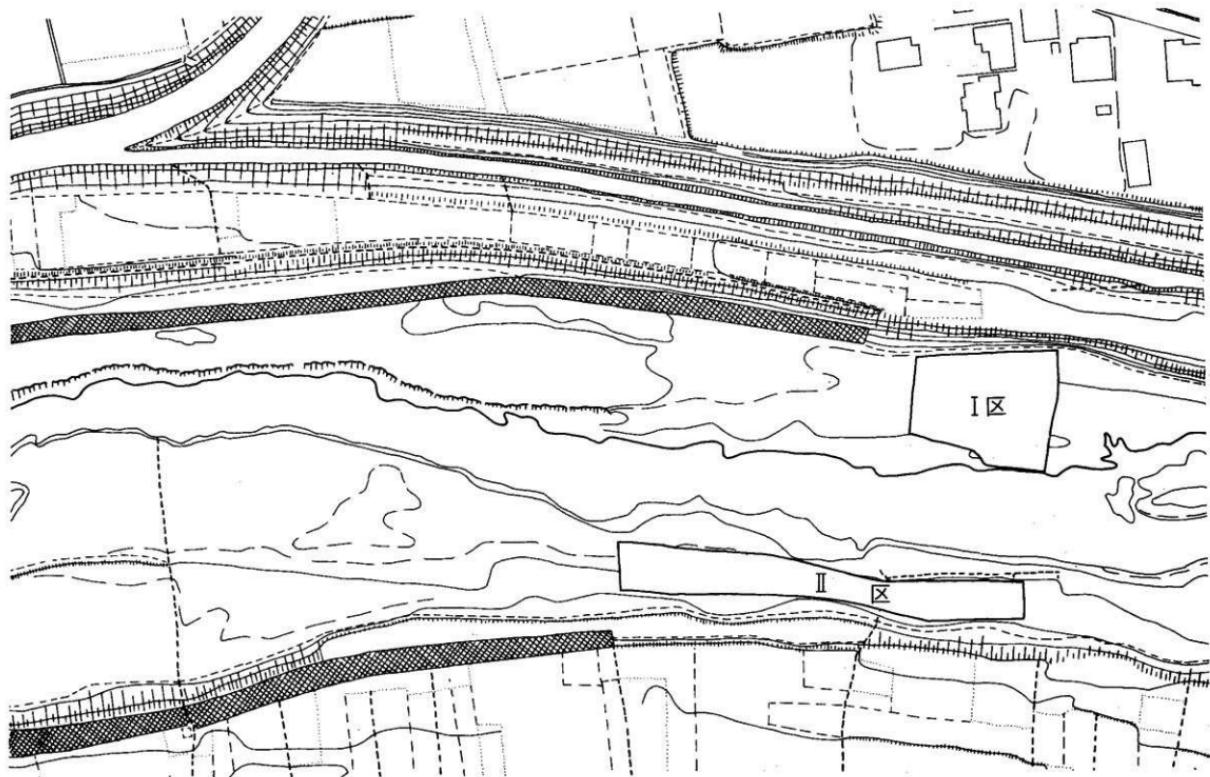
昭和62年の調査は、新宮橋より約300m下流にあたる飯梨川の左岸河川敷約3000m<sup>2</sup>についての発掘調査を行った。なお、調査にあたり、左岸側を第1区とし、右岸側を第2区として実施した。

### 1. 第1区

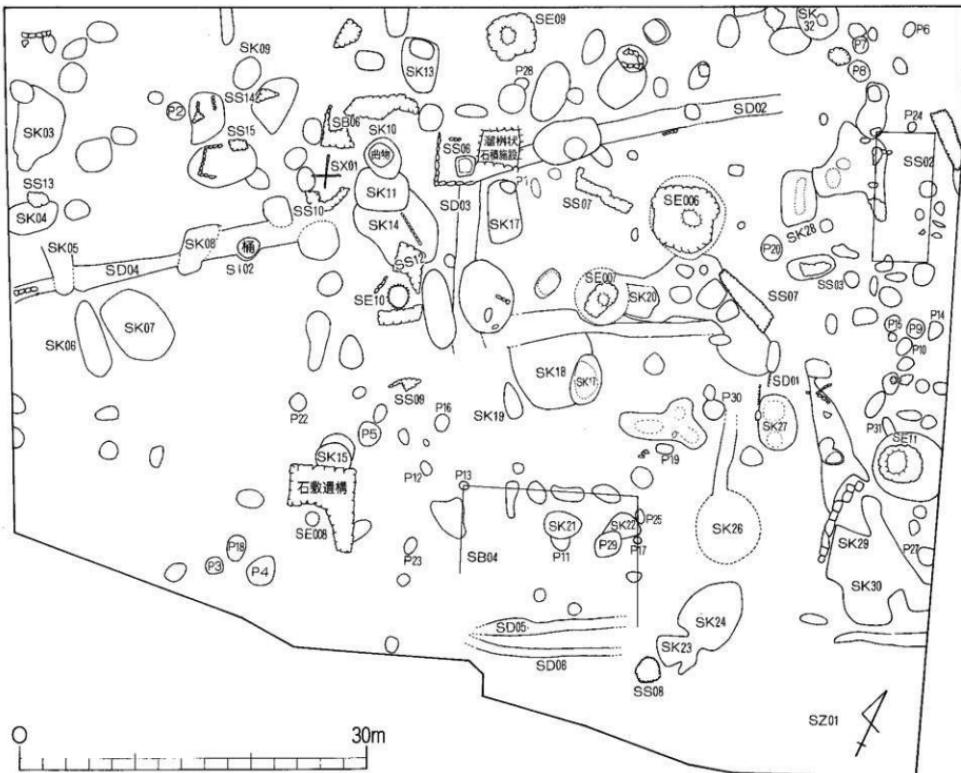
この調査区は、広瀬町教育委員会が昭和49年から昭和51年までの3年間で調査を実施した範囲内で、DK～DP区の一部である。当時は、流路と遺構面との比高差がほとんどなく、少しの増水で調査区が水を被り、覆流水も多かったため、第1層（第1遺構面）しか調査されなかつたが、その後に進んだ河床低下によって流路との比高差は2m近くとなり、十分下層についての調査が可能になった。今回の調査では、昭和49年調査面（第1遺構面）を含む2つの遺構面を検出した。



第28図 昭和49年度調査時の第1遺構面全体図



第29図 昭和62年度富田川河床遺跡調査区位置図 (S=1/1000)

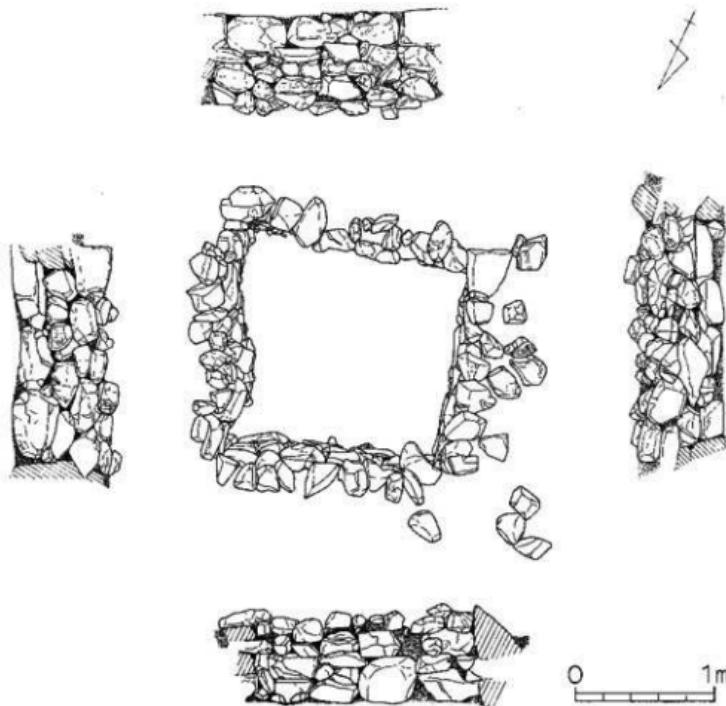


第30図 第1区 第2発掘面 掘出遺構全体図

### 第1遺構面

この遺構面は、昭和49年の調査面であり、その当時検出した遺構も検出しているが、今回新たに確認した遺構もある。今回検出した遺構は、いずれも流水の搅乱を受けており、特に49年検出遺構は当時に比べると様相が異なっているものがある。今回検出した遺構は、昭和49年検出遺構である建物跡1(SB003)・井戸跡3(SE006・007・008)・杭列1(SA002)と、新たに検出した方形溜柵状石積施設1(SY01)・曲物遺構1(SI01)・石列遺構3(SG01・02・03)・土壙2(SK01・02)である。以下、遺構毎に述べて行くが、49年の検出遺構については、その詳細が既に報告書として刊行されているため、ここでは今回の検出状況だけを述べることとする。

なお、昭和49年検出遺構の記号については、昭和52年3月公刊の報告書より引用した。



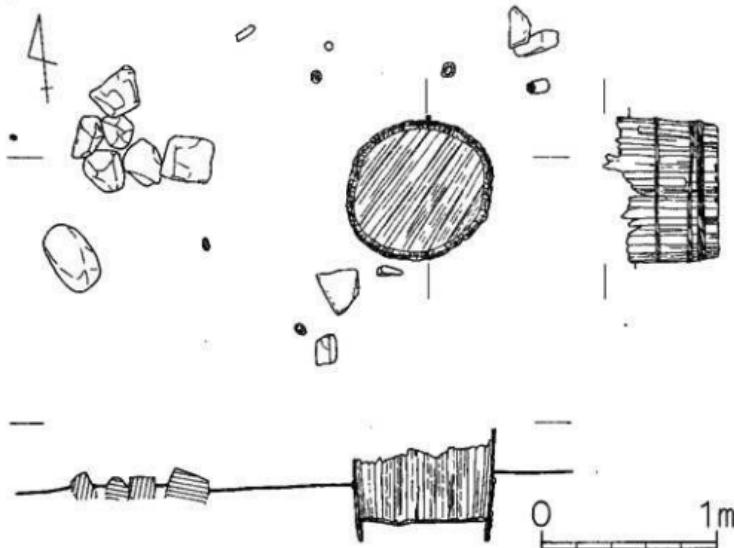
第31図 第1区 第1遺構面 方形溜柵状石積施設実測図

SB003 調査区上流側に位置し、東西長7.4m・南北残存長17mを測る南北方向に長い建物跡で、主軸は北西から南東方向を向き、東側に幅20cmの石積みによる雨落ち溝と考えられる側溝を作っている。この建物を区画する石列は所々2段に積まれるが、ほとんど1段しか残らない。石列の下には、所々木杭で止めた桐木が残っていた。

SE006 調査区下流側にあり、SB003の北東で検出した石積井戸で、わずかに石敷きが残っていた。内径80cm×70cmを測る平面六角形を呈し、内部の残存状況は良好だったが、湧き水が激しく完掘していない。

SE007 SE006の北東で検出した石積井戸だが、石敷きは見られない。内径50cm×50cmを測るが、内部については、内径が小さいうえに積み石が脆くなっているため完掘している。

SE008 SB003の北で検出し、中央に円形井筒の入った石敷きを持つ井戸である。石敷きは、かなり大きな石を用いて表面が水平になるようにされるが、破壊が激しく3.5m×2.5mのL字状を呈する形で検出した。井筒は、五本の箇を持ち側板を竹釘で接合しており、内径70cm×60cmを測り、深さ90cm程が残っている。



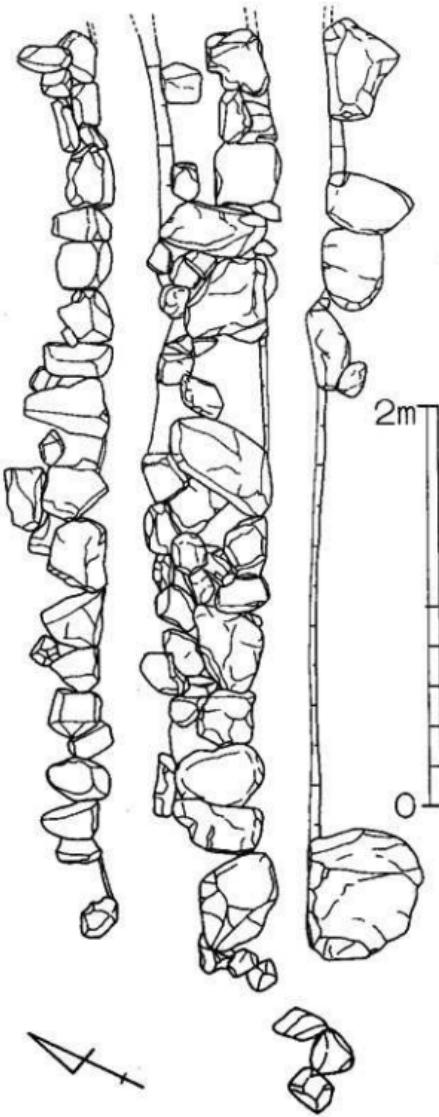
第32図 第1区 第1遺構面 曲物遺構実測図

SA002 SE006 の東に位置し、ほぼ南北に延びる杭列で、築竹と木杭によってできている。検出長15mだが、10本しか確認していない。

SY01 調査区北西側で検出した長径1.7m・短径1.5m・深さ0.6mを測るもので、主に拳大から人頭大の石を使っており、中には石臼の転用も見られる。平面形は、部分的に若干歪んでいるがほぼきれいな方形を呈し、各コーナーも直角になっている。積み方は、基底部に大きな石を並べ、その上に小さな石を積んでいるが、天場石は無くなっている。裏込石も見られない。

SI01 SY01の北東で検出した木桶によるものである。底板は80cm×70cmの楕円形で、側板60cm前後と蓋が4本残るが、上部の蓋には弛みを防ぐためか短い板が差し込まれており、周囲には石敷きと思われる人頭大の石と、それを埋むように径5～10cmの杭が7本見られる。

SG01 調査区北西側で検出した北西壁から南東に延びる検出長5mの3本の石列である。石列は全て平行に走り、中央の石列は70cm幅で東西に面を持ち、東側はかなり破壊され、西側は比

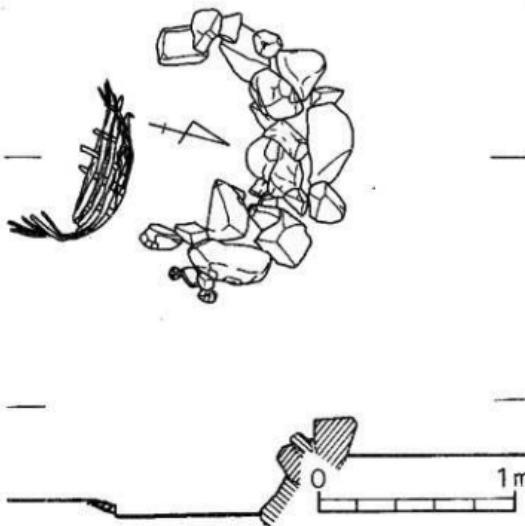


第33図 第1区 第1構造面 石列構造実測図

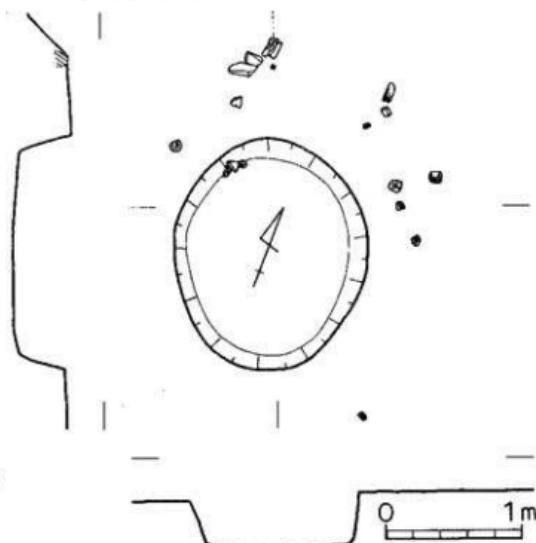
較的残存状況が良く、  
中央には西へ向って延  
びる長さ 1.5 m の建物  
区画と思われる石列も  
見られる。この 3 本の  
石列は、それぞれ向い  
合うように面が揃えら  
れており、石列の間は  
何れも若干地山が掘り  
込まれていたことから、  
溝であったと思われる。

SG02 調査区南東側  
にあり、北東から南北  
へ 7.5 m にわたって検出  
した石列で、北西側に  
面を揃えて並ぶよう  
である。主に 70 cm 大の石  
が使われるが、流路に  
近い部分で検出したた  
めか、かなり破壊が進  
んでおり、既に石が無  
くなっている所や動いて  
いるものもある。

SG03 SY01 の北で  
検出した石列で、北西  
から南東を経て、また  
北西へ延びる半円状を  
呈している。総延長 22  
m・内径 0.8 m × 0.5 m を測  
り、主に人頭大の石を  
使い、一部 2 段に積ま  
れている。この石列の



第34図 第1区 第1遺構面 築実測図



第35図 第1区 第1遺構面 土壌実測図

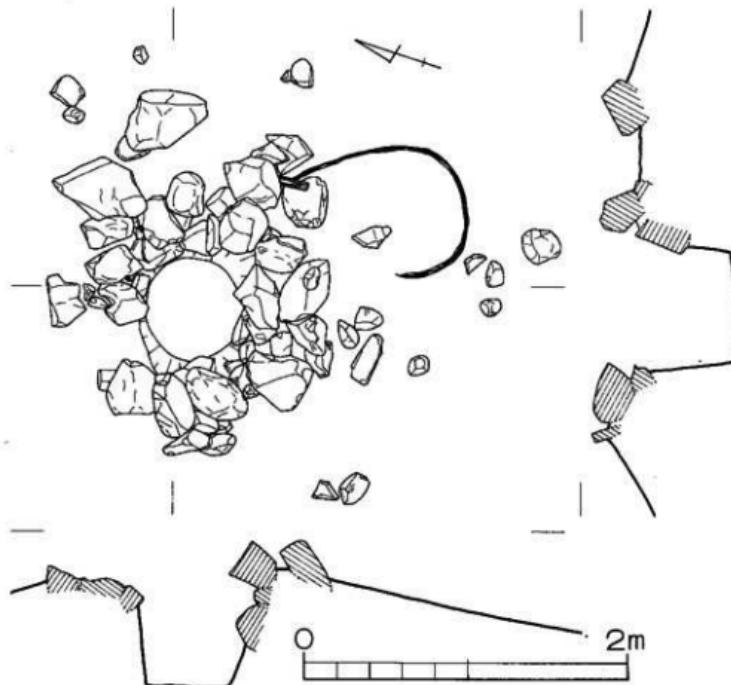
南東側では、竹の皮で編んだ籠が検出されている。

SK01 SI01の東で検出した平面長円形を呈する土壌である。内径1.5m×1.5m・深さ0.4mを測り、上部に10~70cm大の大量の石と、2本の角材が乗っているが、これらは全て土壌の掘り形通りに置かれ、周囲にはそれらを囲むように径5~10cmの杭が10木程度見られる。

SK02 SG01の南西で検出した土壌で、内径50cm×40cm・深さ30cmを測り、平面かなり歪んだ隅丸三角形を呈し、内部には大量の薺殻と思われる植物種子が入っていた。

#### 第2造構面

第1造構面下約50cmで確認した造構面で、井戸跡3(SE09-10-11)・土壤29(SK03-04-05-06-07-08-09-10-11-12-13-14-15-16-17-18-19-20-21-22-23-24-25-26-27-28-29-30-31-32)・集石遺構14(SS02-03-04-05-06-07-08-09-10-11-12-13-14-15)・廻跡1(SI02)・建物跡3(SB04-05)・溝跡6(SD01-02-03-04-05-06)・石列2(SG04-05)・柱痕1(SX01)・道路跡1(SZ01)を検出した。

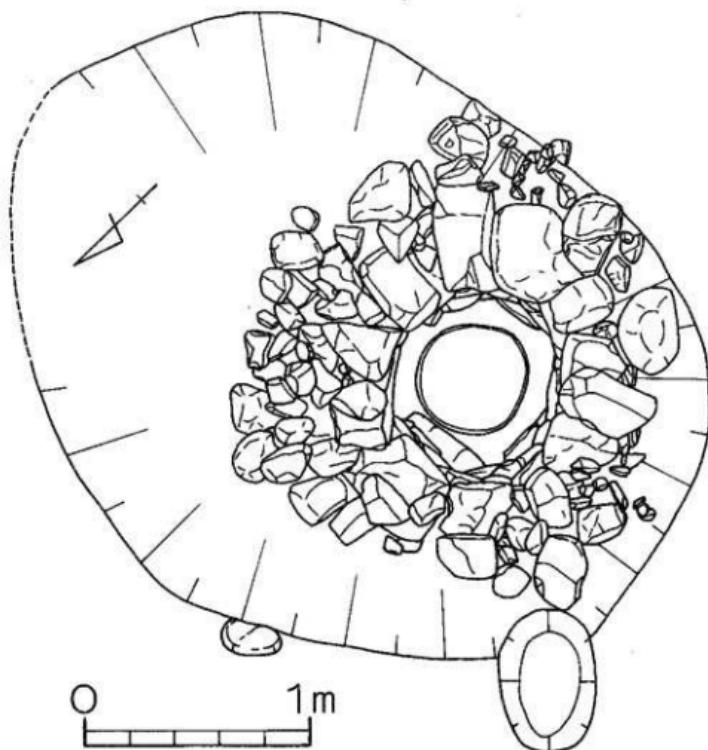


第36図 第1区 第2造構面 井戸跡(SE09)実測図

SE09 調査区北西側に位置する井戸である。周囲に10~60cm大の石が配され、2段程度に積まれていたようだが、かなり崩れている。内部は、内径 $1m \times 1m$ ・深さ $0.7m$ の落ち込みとなっているが、恐らく井筒が入れられていたと思われる。

SE10 調査区中央附近で検出した石積井戸で、内径 $1m \times 0.8m$ ・深さ $1.7m$ の平面積円形を呈し、底部に内径 $0.7m \times 0.6m$ ・深さ $1.2m$ の桶形井筒が入れられる。石積みは、ほとんど破壊され、50cm前後しか残らない。

SE11 調査区下流側で検出した石積井戸で、内径 $0.8m \times 0.8m$ の円形を呈し、周囲に拡大の右による石敷きと、 $3.3m \times 2.5m$ の掘り形が残る。内部は引き水のため完掘していないが、石は $2m$ 程積まれ、底部に $50cm \times 50cm$ の桶形井筒が入っている。



第37図 第1区 第2遺構面 井戸跡 (SE11) 実測図

SK03 半分程度が北西側調査区外のため全容は不明である。検出部は、内径 $3.5m \times 1.9m$ ・深さ $1m$ の平面歪んだ隅丸三角形を呈する。

SK04 SK03の南東で、一部調査区外のため全容は不明である。

検出部は、内径 $2m \times 1.1m$ ・深さ $0.3m$ の平面歪んだ隅丸台形を呈する。

SK05 SK04の南東に在り、一部基準杭の下に当り全容は不明である。検出部は、内径 $2.4m \times 1m$ ・深さ $0.5m$ を測る平面瓢箪状の隅丸長方形を呈している。

SK06 SK05の南東に位置し、内径 $2.3m \times 0.9m$ ・深さ $0.4m$ の平面長円形を呈す土壌である。

SK07 SK06の北東で検出し、内径 $2.8m \times 1.8m$ ・深さ $0.7m$ の平面橢円形を呈す土壌である。

SK08 SK07の北に在り、内径 $1.5m \times 1.1m$ ・深さ $0.5m$ の平面歪んだ短方形を呈している。

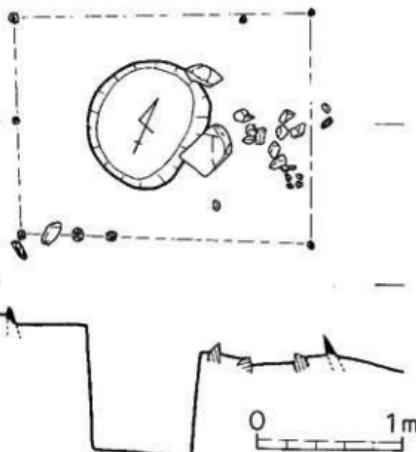
SK09 SK03の北東に位置し、内径 $2m \times 1.6m$ ・深さ $0.4 \sim 0.6m$ の平面歪んだ五角形を呈する。

SK10 SK09の東で検出し、内径 $1.9m \times 1.5m$ ・深さ $0.6m$ の平面長円形を呈す土壌で、底部に径 $1m \times 1m$ ・深さ $10cm$ の凹物が入れられる。

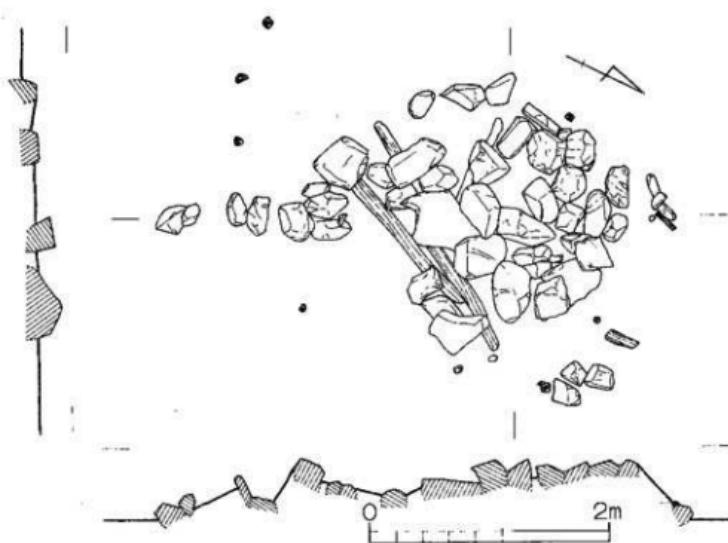
SK11 SK10の南に位置し、内径 $1.8m \times 1.6m$ ・深さ $0.3m$ の平面橢円形を呈している。



第38図 第1区 第2遺構面  
井戸跡 (SE010) 実測図

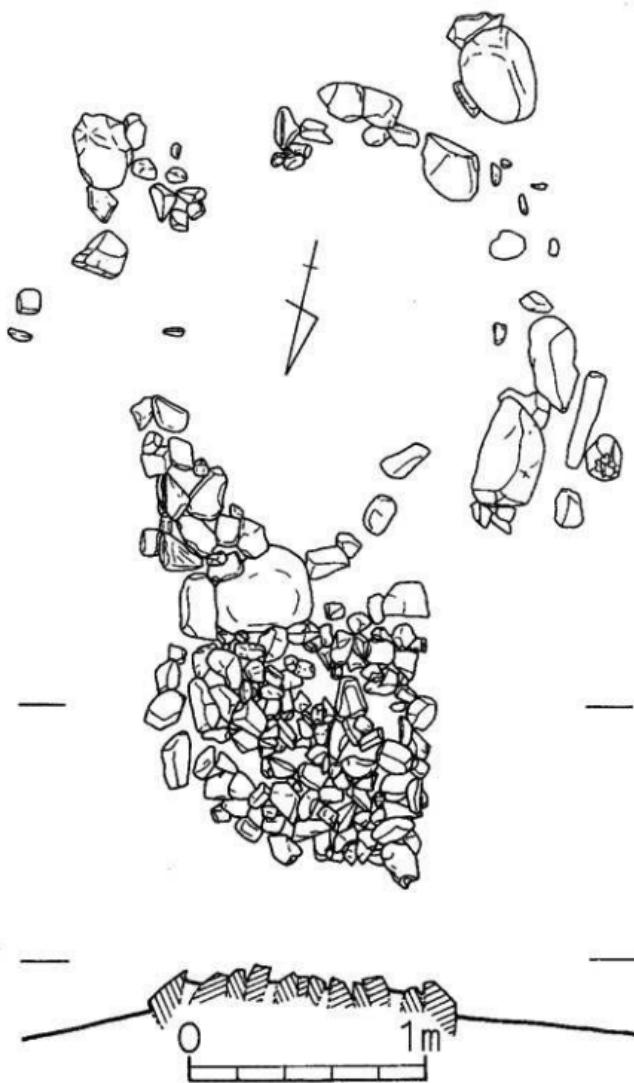


第39図 第1区 第2遺構面  
土壌 (SK40) 実測図



第40図 第1区 第2造構面 集石造構実測図

- SK12 SK10の北隣りだが、検出部が切り合っており全容は不明である。検出部は、内径 $2.5m \times 0.9m$ ・深さ $0.3m$ を測る平面歪んだ長円形を呈す土壙である。
- SK13 SK12の北に在り、内径 $2.3m \times 1.5m$ ・深さ $0.6m$ の平面歪んだ隅丸台形を呈している。
- SK14 SK10の南東で検出した土壙だが、一部基準杭の真下に当り全容は不明である。検出部は、内径 $4.5m \times 3.3m$ ・深さ $1.2m$ を測り、平面歪んだ隅丸五角形を呈している。
- SK15 SK14の南で、内径 $1.7m \times 1.4m$ ・深さ $0.4m$ を測り、平面歪んだ五角形を呈する。
- SK16 SK15の北に在り、内径 $3m \times 2.5m$ ・深さ $0.6m$ の平面歪んだS字状を呈す土壙である。
- SK17 SK14の北東に当り、内径 $3.4m \times 2.7m$ ・深さ $1m$ の平面歪んだ隅丸台形を呈している。
- SK18 SK17と東側で切り合うため全容は不明だが、内径 $4.1m \times 3.5m$ ・深さ $0.5m$ を測り、平面隅丸方形を呈する土壙と思われる。
- SK19 SK16と西側で切り合うため全容は不明だが、内径 $1.9m \times 1m$ ・深さ $0.5m$ を測る平面長円形を呈す土壙のようである。
- SK20 第1造構面の井戸跡と切り合うため全容はわからない。検出部は、内径 $1.6m \times 1.6m$ ・深さ $0.2m$ を測る平面歪んだ五角形を呈する。
- SK21 SK16の南東に在り、内径 $2m \times 1.2m$ ・深さ $0.3m$ の平面歪んだ隅丸台形を呈する。
- SK22 SK21の北東に当り、内径 $1.6m \times 1.1m$ ・深さ $0.6m$ の平面長円形を呈する土壙である。



第41図 第1区 第2遺構面 集石造構 (SS 12) 実測図

SK23 SK22の南東に在り、内径 $1.7m \times 1.3$

m・深さ $0.7m$ の平面隅丸三角形を呈している。

SK24 SK23の東に在り、一部切り合うためはっきりしないが、恐らく平面台形状を呈し、内径 $2m \times 1m$ ・深さ $0.5m$ 程度と思われる。

SK25 SK24の東隣に位置し、検出部が一部切り合うためはっきりしないが、恐らく平面歪んだ隅丸三角形を呈し、内径 $2.8m \times 1.5m$ ・深さ $0.4m$ 程度と思われる。

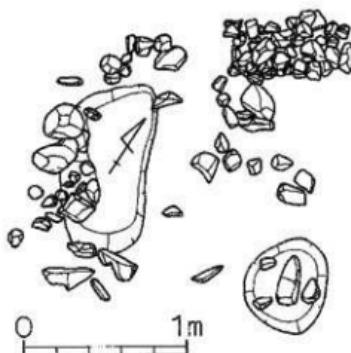
SK26 SK25の北だが、一部岸壁杭の下に在り全容はわからぬ。検出部は、内径 $3.6m \times 2m$ ・深さ $0.8m$ の平面瓢箪形を呈している。

SK27 SK25の北に位置し、内径 $1.8m \times 1.3m$ ・深さ $0.6m$ の平面手形を呈す土壌である。

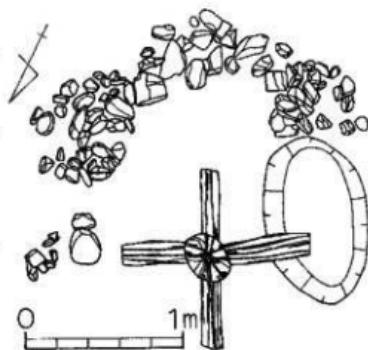
SK28 SK27の北東に在り、内径 $21m \times 0.8m$ ・深さ $0.6m$ の平面隅丸長方形を呈す土壌である。

SK29 SK25の北で検出した土壌で、内部に大量の石が入っていた。内径 $27m \times 22m$ ・深さ $0.8m$ を測る平面歪んだ長円形を呈している。

SK30 SK29と北西で切り合うため全容はわからぬ。検出部は、内径 $27m \times 22m$ ・深さ $0.8m$ を測る平面潰れた瓢箪形を呈す土壌である。



第42図 第1区 第2遺構面  
集石造構実測図



第43図 第1区 第2遺構面 実測図

SK31 調査区下流側に在り、内径 $0.9m \times 0.8m$ ・深さ $0.7m$ の平面精円形で、北東側に石敷き状の集石があり、周囲に径 $5 \sim 10cm$ の杭がある。

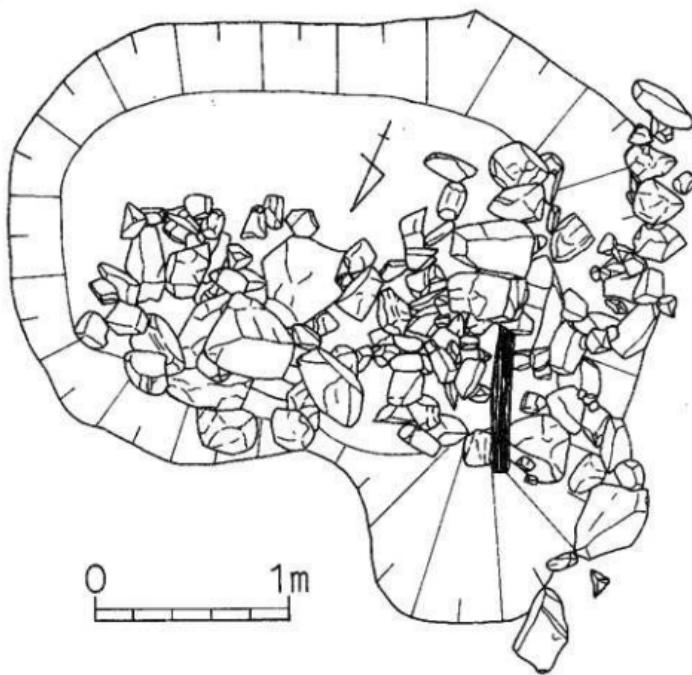
SK32 一部北西調査区外のため全容は不明である。検出部は、内径 $1.3m \times 0.9m$ ・深さ $0.7m$ の精円形で、中央に径 $0.5m \times 0.5m$ の桶を入れるが、かなり腐食している。

SS02 調査区下流側に位置する集石造構で、拳大の石を $2.5m \times 1m$ の範囲で検出した。

SS03 調査区下流側に在り、 $10 \sim 40cm$ 大の石を $1.4m \times 0.4m$ の範囲で検出した。

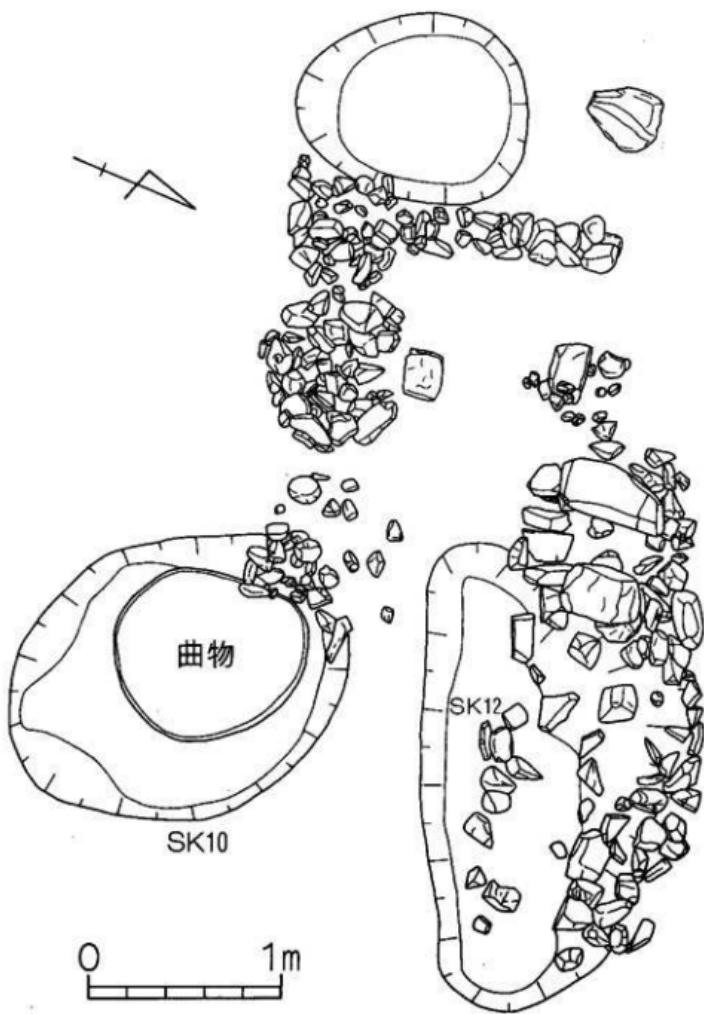
SS04 一部北東調査区外のため全容は不明だが、 $1.5m \times 1m$ の範囲に拳大の石を検出した。

SS05 SS04の南西に位置し、平面 $1.6m \times 1.6m$ のコの字状を呈している。北西から南西にかけてL字を呈する石列状になり、両南東端には $70cm$ 大の石が見られる。



第44図 第1区 第2造構面 土壌(SK29)実測図

- SS06 SS05の南西に在り、 $1.1m \times 0.9m$ のコの字形を呈している。北西から南東にかけてし字を呈する石列状になっている。
- SS07 SS04の南東に位置し、検出長 $14m$ ・幅 $1m$ の石敷き状に拳大から人頭大の石が検出されたが、所々破壊を受けて石が無くなっている。
- SS08 調査区南東側に位置し、 $1m \times 1m$ の範囲に拳大から人頭大の石を検出した。
- SS09 調査区中央附近に在り、 $1.3m \times 0.5m$ の範囲で拳大から人頭大の石を検出した。
- SS10 調査区中央附近で検出し、拳大の石が石敷き状に半円形を呈する。幅 $0.5m$ で、内径 $1m \times 0.5m$ を測る。
- SS11 調査区上流側に位置し、 $10\sim70cm$ 大の石を $4m \times 2.5m$ の平面梢円形状に検出した。周囲には、径 $5\sim10cm$ の杭が埋むように並んでいる。
- SS12 調査区中央附近に位置し、拳大の石を $2.3m \times 1.4m$ の平面菱形状に検出した。
- SS13 調査区上流側に在り、拳大から人頭大の石を $0.7m \times 0.8m$ の平面五角形状に検出した。



第45図 第1区 第2遺構面 実測図

SS14 SS10 の北西に位置し、拳大から人頭大の石が  $1.1m \times 0.5m$  の範囲で積み上げたようになる平面台形状を呈する。

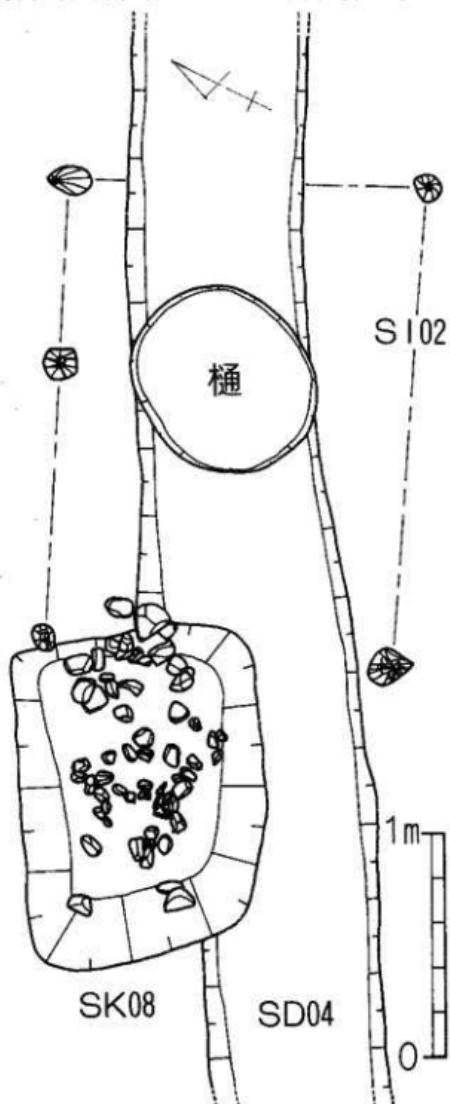
SS15 調査区上流側に在り、  
拳大から人頭大の石を積み上げ  
るようになっていたようだが、一  
部を除きほとんど破壊されてい  
る。

SI02 調査区上流側に在り、  
中央に桶を入れていたと思われ  
るが、検出したのは内径  $90cm \times$   
 $80cm$ ・深さ  $80cm$  の落ち込みであ  
り、それを掛むように径  $10\sim20$   
cm の杭が方形に並ぶ。

SB04 主軸が北西から南東を  
向く掘立柱建物跡だが、南東側  
調査区外へ延びるため全容は不  
明である。検出規模は 4 間  $\times$  3  
間で、梁行  $7.2m$  ( $1.7+1.9+1.9+$   
 $1.7m$ )・桁行  $3.3m$  ( $1+1+1.3m$ ) を  
測る。柱穴の径  $0.3\sim1.5m$  ・深さ  
 $0.2\sim0.3m$  で、南西側に棚状の  
柱穴列が南北に走っている。

SB05 調査区下流側に位置し、  
主軸が北西から南東を向く礎石  
建物跡だが、所々行が無くなっ  
ており全容は不明である。検出  
規模は 2 間  $\times$  3 間で、梁行  $2m$   
( $1.2+0.8m$ )・桁行  $3.4m$  ( $1.2+1.1$   
 $+1.1m$ ) を測り、 $10\sim70cm$  大の  
石が多く使われる。

SB06 調査区上流側で検出し、  
主軸を東西方向に向け、基盤石



第46図 第1区 第2遺構面 実測図

が集石基壇状になる建物跡で、拳大から人頭大の石が積み上げたようになるが、搅乱によってかなり破壊を受けているため、検出した規模は長辺  $1.4m$ ・短辺  $1.4m$  である。

SD01 調査区下流側で検出した北西から南東へ延びる幅  $20cm$  の石列溝である。かなり搅乱による破壊を受けているため全容は不明だが、主に  $10\sim40cm$  大の石を使い、東側  $0.6m$  と西側  $2.5m$  が残っている。

SD02 北東調査区外から南西へ走る溝である。検出長  $22m$ ・幅  $1m$ ・深さ  $0.6\sim1m$  を測り、底部は北東から南西へ傾斜する。

SD03 SD02 から南東に延びる溝だが、端部が途中からわからなくなるため全容は不明である。検出長  $8.4m$ ・幅  $1m$ ・深さ  $0.6m$  を測る。

SD04 SD02 のほぼ南西延長線上に位置し、北東から南西調査区外へ延びる溝である。検出長  $11.2m$ ・幅  $1m$ ・深さ  $1m$  を測り、SD02 と繋っていたとも考えられるが確認することはできなかった。

SD05 調査区南東側で検出し、北東から南西方向へ延びる溝である。両端部がはっきりしないため全容はわからないが、検出長  $5.7m$ ・幅  $0.5m$ ・深さ  $0.2m$  を測るものである。

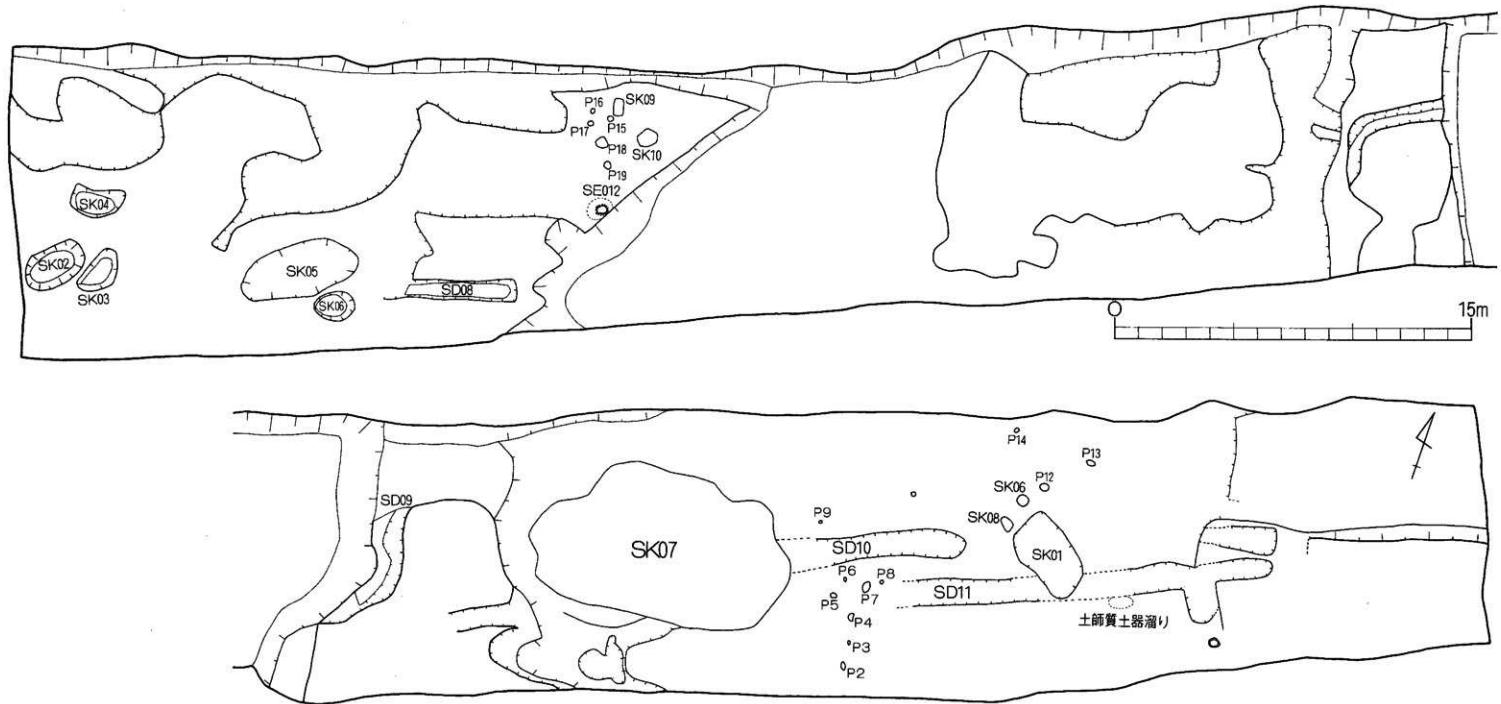
SD06 SD05 の南東隣りに位置し、北東から南西方向へ若干湾曲しながら延びている。両端部共途中でわからなくなるため全容は不明だが、検出長  $5.5m$ ・幅  $0.4m$ ・深さ  $0.3m$  を測る溝である。

SG04 SK29 の西侧肩部で検出した石列で、ほぼ南北に走っている。検出長  $4.5m$  を測り、全体に若干湾曲している。

SG05 調査区中央附近に位置し、南東から南西に向って L 字状に曲る石列である。検出長  $4m$  で、南東側が  $1.8m$  で南西側は  $2.2m$  を測り、全体に外側へ面を揃えている。両端部からそれぞれ  $70\sim80cm$  内側に礫石を思わせる石が見られることから、建物の区画を表すものかも知れない。

SX01 SS10 の北西に位置し、径  $10cm\times10cm$  を測る 2 本の角材がそれぞれ直交するように差し込まれる径  $30cm$  の柱で、平面十字状を呈している。角材は、柱根部に空けられた  $12cm\times10cm$  の 2 つの方形穴に入れられているが、これらの穴は北東から南西方向と北西から南東方向とに  $10cm$  の間隔で空けられている。

SZ01 調査区下流側で検出した道路跡で、北東側調査区外から南西へ延びている。南東側には、 $30\sim70cm$  大の石による幅  $0.6m$  の石列溝が走っており、北西側には拳大から人頭大の石による石列とそれに沿って幅  $0.5m$  の溝が延びているが、これらは恐らく側溝と思われる。南西側が搅乱によって破壊されているため全容は不明だが、検出長  $5.5m$ ・幅  $3m$  を測るものである。



第47図 第Ⅱ区 遺構全体図



第48図 第Ⅱ区 第1遺構面  
石列遺構実測図

## 2. 第Ⅱ区

第Ⅱ区の海岸に位置する長さ 120m と上下流に細長い調査区で、約 1,500 m<sup>2</sup>について調査を実施した。ここでは 2つの遺構面を確認したが、調査途中に台風による水害のため調査区全域が水没し、それによって遺構面が削り取られてしまったため、完全な調査を実施することはできなかった。

### 第1遺構面

厚く堆積していた砂層を全て取り除いたところで確認した遺構面だが、上流側半分程度は流水の影響によって既に削り取られて無くなってしまっており、確認した部分もかなり搅乱を受けていたが、それでも石列1(SD01)と土器溜り1(SH01)を検出することができた。以下、それらを順に述べて行く。

SD01 調査区下流側で検出した石列遺構であり、ほぼ南北に延びている。全体にかなり搅乱を受けているため、破壊が進んでいる。南側は50cm大の石がL字状になり、内部に大量の拳大の石が見られ、中央に内径60cm×50cm・深さ40cmの落ち込みがある。北側は20~60cm大の石が使われるが、ほとんど形状はわからない。恐らく、南側が井筒による石敷井戸で、それに連なる右列溝ではなかったかと思われる。

SH01 SD01 の南東側で検出した土器溜りである。かなり大量の土師質土器が、70cm×50cmの範囲に重なるよう

に検出された。完形品も数点見られるが、ほとんどのものが破壊されている。どれもほぼ同じような作りで、口径11cm・器高2.5cm程度を測るものばかりである。

棺桶検出部 この部分は、第1造構面に含まれると考えられるが、周囲より50cm程度高くなったマウンド状となっており、その上部で棺桶造構を検出したが、恐らく地山とな

っている黒灰色土を盛って造ったものと思われる。棺桶は3基(SJ01・02・03)を検出し、他にも似たような落ち込みがあったが、桶は確認していない。以下、順に述べて行くが、この部分を検出中に水没してしまい、細部については不明のため、ここでは検出していた部分についてだけの記述となることを付け加えておく。なお、この部分はまだ南東側調査区外へも続いているようである。

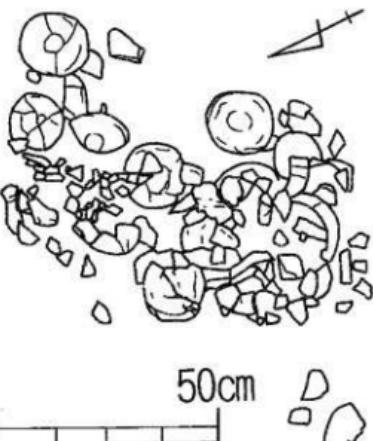
SJ01 調査区中央附近で検出したもので、上部はかなり破壊を受けていた。残存部の内径70cm×40cm・深さ70cmを測り、南西側が潰れたようになっているが、恐らく長円形を呈していたと思われ、側板の上部四ヶ所に径1cmの穴がそれぞれ向い合うように空けられていた。内部には土師質土器皿3枚と取手付の桶蓋が入っていたが、骨はかなり腐食が進んでおり、チップ状になっていた。

SJ02 SJ01の西に位置するもので、上部に墓石状の人頭大の石を数個置いていた。桶は腐食して底部に少し残るだけであったが、ほぼ円形を呈していた。骨は母子と考えられる2体分を検出し、唐津皿・土師質上器皿・櫛等が副葬されていた。

SJ03 SJ01の東に位置するもので、箱型の棺桶であったが、底板と側板10cm程度しか残っていなかった。骨は1体分が検出され、ガラス玉と木玉による珠数や煙管・土師質土器皿が副葬されていた。

## 第2造構面

第1造構面下約30cmで検出した造構面だが、造構検出を終えた所で水没してしまい、状況が全くわからないため、取り敢えず検出していた造構の種類だけでも述べておく。石積井戸1・廻跡1・方形石組施設1等の他、礎石・土壙・柱穴を検出していた。



第49図 第Ⅱ区 第1造構面 土師質土器漬り実測図

## 遺物

今回の調査では、堆積砂層（表土層）から出土したものも含め、非常に多くの遺物が採集されている。そして、その中の大半を占めているのは陶磁器であり、他に金属製品・石製品・漆工品・木製品等がある。以下、各調査区で確認した層位（遺構面）毎に、陶磁器の組成を中心として記述し、その他の資料については名称だけを述べて行くものとする。

### 1区

表十層 この層は、昭和49年に第1遺構面が調査された後、今回調査を実施するまでの間に堆積したものであるため、採集した遺物も上流から流れ込んできたものばかりであり、小量しかないが、これらを見てみると日本製品が多いようである。土師質土器を含む日本製品の中で備前焼の壺・甕を除くと、唐津焼・伊万里焼が多く見られ、他に美濃焼も含まれている。これらは碗・皿が主に採集されているが、そのほとんどが小片であり、器形のわかるものとしては、唐津焼(50-4)・伊万里焼穴付碗(50-2)・美濃焼灰釉皿(50-7)程度しかない。中国製品は、採集したもののほとんどが小片であり、器形のわかるものはなく、量もわずかである。この他の遺物としては、円形加工陶器(50-12・13・14・15・16)・砥石(50-5)・石臼(50-6)・瓦・古錢・角釘・埠端・下駄等が見られる。

第1層 この層で出土した遺物は大量にあるが、土師質土器製品（皿を中心）を含む国内産のものが多く、中でも唐津焼と伊万里焼が半数以上を占めており、他に美濃焼・志野焼・備前焼が見られ、織部焼も數点認められる。唐津焼は、碗・皿を中心となっており、口円部が波形となるものや齊側状のものも見られるが、いずれも口径12cm前後のものである。皿は、ほとんどが腰く外へ開くものであり、碗は腰が張って口円が開かないものと、腰が張らずに開くものとがある。この他に刷毛目文様の皿(51-21)や二彩の大皿(51-22)があり、肩が張った小壺(51-23)や徳利(51-26)も見られる。伊万里焼も碗と皿が主であり、ほとんどのものが文様を持っている。皿は、口円部が外反するものとしないものがあり、口径13cm前後で、菊花状(52-1)になるものがある。碗には、腰が張って口円部が開かないものと、腰が張らずに開くものとがあり、いずれも口径10cm前後を測る。美濃焼と志野焼は、小片ばかりで器形のわかるものは少ないが、口径10cmの皿(50-10)と口径6.1cmのぐい呑み(50-8)がある。備前焼は小片ばかりであり、壺・甕・擂鉢が多く出土している。中國製品は染付が多数を占め、白磁・青磁・褐釉の数は少ない。染付・白磁・青磁は碗・皿が主であり、褐釉は壺・鉢が多く見られる。この他に、朝鮮（李朝）系の碗や皿も少量見られるが、そのほとんどが小片であり、器形のわかるものは少ない。その他の遺物としては、曲物の底板(53-15)・鋤(53-17)・下駄(53-16・18)・箸(53-19)・砥石(53-22)・石臼(53-20)・硯(53-21)があり、金属製品では鉈(53-13)・刀子(53-1・12)・小柄(53-

-5)・銅製柄杓(53-14)・銅製小碗(53-10)・煙管(53-2・3・4)・銅製鍵(53-8)・角釘・鉄砲土等があり、他に匙(53-9)・簪の飾り玉(53-11)・瓦・漆器椀・木製柄杓・木製人形等が採集されている。また、第1遺構面の検出遺構内からは、完形品に近い唐津焼の片口(54-4)や透明皿と考えられる土師質土器皿(54-7)の他、角釘や石臼等も出土している。

第2層 この層では、中国製品である白磁や染付が多くなり、日本製品の伊万里焼が少なくなつてほとんど見られなくなる。中国製品には、青磁・白磁・染付の碗・皿や、褐釉の壺・鉢の他、藍彩や緑釉も含まれるが、そのほとんどが小片であるため、器形のわかるようなものは見られない。日本製品は、上部質土器を除くと唐津焼の碗・皿が多く、備前焼の壺や甕・美濃焼の灰釉皿や鉄釉碗も見られるが、いずれも小片がほとんどであり、器形がわかるようなものは少ない。この他の遺物としては、刃ばき(54-3)・砥石(54-2)・刀の鍔(54-19)・笄(54-14)・小柄(54-15)・土錐(54-13)・角釘・古錢・煙管・瓦・漆器椀・曲物の底板・桶の底板・下駄等が出土している。また、第2遺構面で検出した遺構内から出土したものの状況を見ると、中国製の染付・白磁の碗や皿と備前焼の壺・甕・指鉢や唐津焼の碗・皿が多く見られ、美濃焼の灰釉碗・皿や鉄釉碗も出土しているが、伊万里焼は小片が少量採集されたのみであった。この遺構内から検出されたものの中には、小刀(54-17)・刀子(55-13・56-1)・小柄(55-18)・鎧(55-25)・銅製注口(56-4)・留め金状製品(56-8)・角釘(56-9)・硯(55-10)・砥石(55-11)・植形木製品(55-20)・下駄(56-3・11)・瓦・古錢・漆器椀等が出土している。

## I区

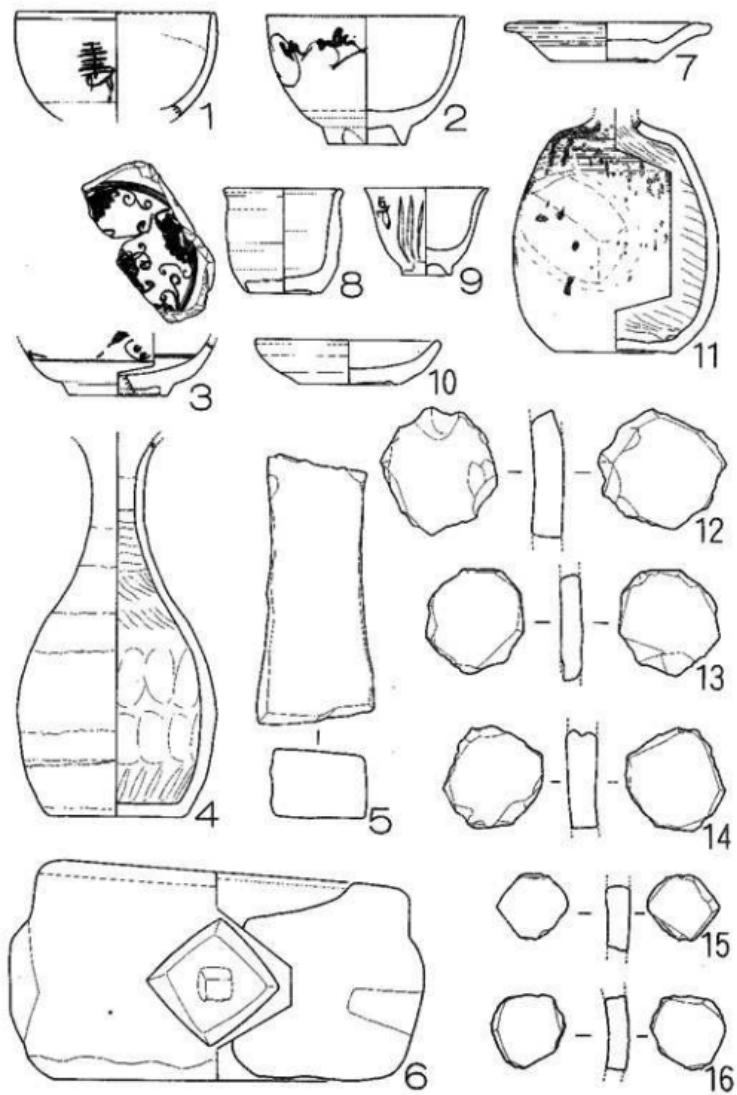
堆積砂層 この層から採集された遺物は、国内産である土師質土器の皿と備前焼の壺・甕が多いが、それらを除いて見てみると唐津焼・伊万里焼の碗・皿が多く、唐津焼には平面器形が三角形状になり、口円部三ヶ所に三個が一組となった胎土を張り付けた波形口円の皿(57-8)も見られ、他に美濃焼の折縁皿(57-11)も見られるが数は少ない。中国製品には、青磁・白磁・染付の碗や皿の他、褐釉の壺や鉢・藍彩・緑釉も見られるが、いずれも小片ばかりで少量であり、器形のわかるものも少なく、わずかに青磁の碗(57-9)・皿(57-14)や染付の皿(57-12・13)が見られる程度である。その他のものとしては、硯(57-17・18)・銅製活(57-19)・角釘・古錢・瓦・煙管・石臼・砥石・宝篋印塔・轆の羽口・鉄岸・壁土・漆器片等が採集されている。

第1層 この層からは、皿を主体とする土師質土器製品を含む日本製品である備前焼・唐津焼・伊万里焼が多く見られ、中国製陶器はそれらの半分程度しか見られない。中国製品では、染付の碗・皿が多く、他に青磁の碗や皿・白磁の皿や鉢・褐釉の壺や鉢・藍彩も見られるが、これらはほとんどが小片であり、器形のわかるものは見られない。土師質土

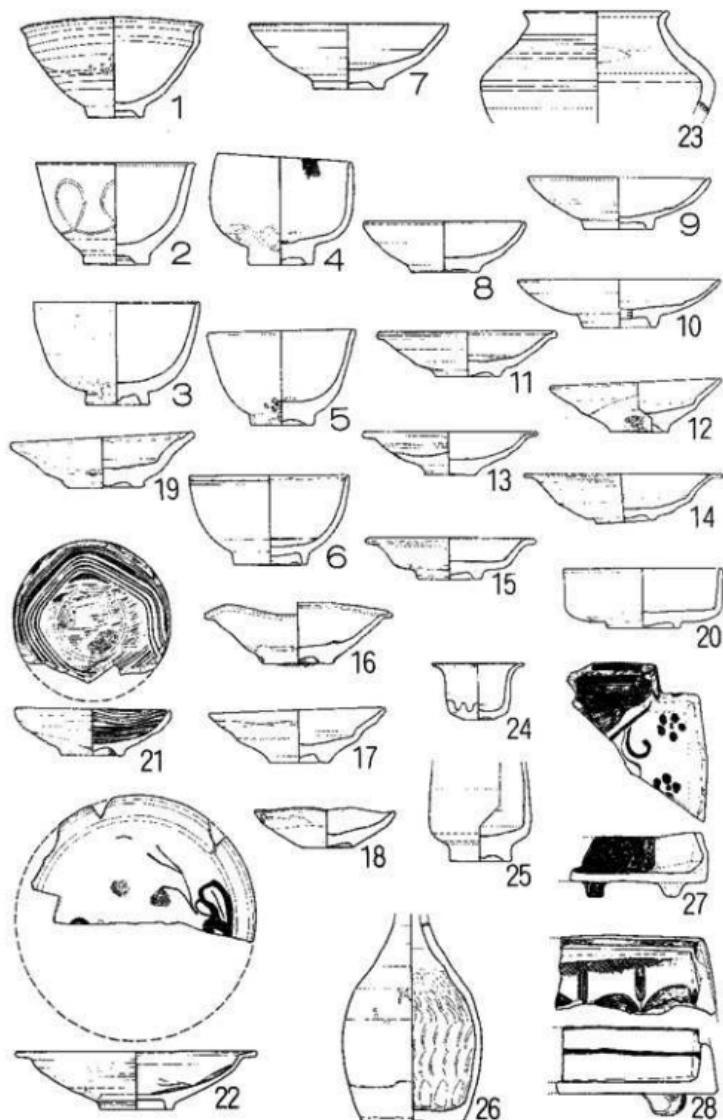
器製品を除く日本製品では、備前焼の壺・甕・擂鉢が多いが、いずれも器形のわかるものはほとんどなく、ほぼ完形に近い擂鉢(58-9)が見られるだけである。唐津焼は、碗・皿が多く、他に壺・擂鉢・徳利等も見られるが、ほとんどが小片であり、器形のわかるものとしては、平面器形八角形を呈する波形口円の鉄絵皿(58-2)が見られ、伊万里焼も碗、皿を主体とし、ほとんどが小片であるため器形のわかるものが少ないが、菊花状の染付皿(58-1)等の他数点見られる。瀬戸焼・美濃焼は若干出土するが、人半が小片であり、かろうじて器形が復元るのは瀬戸焼の徳利(58-10)だけである。他に、志野焼・信楽焼・越前焼等も見られるが、小片が少量出土したのみである。これらの出土品以外では、刃ばき(58-8)・土鉢(58-13)・砥石(58-14・15)・角釘・硯・占銭・漆器椀・曲物の底板・鉄砲玉・古錢等が採集されている。

黒灰色砂質土層 棚柵検出部であるこの層からは、狭い範囲であるため出土した量は少ないが、土師質土器皿の他は唐津焼の碗・皿が多く、備前焼の甕や伊万里焼・美濃焼の碗・皿の日本製品と中国製品である青磁・白磁・染付の碗・皿や褐釉の鉢等はほぼ同程度に採集されている。しかし、これらのはほとんどが小片であるため、器形のわかるものは少なく、唐津焼の杏型のものを含む碗(59-1・2)と基部底の中国製染付皿がある程度である。この他には、2羽の向い合う鶴が掘り込まれる金箔を塗った銅製蓋状製品(59-7)や角釘・古銭等が見られる。また、柵柵の内部から採集された副葬品には、土師質土器皿の未使用品が多いが、これらのはほとんどが口径11cm~12cm前後を測るもので、第1造構面の土器溜りから出土したものに近く興味深い。この他には、唐津焼の皿(59-17・19)・煙管(59-9)・銅製皿(59-10)・櫛(59-14)が2本と珠數が見られる。

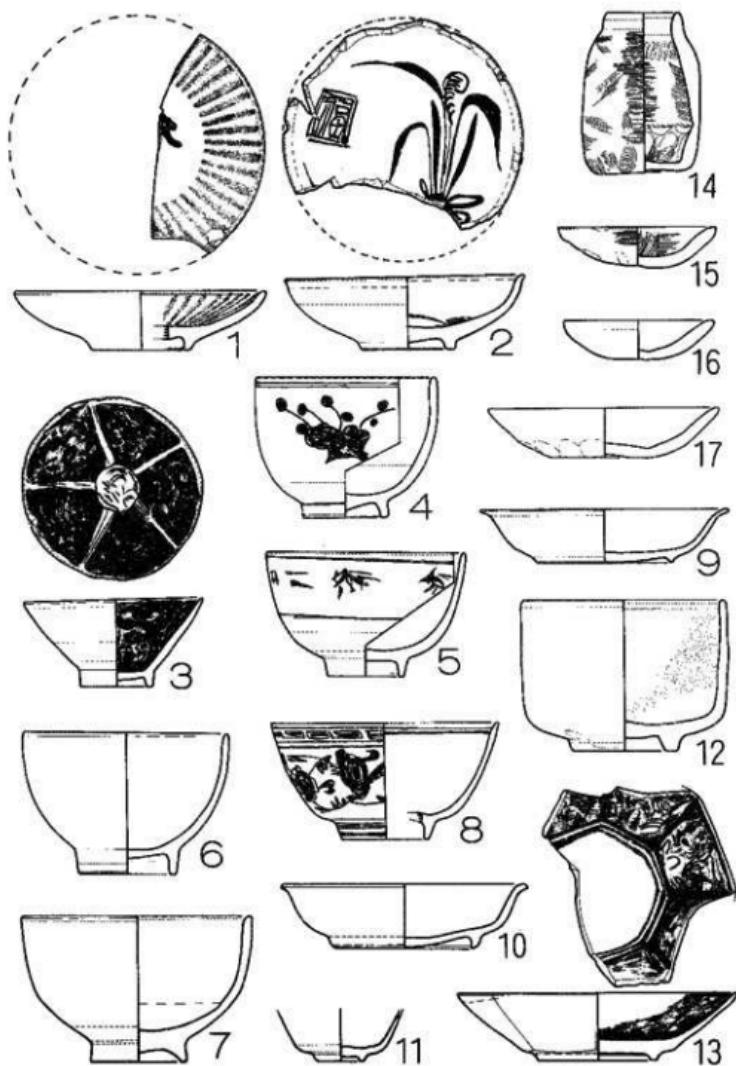
第2層 この層では、土師質土器製品(皿を中心)が全体の半数を占めている。土師質土器製品以外の日本製品では、備前焼の壺や甕・唐津焼(絵唐津を含む)の碗や皿が多く見られ、美濃焼の灰釉碗や皿と鉄釉碗・志野焼の香合等が含まれている。中国製品では、染付・白磁の碗・皿が多く、青磁の碗や皿・褐釉の壺や甕の他、藍採等も若干含まれている。しかし、これらのものは全て小片がほとんどであるため、器形のわかるものが少なく、わずかに絵唐津の山形の大きな皿(60-21)や志野焼の香合の身(60-22)の日本製品と、坏部の底が高台内に突出し、体部外面に波濤文と芭蕉葉文が描かれる中国製の染付碗(60-20)が見られる程度である。その他の遺物としては、円形加工陶器(60-23)・小鎌(60-24)・占銭・角釘・瓦・漆器椀・曲物の底板・下駄・小柄・硯・刀子・桶の底板・有孔板片・輪の羽口・鉄滓等が出土している。ただし、ここで注意しておきたいのは、中国製品と日本製品の備前焼・唐津焼が多く、美濃焼も数量的にまとまっているのに比べ、伊万里焼がほとんど見られないことである。



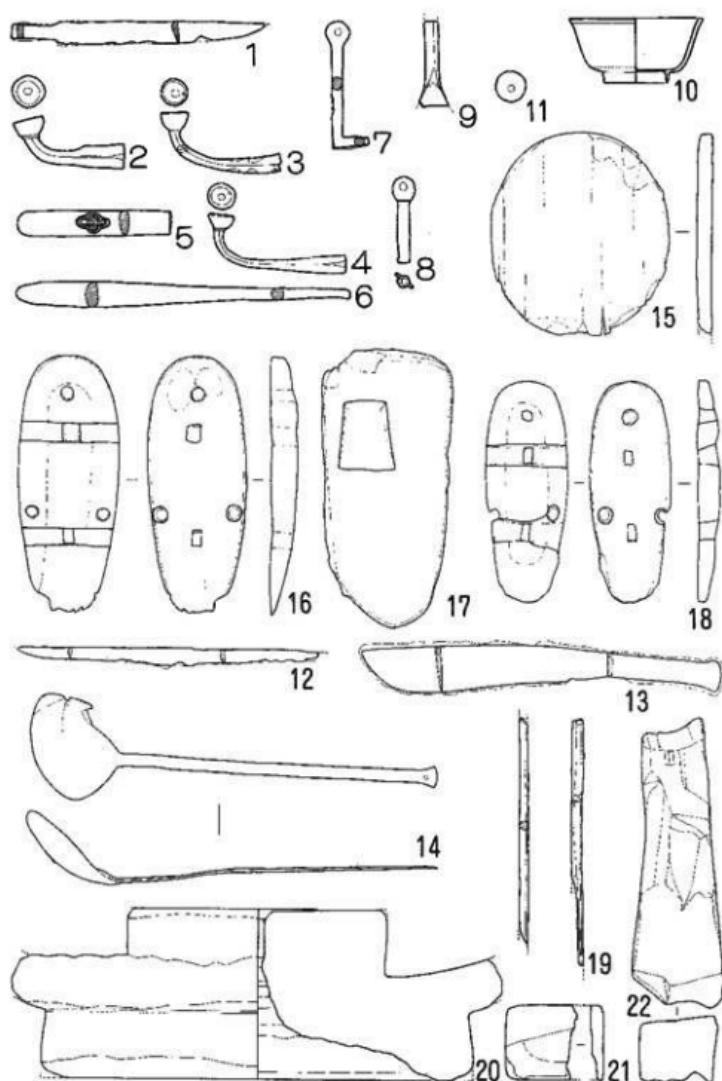
第50図 第1区 表土層・第1層出土遺物実測図



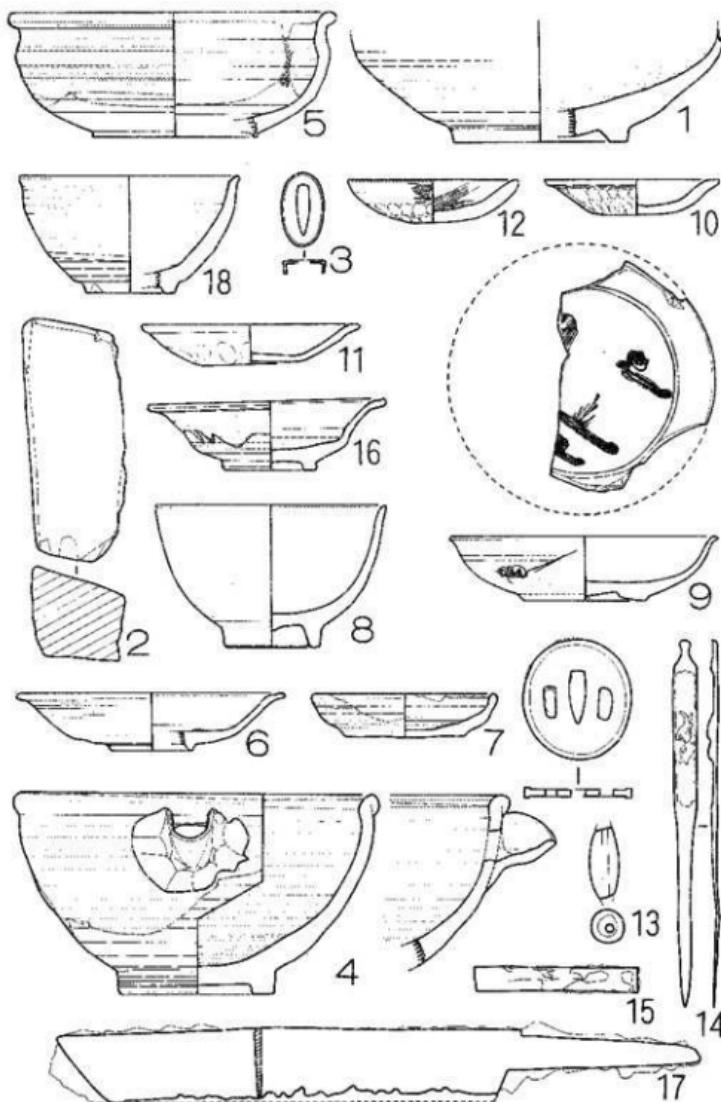
第51図 第1区 第1層出土遺物実測図



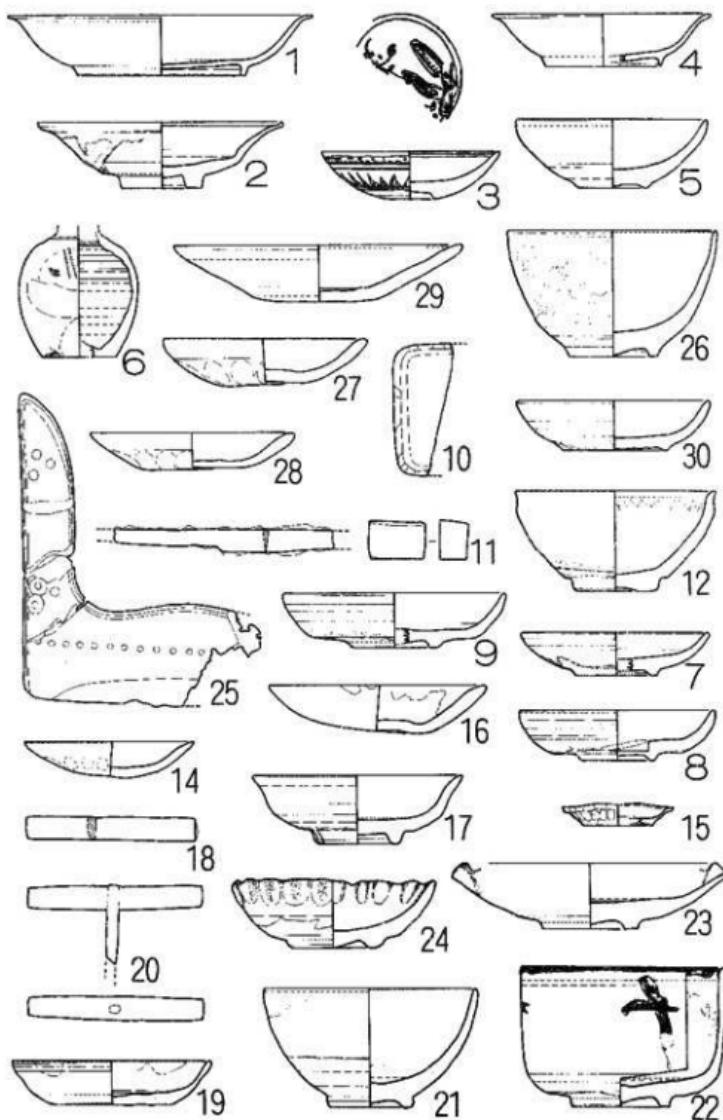
第52図 第1区 第1層出土遺物実測図



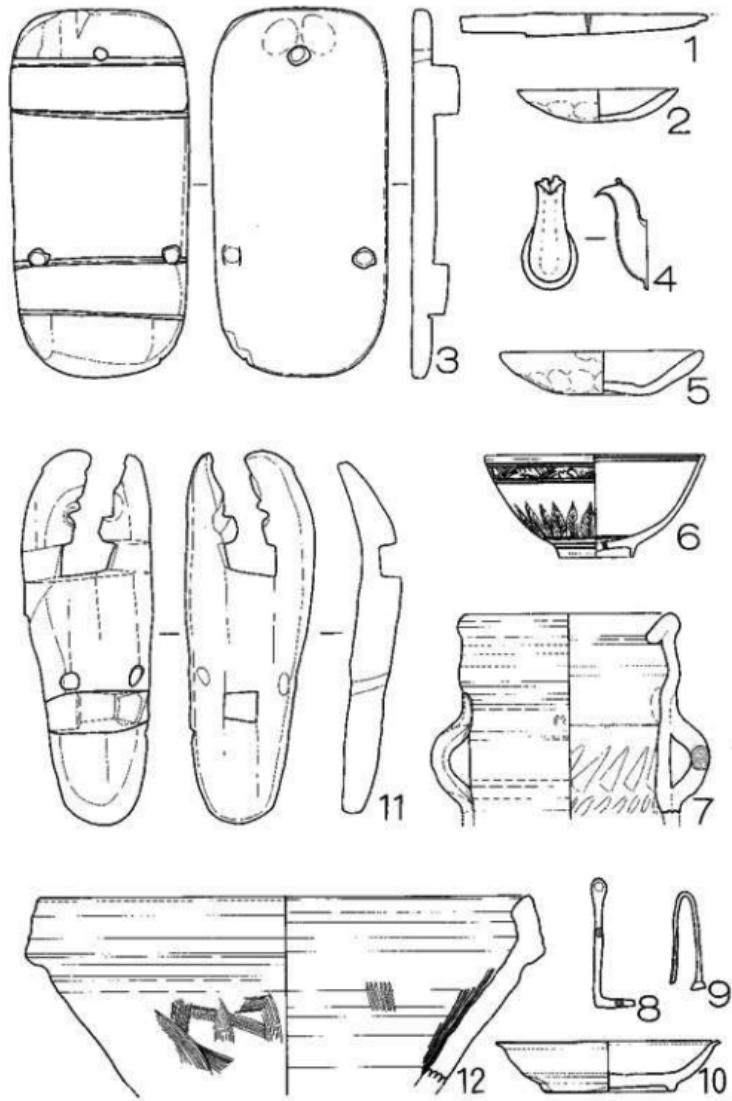
第53図 第1区 第1層出土遺物実測図



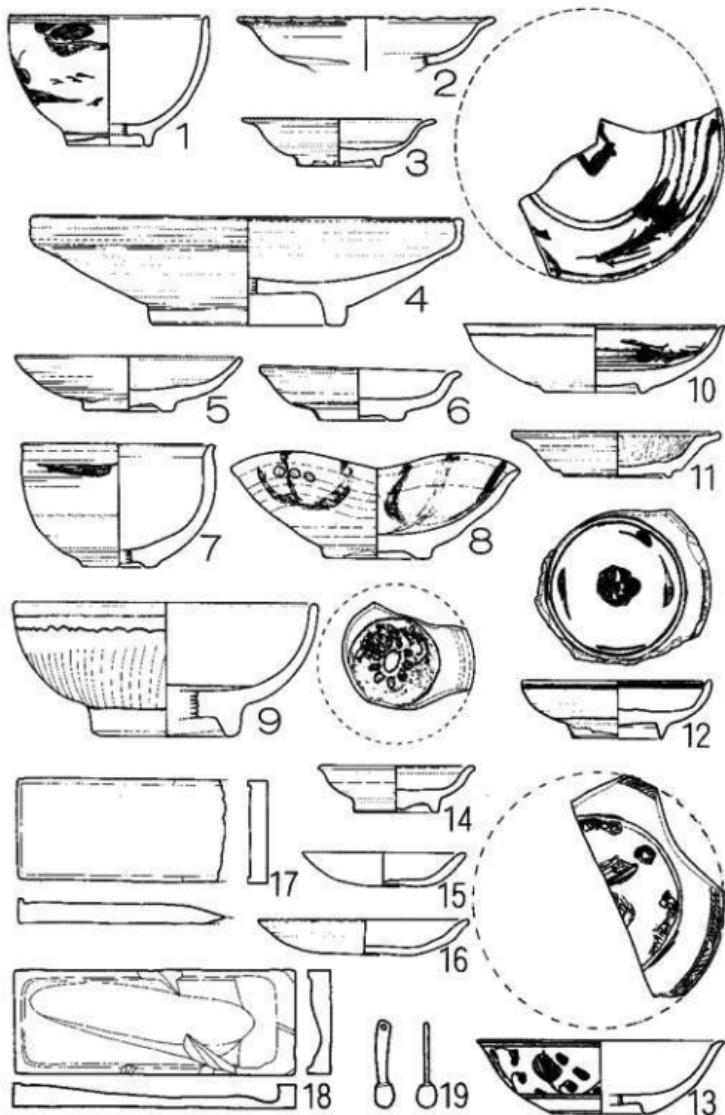
第54図 第1区 第1遺構面・方形溜枡状石積施設  
第2遺構面 出土遺物実測図



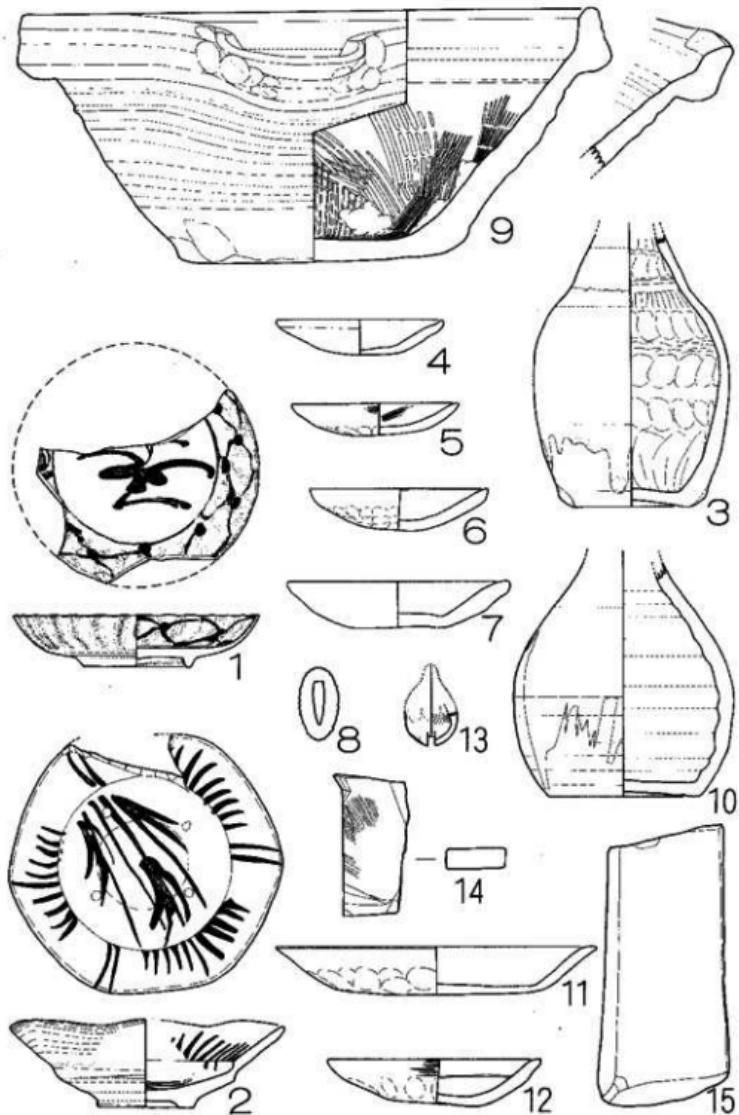
第55図 第1区 第2遺構面 SD02.05.06.SK03.07他出土遺物実測図



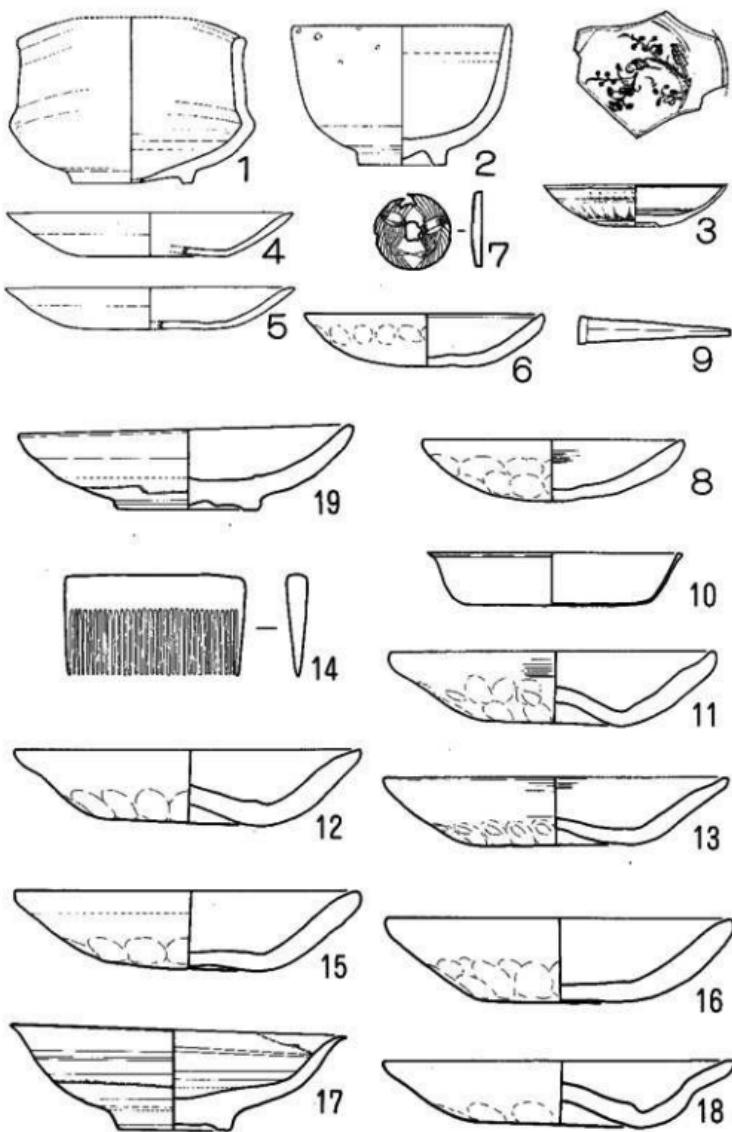
第56図 第1区 第2遺構面 SK 23.41.48.53 出土遺物実測図



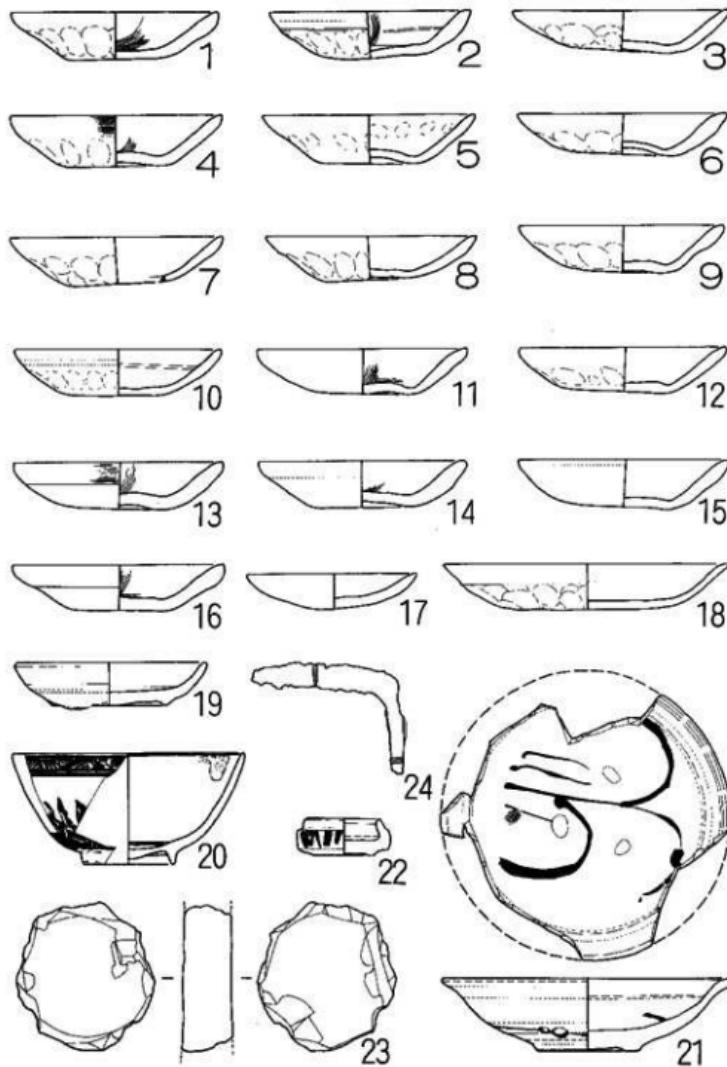
第57図 第Ⅱ区 堆積砂層出土遺物実測図



第58図 第Ⅱ区 第1層・第1遺構面 出土遺物実測図



第59図 第Ⅱ図 黒灰色砂質土層 SK10.SX01.02.03 出土遺物実測図



第60図 第Ⅱ区 第1遺構面 土師質土器溜り・第2遺構面出土遺物実測図

## 考察

遺構・遺物については前述の通りであり、ここでは2つの調査区に別けて実施した発掘調査によって確認した複数の遺構面から出土した遺物をもとに、その陶磁器の組成と傾向について検討してみたい。なお、調査区が2つに別れているため、I区・II区の順で各遺構面毎に順次述べるものとする。

### I区

第1遺構面から出土した陶磁器の中では、土師質土器を含む日本製品が多く見られ、中国製品は相対的に少なく、わずかに染付が目立つ程度である。日本製品の中で土師質土器・備前焼を除くと、唐津焼・伊万里焼が半数以上を占めているが、中でも唐津焼は多く見られる。昭和56年度に実施された富田橋に近いIP区の調査では、寛永21年(1644)の跡を持つ木札が出土した堆積砂層の上部に建物跡等を伴う明確な遺構面が確認され、この面で採集された陶磁器の組成を見ると、伊万里焼が多く唐津焼が少なくなっており、砂層より下の層では、逆に唐津焼が多く伊万里焼が少ないという今回の成果とよく似た状況であった。また、昭和50年に今回の調査区の上流側を調査した際にも、第1遺構面から出土した陶磁器は唐津焼が多く伊万里焼が少ないと記されており、同時に寛文6年(1666)の水没時の遺構が削り取られていることを示唆している。以上のようなことから、今回確認した第1遺構面は17世紀の半ば頃のものであると思われるが、寛文6年時の遺構ではなく、それ以前のものようである。

第2遺構面から採集した陶磁器の組成を見てみると、第1遺構面に比べ中国陶磁・備前焼・美濃焼・土師質土器の割合が多くなっており、逆に唐津焼が少なくて伊万里焼はほとんど見られなくなる。これまでに実施された富田川河床遺跡の調査によって得られている陶磁組成の中で、今回出土したような陶磁組成に近いものは、昭和51年に調査された現新宮橋脚部の下層と、昭和60年調査時の第2遺構面がある。昭和51年のものについては、数量的な統計がなされていないためはっきりしないが、昭和60年のものは今回の組成と類似しており、概ね江戸時代の初期に比定されているが、今一つははっきりしない部分を残している。また、検出された遺構内から出土した陶磁器の在り方も、遺構面のものとそれ程の差は見られないが、伊万里焼については第1遺構面より更に少量しか採集されておらず、遺構面との間にわずかな差があるようにも思われるが、判然としない。

なお、富田川河床遺跡のように細かい時期差の遺構が重複するような遺跡では、直的に把握できる資料の精度に限界があるため、その辺りは常に考えて置く必要がある。

### II区

第1遺構面から出土した遺物の陶磁組成は、国内産である備前焼・唐津焼・伊万里焼・

土師質土器が多く、中国製陶磁はそれ程見られず、日本製品のはば半分程度である。これらの中で、日本製品について見てみると、備前焼・土師質土器が最も多く採集されているが、それら以外では唐津焼・伊万里焼がほぼ同じ程度に出土しており、両者の間にはあまり大きな差は見られない。このような状況は、第Ⅰ区の第1遺構面の組成に近いものだが、伊万里焼の出土量からしてこちらの方がいさか新しく感じられ、寛文6年の水没時により近い遺構面とも思えるが、堆積砂層下で確認された遺構面であることから流水に晒されていたことは十分に予想されるため、正確さには欠けるかもしれない。

さらに、棺桶検川部についての陶磁組成では、国内産の土師質土器・唐津焼が多く見られ、その他の中国陶磁と国内産の備前焼・美濃焼・伊万里焼はほぼ同程度に出土しているが、数はそれ程多くはない。また、棺桶内部から採集された副葬品も、その大半が土師質土器であり、その他には唐津焼がわずかに見られるだけで、全体の出土数も少ない。この部分は検出範囲が狭いうえに、流水の擾乱を受けていることから、あまりはっきりとしたことはわからないが、この部分が特殊な遺構であり、通常の生活からほとんど関係がなく、余程のことがない限り人為的な作用で埋没することは考えられないとから、ほぼ周囲と同じような時期で、恐らく寛文6年の水没時まで存続していたものと思われる。しかし、この遺構の性格からして、この部分と通常の遺構面とは全く性格の異なるものであり、一定の期間（長期間）は不变であることが予想されるため、ある程度の時期的な幅は考えて置く必要があるだろう。

第2遺構面から採集された陶磁器の組成を見ると、国内産の土師質土器が出土陶磁全体の半数を占めており、それ以外では、備前焼・唐津焼が多く、中国製品である染付・白磁も多く見られるが、伊万里焼はほとんど見られなくなる。これは、第Ⅰ区の第2遺構面とよく似た状況であり、ほぼ同時期のものと考えて差し支えないものと思われるが、この遺構面が第Ⅰ区の第2遺構面より若干高い位置にあることには注意して置きたい。なぜなら、先述した通り、第Ⅰ区の第2遺構面には2つの時期の遺構が重複している可能性があり、仮に2つに別れていたとすると、この第2遺構面と同時期と考え得る遺構面の位置は、出土陶磁の組成からして第Ⅰ区第2遺構面よりは若干でも上に存在していなければならず、もしそのような状況があったとすれば、その遺構面はこの第2遺構面とほぼ同程度の高さとなり、第Ⅰ区の第2遺構面で検出された遺構の大半がそれより若干古い時期のものであるということになるからである。しかし、第Ⅱ区が調査途中で水没してしまい、第2遺構面の精査及び下層についての調査ができなかったため、この遺構面の詳しい状況と下層の状況が不明であり、はっきりしたことはわからない。

## IV ま　と　め

昭和61年度と62年度の調査の概要是、前章までに述べた通りであり、2年度の調査によって建物跡等を伴う複数の遺構面が確認されたが、ここではこれらの遺構面と遺構についてふれてみたい。

2年度に別れる調査の中で検出した最も古い陶磁器の組成としては、昭和61年の第Ⅰ区第3・第4遺構面と、第Ⅱ区の第3遺構面があり、これらは概ね16世紀末から17世紀初頭頃に比定されている。したがって、昭和61・62年度の調査によって検出された遺構面は、全て上記の時期頃から寛文6年までの間のものと考えて良いと思われる。

昭和61年の第Ⅰ区第1遺構面で検出した遺構には、遺構面をわずかだが掘り下げる検出したもの（土壙・集石遺構）と、そうでないもの（建物跡・井戸跡）とがあり、これらの間には若干の時期差が見られる。このことから、この第1遺構面は2時期のものを包摂していることがわかる。このような状況を持つものとしては、他に昭和62年の第Ⅰ区第2遺構面が見られる。これは、この遺構面（第2層）から出土した陶磁器の組成と、検出遺構内から出土した陶磁器の組成とが若干異なるように感じられたためであり、実際検出された遺構には明らかに重複（遺構の直上に位置する遺構）するものがあるが、これらが即遺構面の陶磁器組成に当て嵌まるとは言い難い部分がある。これらと逆の状況にあるのが昭和61年の第1・第2遺構面の関係である。この部分は、同じような目的を持つと考えられる遺構がわずかにがら時期の違う遺構間にそれぞれ存在し、完全にある一定期間継続した遺構であることがわかるものである。このように、富出川河床遺跡から確認される遺構面のほとんどが重複するものであり、そのため上下関係にあるはずの遺構面が混在している事が多く見られ、面的に把握することが非常に難しくなっている。

今回の調査における最大の成果と考えられるのが、昭和62年の第1遺構面で検出された棺桶遺構である。残念ながら途中で水没してしまったため、十分な調査がなされたとは言えないが、複数の棺桶と墓壙状の落ち込みを検出していることから墓地と断定しても差し支えはないと思われる。この地域は非常に狭いものであったが、南東側調査区外へまだ延びているようであり、全容については今後の調査に期待することとしたい。また、この地域の下流側で検出した石列遺構の近くで検出された土器渦りより採集された土師質土器皿と、棺桶内部から出土したものとが非常に似ていることは、これらの遺構に墓地との関連性があることを想起させるが、流水の影響が強くはっきりさせることができなかった。

なお、当地の近くには応永年間に活躍した尼子清定（尼子経久の父）の菩提寺とされる

洞光寺跡があり、それらとの関連があるとも考えられるが、位置的に少し離れ過ぎており、はっきりしない。ただ、注意して置きたいのは、この墓地が北較的富田城跡に近いことである。これは、陶磁器の組成から見た時期（17世紀半ば）からすると、既に城が松江へ移された後のものと見ることができるため、さしたる問題ではないかも知れない。しかし、このような特殊な遺構の場合、どうしてもある程度の時期的な幅を考える必要が生じてくるが、調査区が水没したこともあるってそれを確認することはできなかった。いずれにしても、今回の調査によってこのような遺構が検出されたことは、今後も行なわれると思われる富田川河床遺跡の発掘調査によって検出されると予想される町並み遺構を考える上で、重要な資料となるのは間違いない所である。

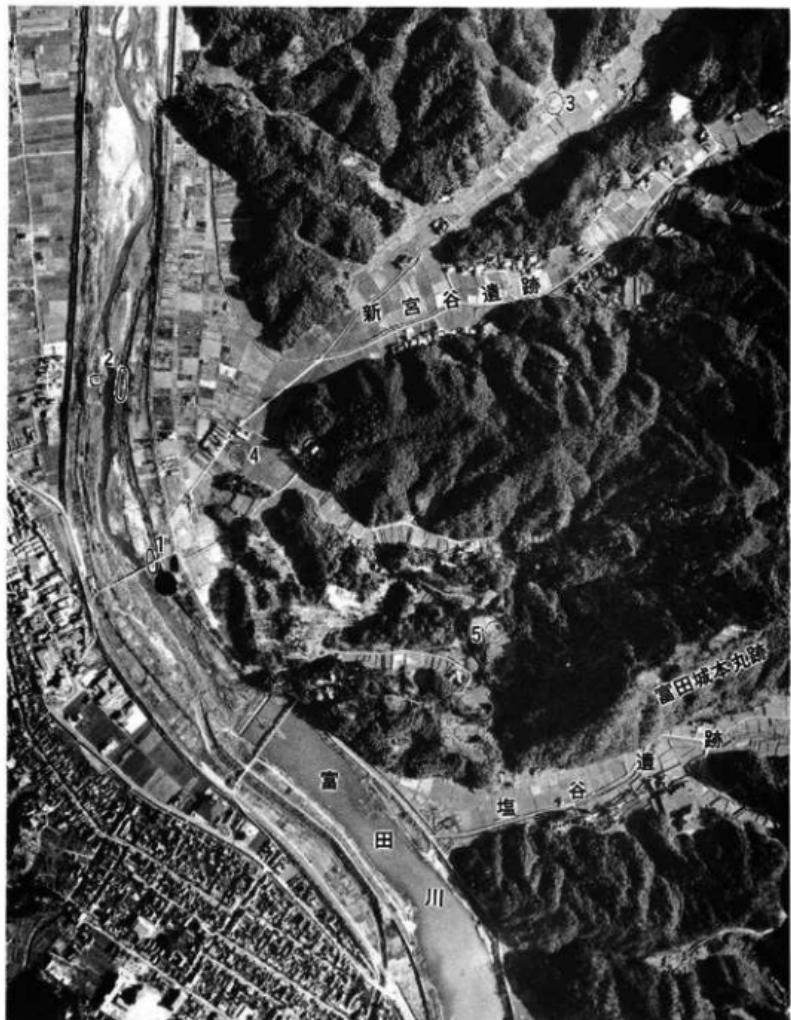
#### 参考資料

- 『富田川河床遺跡発掘調査報告』（広瀬町教育委員会・富田川河床遺跡発掘調査团、昭和52年）
- 『史跡富田城跡』（広瀬町教育委員会、昭和55年）
- 『塩谷遺跡発掘調査報告書』（広瀬町教育委員会、昭和56年）
- 『一塩谷川砂防河川改修に伴う塩谷遺跡発掘調査報告書』（富田城関連遺跡群調査整備委員会、昭和56年）
- 『新宮谷遺跡発掘調査報告書』（広瀬町教育委員会、昭和57年）
- 『新宮谷遺跡第2次発掘調査概報』（広瀬町教育委員会、昭和57年）
- 『富田川一飯梨川河川改修事業に伴う富田川河床遺跡発掘調査報告(4)-』（鳥根県教育委員会、昭和59年）
- 『富田川河床遺跡一河川災害復旧事業に伴う発掘調査概報-』（広瀬町教育委員会、昭和59年）
- 『元城敷遺跡発掘調査報告書』（広瀬町教育委員会、昭和59年）
- 『富田城関連遺跡群発掘調査報告書』（鳥根県教育委員会、昭和59年）
- 『史跡富田城跡首谷地区第一・次発掘調査概報-』（広瀬町教育委員会、昭和60年）
- 『富田川河床遺跡一河川災害復旧事業に伴う発掘調査報告-』（広瀬町教育委員会、昭和61年）
- 『一飯梨川中小河川改修事業に伴う富田川河床遺跡発掘調査概報』（広瀬町教育委員会、昭和61年）

# 図 版



図版 1.



富田川河床遺跡全景

1. 61年度調査区
2. 62年度調査区
3. 新宮党館跡
4. 里御殿跡
5. 山中御殿跡

図版 2.



1. 昭和61年度調査区 第1区 遠景(西から)



2. 昭和61年度調査区 第1区 遠景(北から)

図版 3.



1. 第1区 第1遺構面 検出状況（北から）



2. 第1区 第1遺構面 井戸跡 (SE003)

図版 4.



1. 第1区 第1遺構面 井戸跡 (SE 002)



2. 第1区 第1遺構面 井戸跡 (SE 001)

図版 5.



1. 第1区 第1遺構面 井戸跡 (SE004)



2. 第1区 第1遺構面 土 壁 (SX003)

図版 6.



1. 第Ⅰ区 第1遺構面 集石遺構 (SG 001)



2. 第Ⅰ区 第1遺構面 集石遺構 (SG 001)

図版 7.



1. 第1区 第2遺構面 廁跡 (SG002)



2. 第1区 第2遺構面 井戸跡 (SE005)

図版 8.

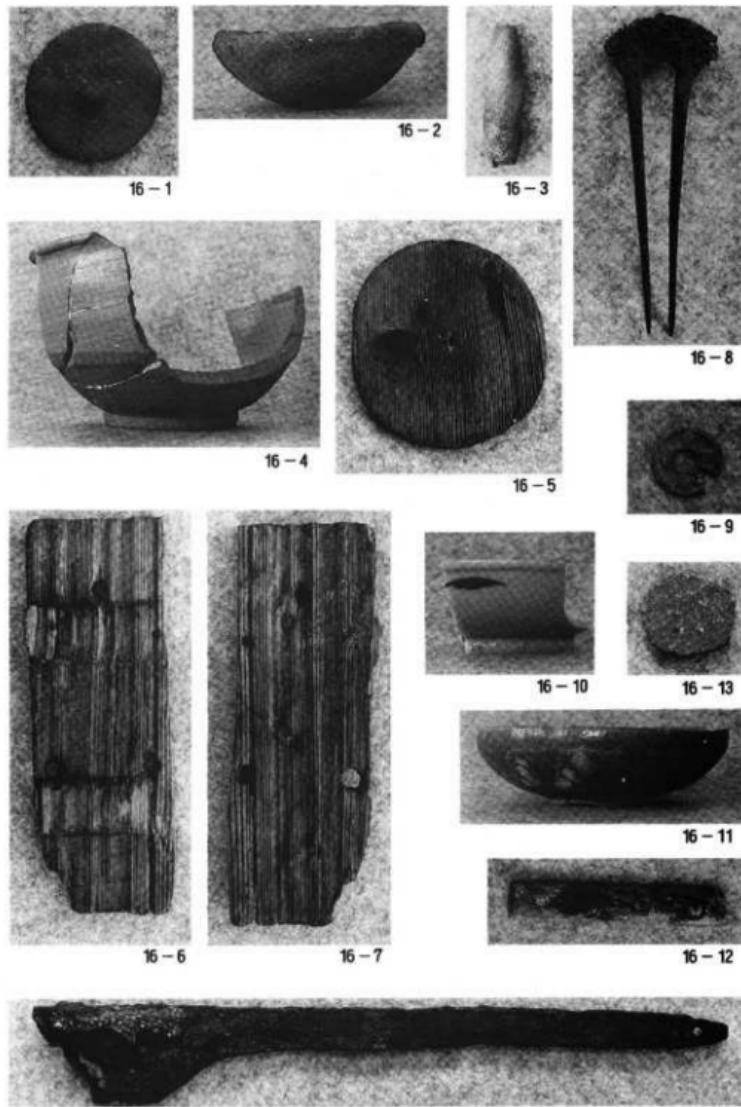


1. 第Ⅰ区 遺構全体写真（北から）



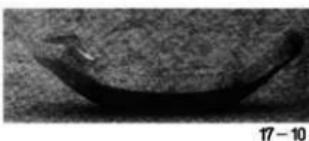
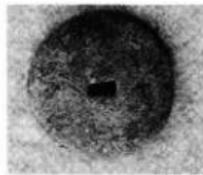
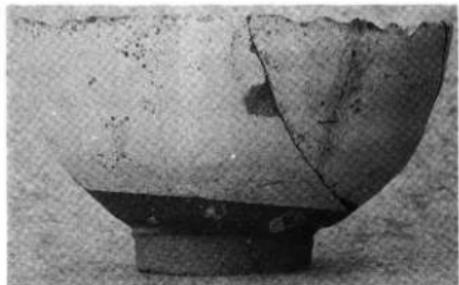
2. 第Ⅰ区 第3遺構面 石列遺構（東から）

図版 9.



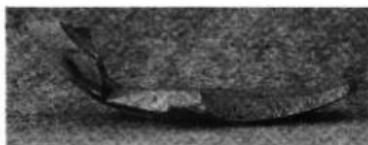
第Ⅰ区 堆積砂層出土遺物

図版 10.



第Ⅰ区 第1構面SX02、SE02、集石構出土遺物

図版 11.



18-1



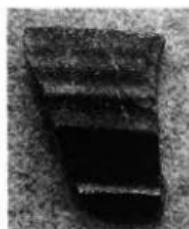
18-2



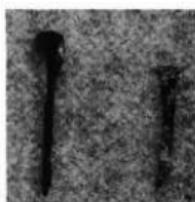
18-4



18-3



18-6



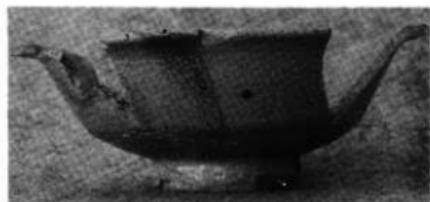
18-7



18-10



18-9



18-5



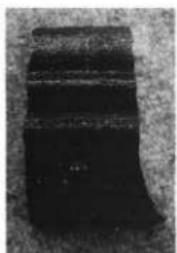
18-11

第1区 第2層 出土遺物

図版 12.



19-1



19-12



19-5



19-4



19-3



19-7



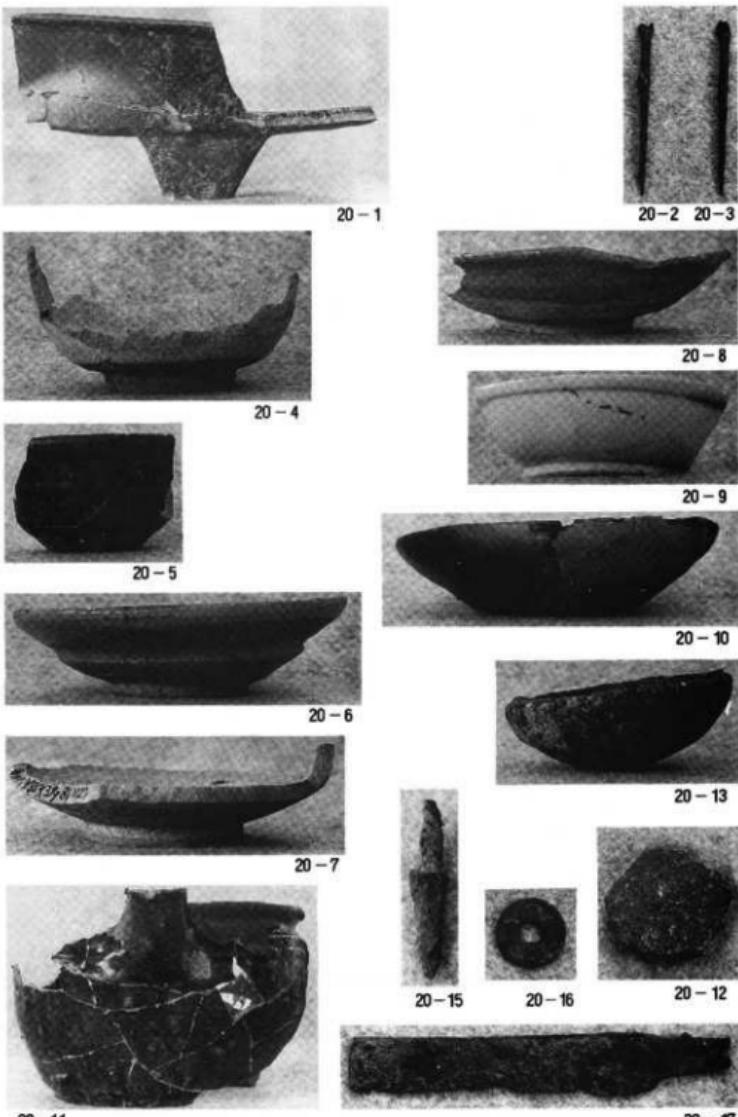
19-8



19-6

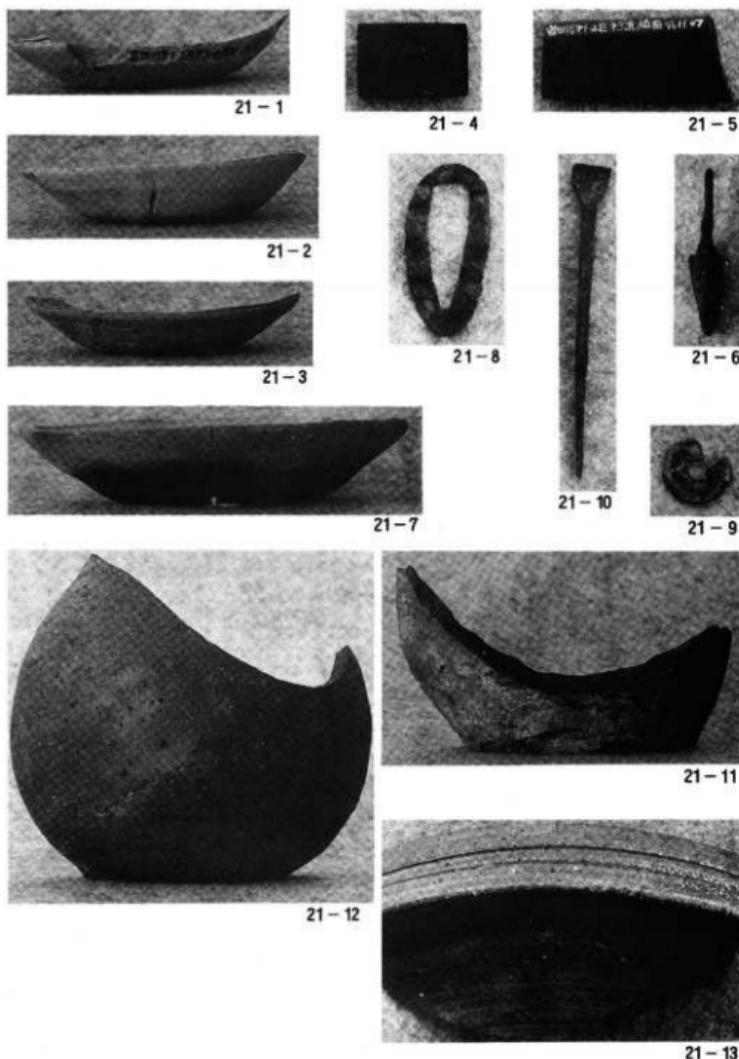
第1区 第2遺構面 SX01～P01 出土遺物

図版 13.



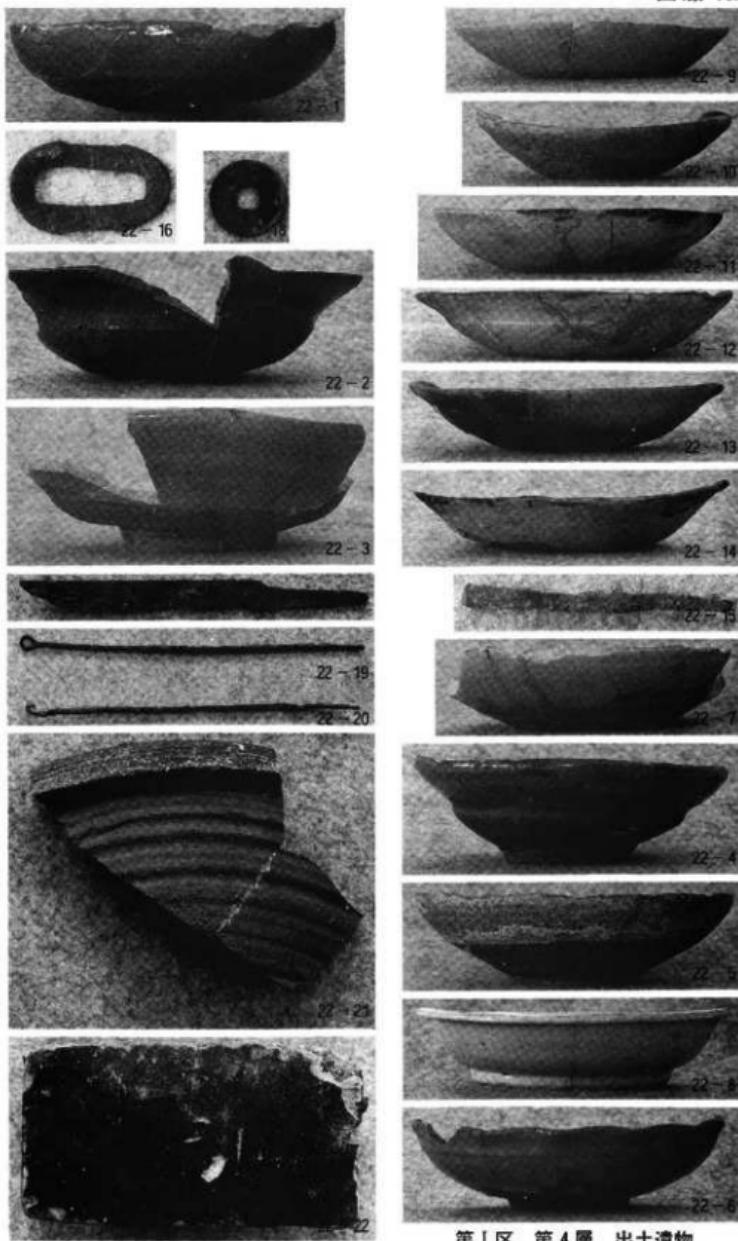
第Ⅰ区 第3層、第3遺構面S101、S102出土遺物

図版 14.



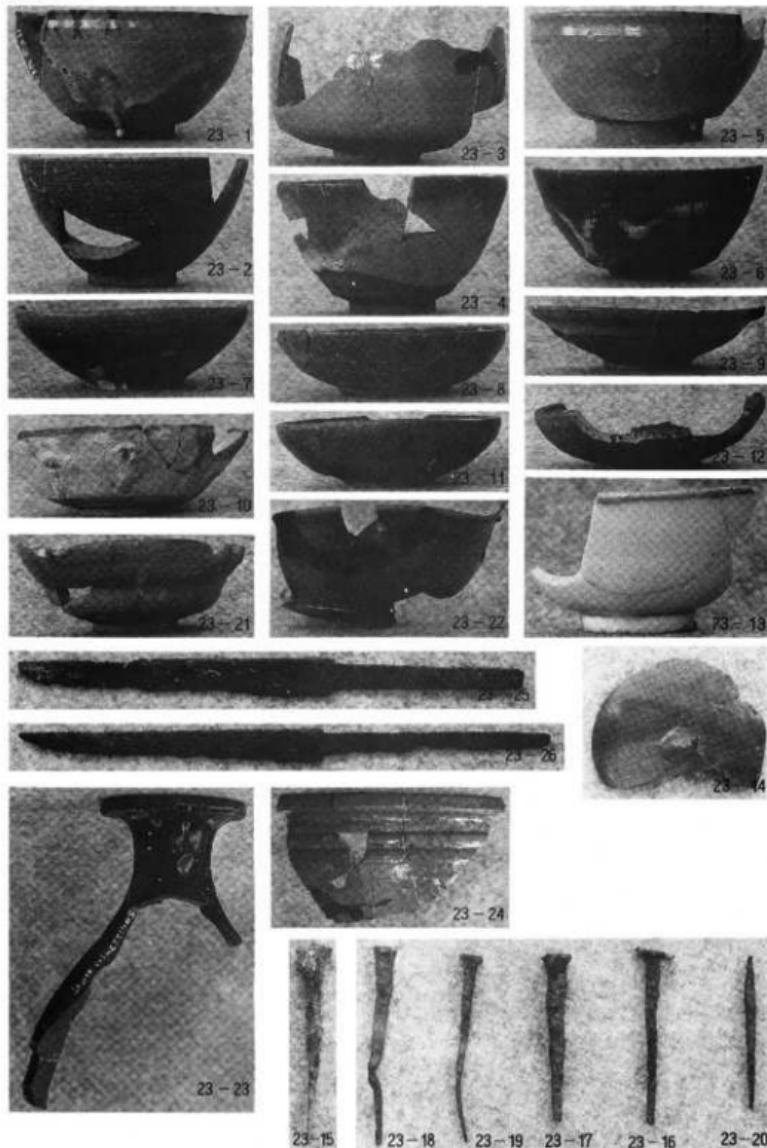
第 I 区 第 3 遺構面 S105、S108、S101、S102 出土遺物

図版 15.



第1区 第4層 出土遺物

図版 16.



第1区 第4構造面 出土遺物



1. 昭和61年度調査区 第Ⅱ区 遠景（西から）

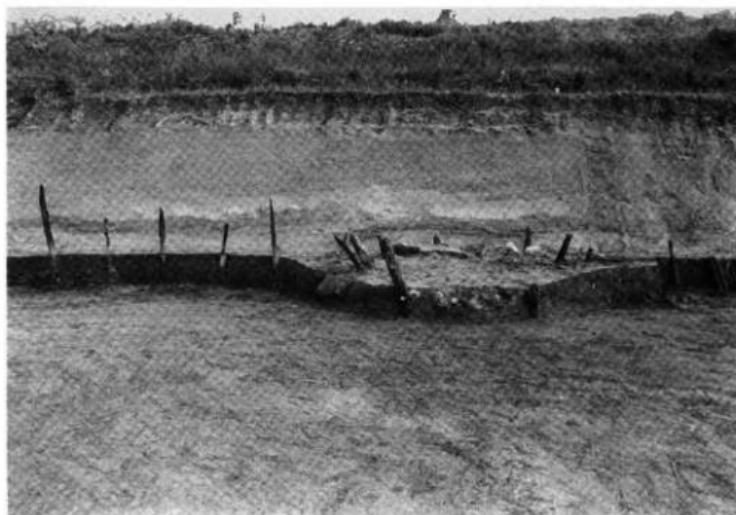


2. 昭和61年度調査区 第Ⅱ区 遠景（南から）

図版 18.



1. 第Ⅱ区 第1遺構面 検出状況（南から）



2. 第Ⅱ区 第1遺構面 栅状遺構検出状況（西から）



1. 第Ⅱ区 第2遺構面 検出状況（南から）



2. 第Ⅱ区 第2遺構面 石列遺構検出状況（東から）

図版 20.

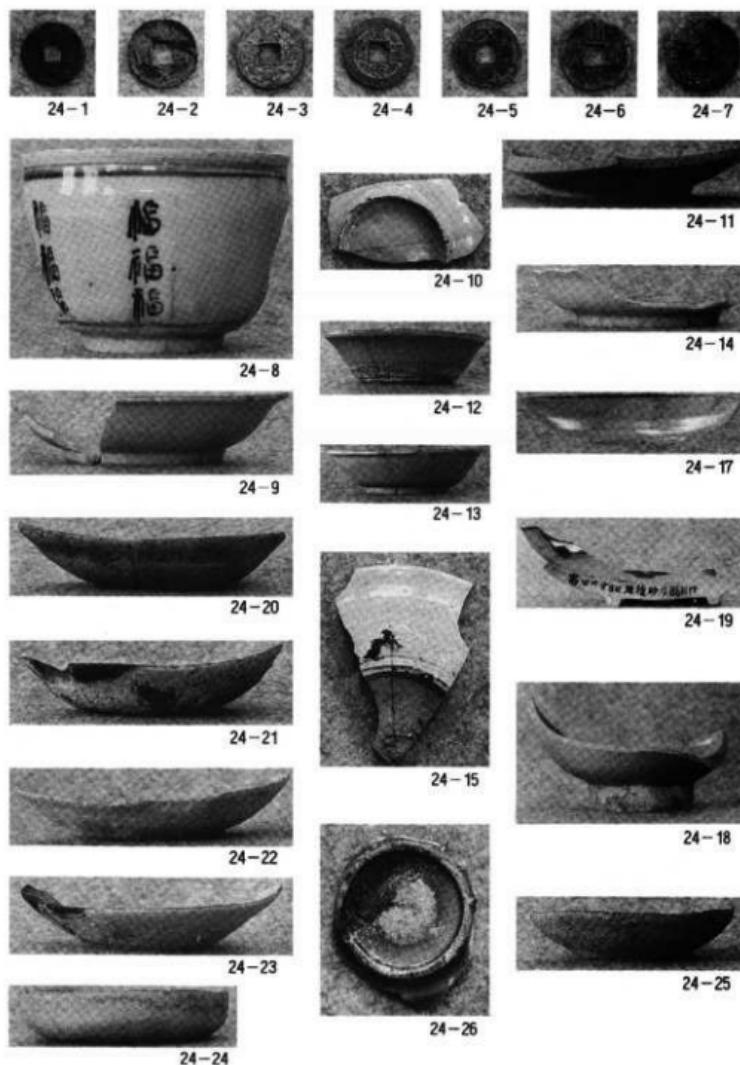


1. 第Ⅱ区 第2遺構面 集石遺構検出状況（南から）



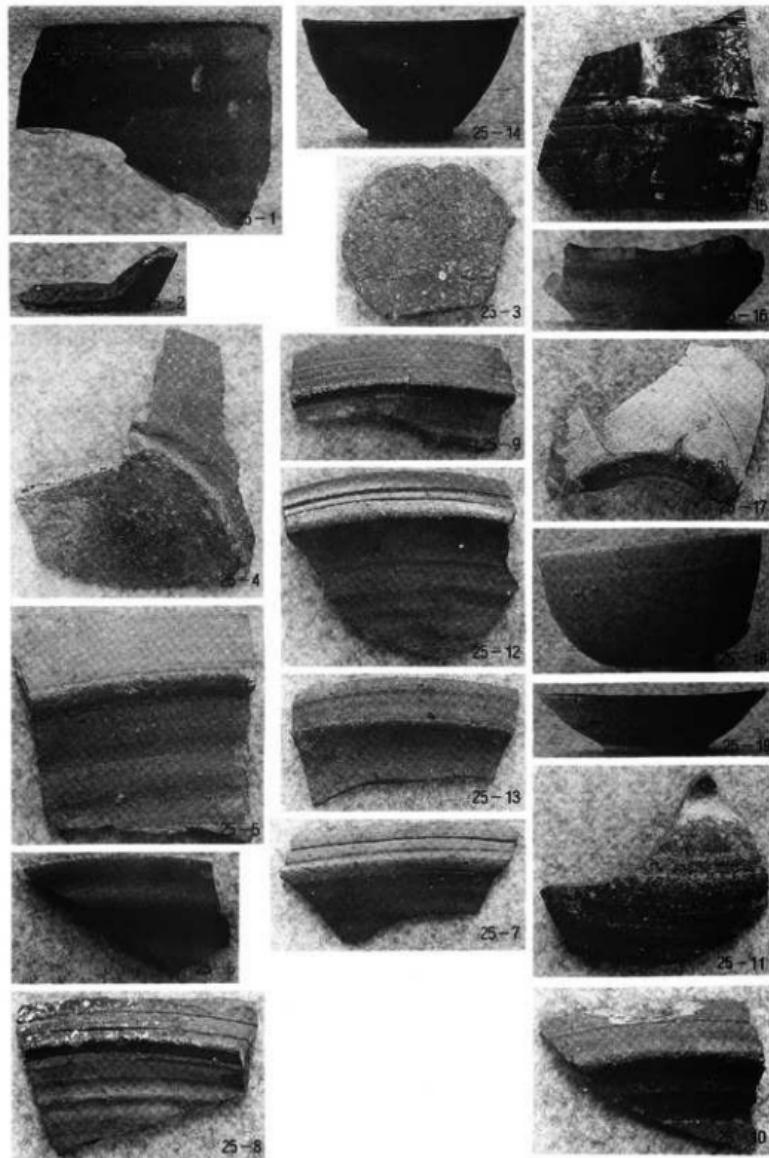
2. 第Ⅱ区 第2遺構面 棚状遺構検出状況（南から）

図版 21.



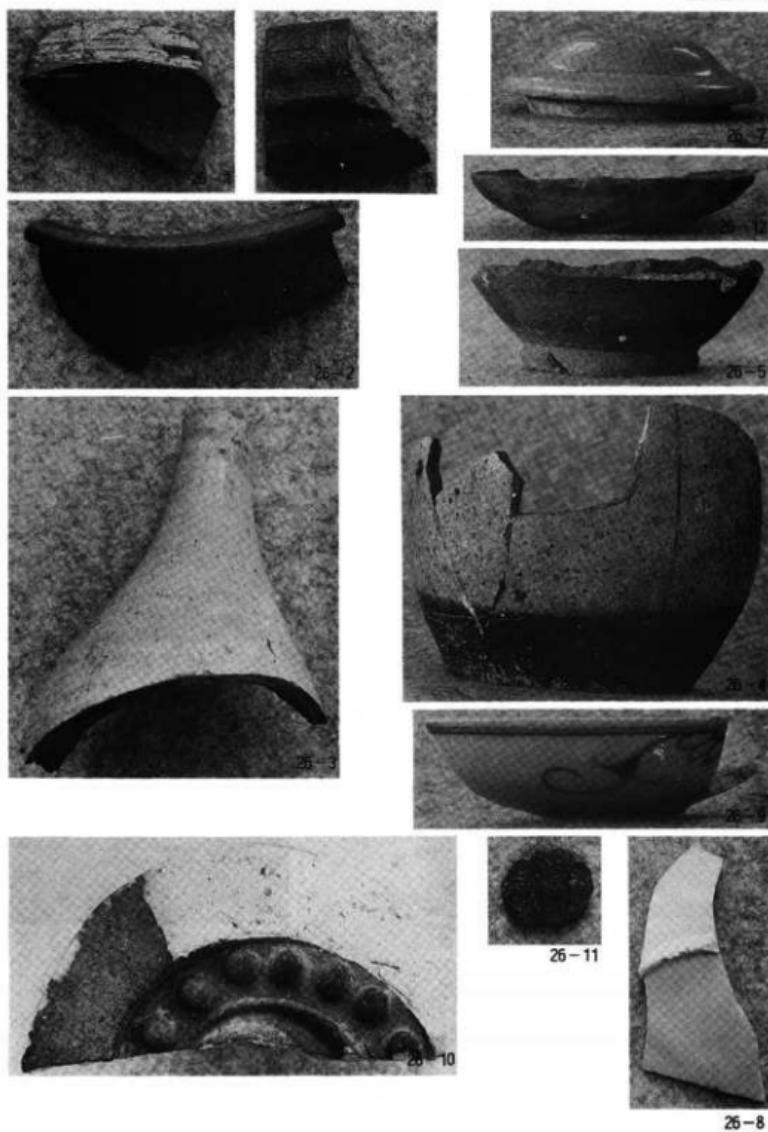
第Ⅱ区 堆積砂層出土遺物

図版 22



第Ⅱ区 堆積砂層出土遺物

図版 23.

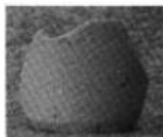


第Ⅱ区 第1層・第2層・第3層出土遺物

図版 24.



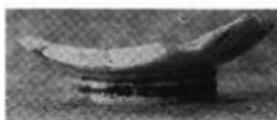
27-1



27-4



27-2



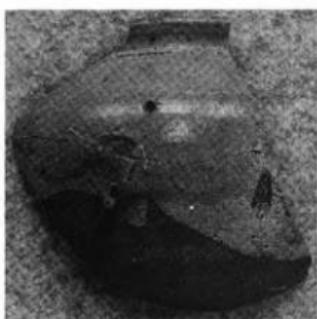
27-5



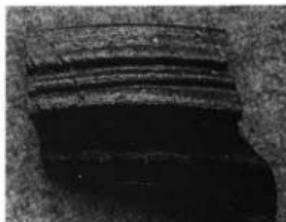
27-3



27-6



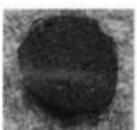
27-7



27-11



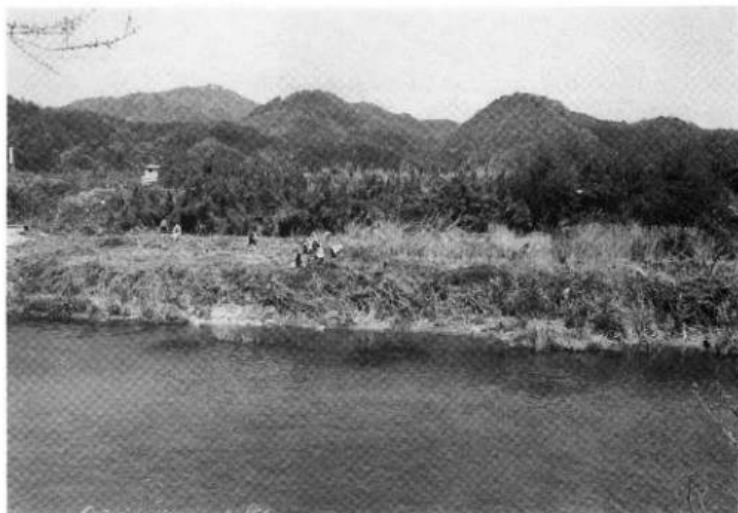
27-10



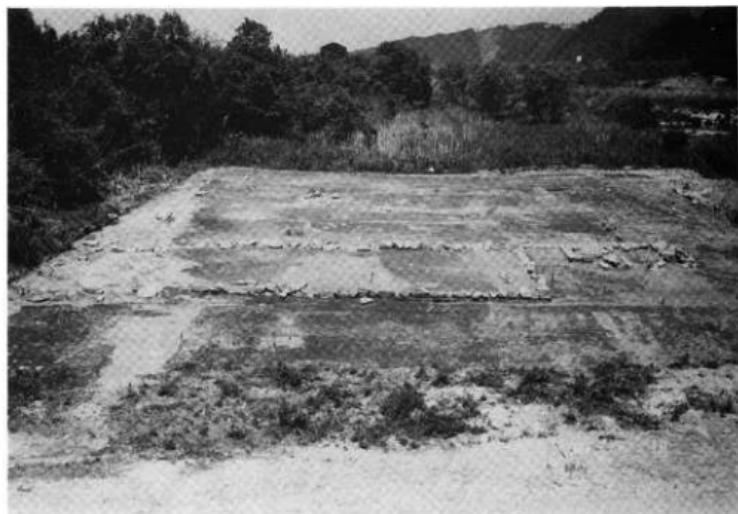
27-9

第 II 区 第 3 層出土遺物

図版 25.



1. 昭和62年度調査区 第1区 遠景(東から)



2. 第1区 第1遺構面 検出状況(南から)

図版 26.



1. 第1区 第1遺構面 掘立柱建物跡 (SB003) (西から)



2. 第1区 第1遺構面 築検出状況



1. 第1区 第1造構面

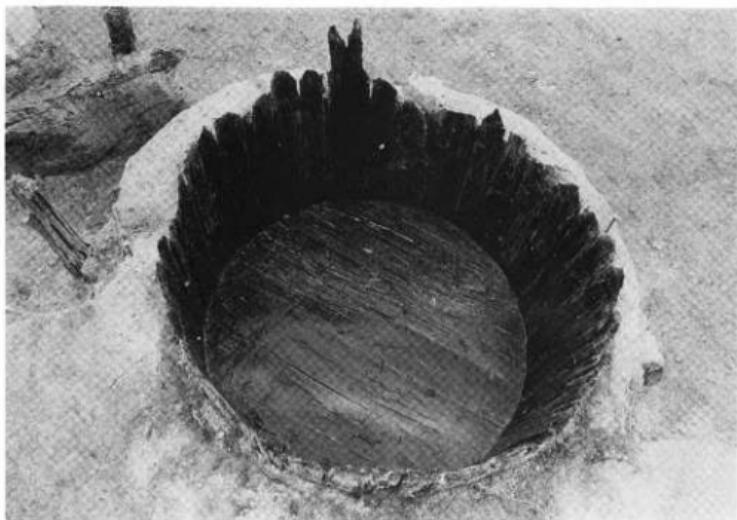


2. 第1区 第1造構面 灌漑状石積施設

図版 28.



1. 第1区 第1遺構面 曲物遺構 検出状況



2. 第1区 第1遺構面 曲物検出状況



1. 第Ⅰ区 第1遺構面 円形石組施設検出状況



2. 第Ⅰ区 第1遺構面 集石遺構検出状況

図版 30.

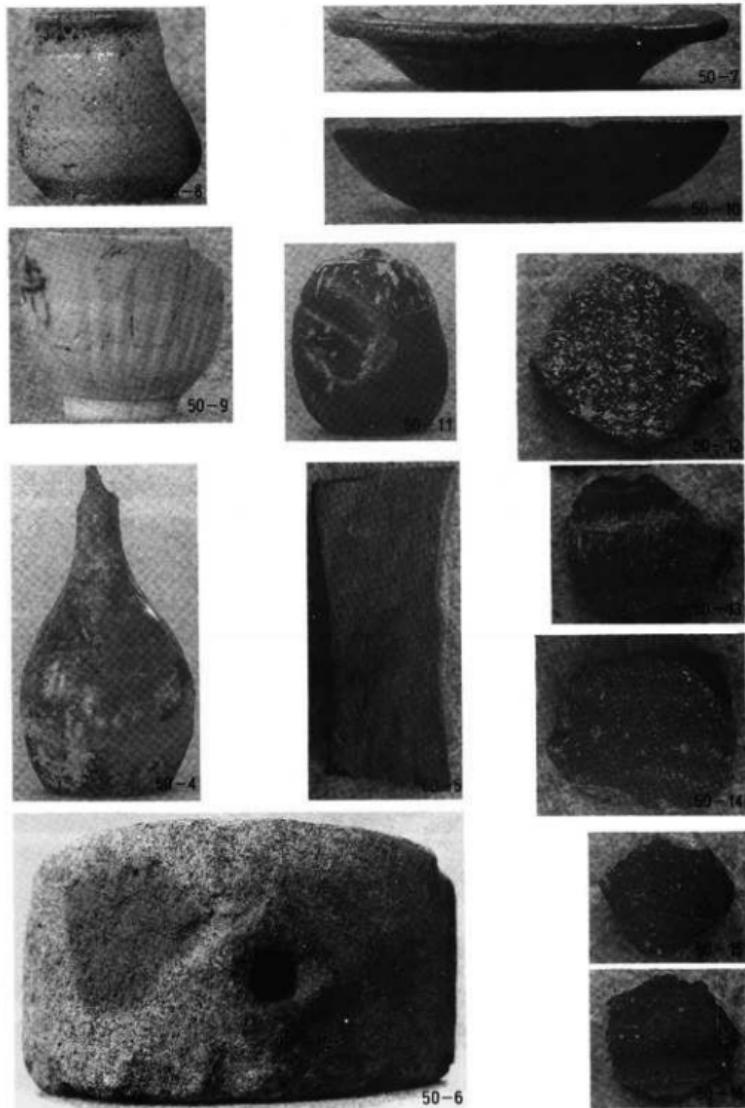


1. 第1区 第2遺構面



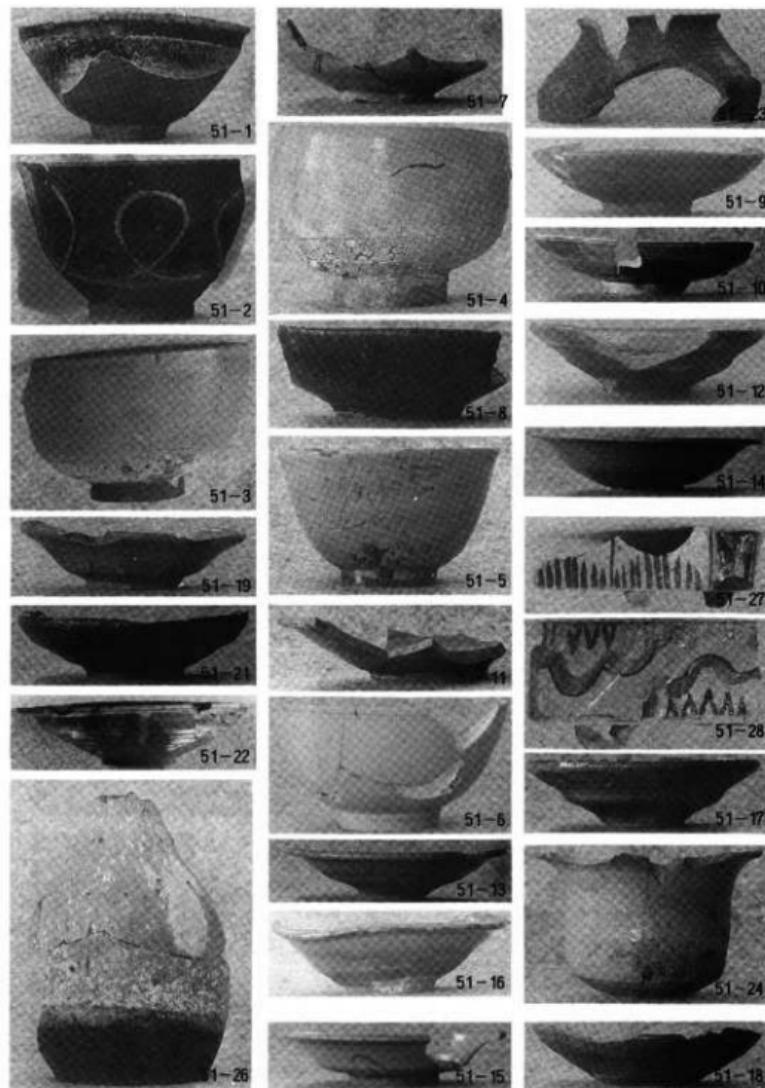
2. 第1区 第2遺構面 井戸跡 (SE001)

図版 31.



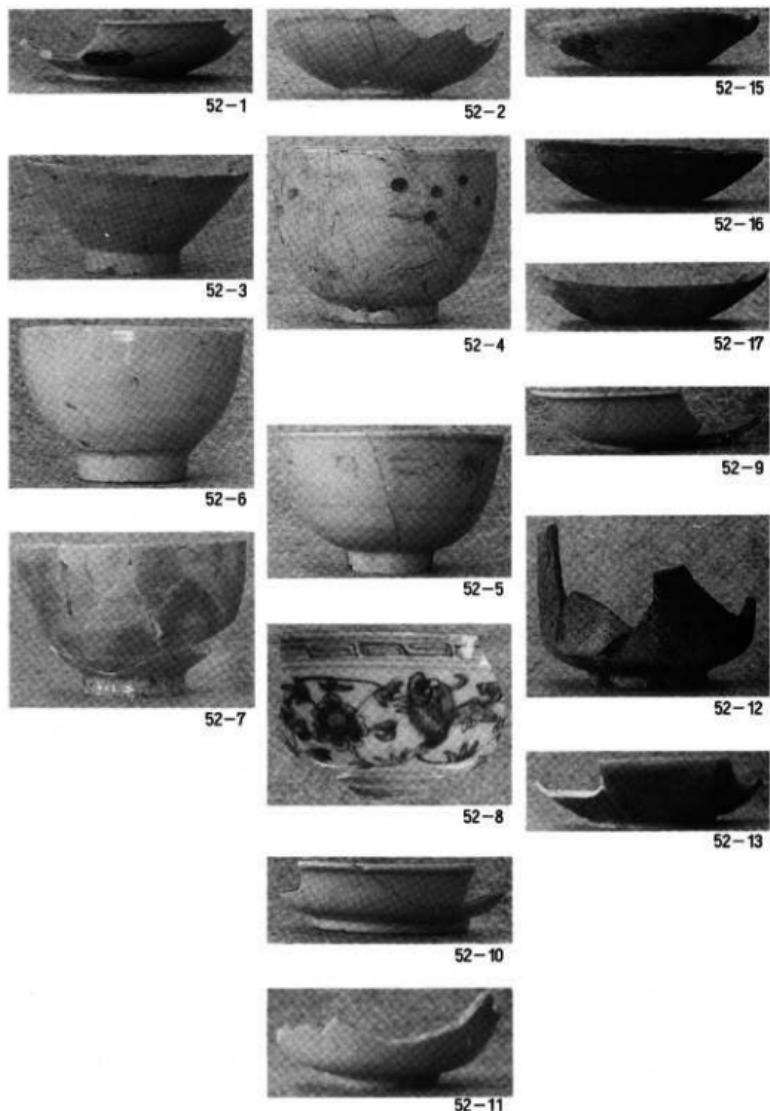
第1区 表土層・第1層出土遺物

図版 32.



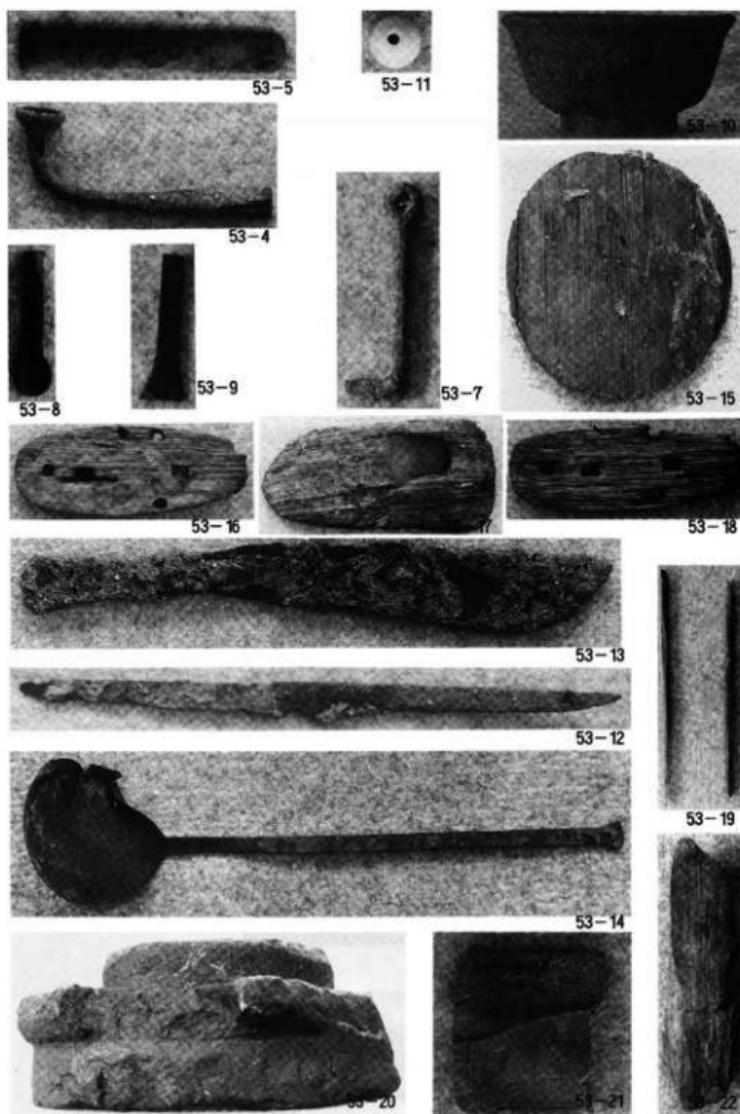
第1区 第1層 出土遺物

図版 33.



第1区 第1層 出土遺物

図版 34.



第1区 第1層 出土遺物